
マジシャンズ・リリック

カンダユウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジシャンズ・リリック

【Nコード】

N6024F

【作者名】

カンダユウヤ

【あらすじ】

日本のとある市にある魔法を学べる学校「私立カシミシユナ学園高等学校」ここで巻き起こる摩訶不思議な出来事。無愛想な少年、水海道雅毅と、魔法使いを夢見る少女、柴原海涼。この二人の関係性も気になるところ。

プロローグ（前書き）

この作品は、過去いくつもの新人賞に応募してきました。しかし、どれもいい評価はいただけませんでした。次に評価していただくのはあなたです。

プロローグ

プロローグ

そこには果てしない闇しか存在していなかった。全ての光を吸い込もうとする、邪悪で禍々しいフィールドが張り巡らせられている。その世界は一点の光もなく全てを黒一色に染め上げ、何者の侵入も拒み弊害をも与える絶対的な支配者。

凜とした空気を漂わせながら、冷静にこの時に味わう安らぎを感じつつ規則正しい呼吸を繰り返す。

コツ コツ

静寂という絶対の力を誇示する中に突如闖入する不協和音。一定の律を掻き乱し、徐々に進行していく負の力。その力は反響を繰り返し、無数に降り注ぐ雨音のように空間を埋め尽くしていく。

「ふう、この学園は謎が多すぎる。一体、これまで何部屋に侵入したことが……」

「ええつとですね、もう、15部屋になりますう」

足音よりも存在感のある二つの声。

一つは、澄んだ空気のような清潔感ある心地いいもの。もう一つは夏場の素肌に張り付く汗のような、ジトツとした不快感を与えるゆったりとした口調の声。

「二人とも、口を慎むんだ。僕達は何の目的を持って行動しているんだ？」

ここで戒めの言葉を掛けるオクターブの低い声。その声を受けて他の音色の違う声は発声を一端止める。それは、自分よりも地位の高い者に従順に従っているようである。

「分かっているリッド。自分達の目的ぐらい承知してる」

「マリー達の目的は、とっても危険な魔術の記されたレポートを見つけることです」

「その通り。僕達は、そのレポートを手にするため行動をしている。学園の関係者に気づかれることなく隠密に。例え、闇に閉ざされた室内だろうと完全に人氣がなかるうと、慎重に冷静な判断をしなければならぬ。そのことは、常に頭に置いていて欲しい」

オクターブ低い男の声は諭すと、暗闇の中で手の平を差し伸べ手の平にピンポンほどの大きさの発光体を浮かべる。

「うわあ、とっても明るいですう。みんなの顔が見えますう」

発光体の放つ温かな明かりの中に浮かび上がる三人の若者の顔。発光体を浮かべた青年は、鼻筋の整った欧米人で金色に煌めく髪に、グリーンの色素が定着した瞳は完全に黄色人種ではない。両脇の力強い特徴な少女は、セミロングで栗毛色の艶やかな髪を光に照らしながら、円らな碧眼の瞳で浮かぶ発光体を見つめる。そして、唯一の日本人である彼女は、美の象徴であるかのように長い黒髪を伸ばし、自分の感情を表に出させないよう左目を前髪で隠している。

三人は発光体を囲むかのように床の上で体勢を低くしている。他の侵入者に気づかれぬよう配慮しているものの、暗闇に閉ざされた室内を何らかの発光するものがあっただけですぐに見つかってしまう。誰も来ないという低確率の博打を打ちながら、彼らはあるものを求めていた。

「よし、手早く搜索に移ろう。いつ何時、誰かが入ってくるかわからない」

「いい加減、探すのにも飽きた」

「そうですかあ？ マリーはいろんな面白いものを発見できて楽しいですよ」

互いの声が聞こえ、互いの顔を伺い知れる距離の中、三人は行動に移ろうとしていた。

そこへ、

「……先生、この部屋なのか？」

「はっ、はい、間違いないと存じます」

不意に聞こえてくる上下関係の明白な二つの声。一人は重々しく

年輪を重ねた男の声で、

もう一つは媚びへつらう腰の低い男の声である。暗闇に紛れ、こそそと行動をしてる人物の目的は一つ。関係者に気づかれては困るようなことをこれからするのだろう。

「和鍋先生、厚かましいことかもしれませんが、この学園にそのようなレポートが存在なされると御思いなのですか？」

言葉の端々に、控えている男に対しての畏怖がありありと浮き彫りになっている。そのように思うまで、敬服している男は偉大な人物なのだろうか。

「何を寝ぼけたことを。私は、この場所にあると信じているからこそ、何十年も間勤務しているのだ。何が楽しくて餓鬼達に教鞭を揮わねばならぬのだ？ あのレポートが存在してるという確信があるからこそ、私は探している」

人を見下し配下に置くように、和鍋という人物に乗った男ははっきりと断言する。

「でっ、ですが、もう何十部屋と地下の研究室を搜索したじゃないですか。最近、教師達の間でも風当たりが悪くなる一方ですし、成果の出ない搜索なんてするだけ無駄です」

「何だと！ 貴様、私の恩情を裏切るつもりか！ 私がこれまでお前にどんな利得を与えてきたと思っている。私がいなければ、貴様など一学生徒よりも劣る存在だったはず。それを、わたしが拾い上げ一端の教員に育てたというのに、恩を仇で返すとはな」

言葉の圧力で腰の低い男を窮地に追いやる。それはまるで権力を笠に着て弱者を圧制する者のように、自分の思い通りにならない人物に圧力を掛ける。

「そっ、そんな、滅相も無い。ぼっ、僕が言いたいの、更に慎重に行動をしなければいけないということです。このような行為が学園長の耳にでも入ったら、即解雇処分にされてしまいます」

「フン、あの老いばれに何が出来る。役職は偉いが、魔力なら私のほうが遥かに上回る。いざとなれば、脅しても何でもすればいいこ

と。さつ、無駄話は終わりだ。探すぞ」

ここまでのやり取りを物陰に隠れ聞いていたリッド達。自分たちと共通するものを探していると同時に、まだ探しあぐねていることを理解する。

「和鍋か……あいつも探しているとなると、一刻を争うな」

「あいつの手に渡ると、どうなるか分からない」

「マリー、あの先生嫌いですう」

暗闇の中、互いの気配だけを察知して言葉を交わす。

自分達の他に探している者達の存在を確認したリッド達。それは、同時に見つかるのは時間の問題であることを物語っている。

「……必ず、僕らで探し当てるんだ」

1章

一章 無関心な魔法使い

ここはとある地方都市。

過疎化・統合合併が波及的に広がりつつある昨今において、辛うじて『市』というくくりの中で行政の管轄下にあるこの地。都心のような高層ビル群や、周囲を取り囲むような山地など無い中で、これほど注目すべき点の無い都市は存在したことが。

別に、市町村が合併して新しい地名になろうが住所が一新しようが関係ない。地球の表面を重く暗い暗雲が立ち込めるような、地球の危機的状況に陥ることは重大なことだか、この少年、水海道雅毅にとつて空以外のこと全てがどうでもいいことだったりする。

九年間という義務教育の最後の年、一般的な中学三年生の学生なら一度は気にするであろう進路。中には、中高一貫教育の学校だって存在しているが、次なる進学となると高等学校となる。自分の学力に合わせたり、その校の特色を吟味し自分に合った高校を選択するだろう。しかし、雅毅は安易な考え一直線のもと、距離の近さ、学力のレベル、通学方法の手軽さから私立カシミシユナ学園高等学校に入学した。

当初、変わった名前だなあと思ったりしていたが、学校の内容も他の高校と比較対照にならない特殊なものだと、授業開始日から思い知らされたのだった。

日本各地（ちゃんと調査はしていない）のどこを探しても、現実世界に有りえるはずのない『魔術』を教える学校なのだ。勿論、国・数・英・理・社も必須教科に含まれ勉強する。しかし、この校では平行して魔術に関するノウ・ハウもカリキュラムに組み込まれており、ここに入学する生徒の半数以上がありもしない（独断）魔法の力を信じ入学し勉強に勤しみ巣立っていく。

事前に何もリサーチしないまま、雅毅はこの学校に入学し始まったばかりの学園生活を過ごしていく。日常と非日常の中で始まる、カシミシユナ学園で。

でもって、ここはカシミシユナ学園に通う三学年が集まる教室棟。私立校だけあり、校舎は赤茶色のレンガ造りになっていて気品と格式高い装いをしている。三階の最上層に新入生の一年生が使用し、進級するたび下層の教室へと移動する仕組みになっている。

その最上階の階層、ちょうど真ん中の教室の窓辺に背を向け佇む制服の少女。髪を首の下で切り揃え、後ろから見ると、まるでヘルメットを被ったようなヘアカットの女子生徒が誰かと会話をしている。近くに寄って聞いてみよう。

「うえーん、礼央奈ちゃん、どーして、ねえーどうしてなのぉ」
何を思ってたか、その少女は会話の最中でいきなり涙を滲ませ嗚咽を始める。教室には大勢のクラスメイトがいるものの、誰も気に止める様子はなく思い思いに時間を過ごしている。

「グスン……やっぱり、私って才能ないのかなぁ……」

「そつ、そんなことないよ柴原さん。今はまだ習いたてだから、力をコントロールできないのは当然だよ」

懸命になって泣き出しそうな少女を慰める、礼央奈と呼ばれた少女。眼鏡が似合う知的なイメージの彼女だが、声の聞こえる範囲はかなり狭く、向かい合った少女しか聞こえていない。

「でつ、でも、実習の授業であんなことしちゃったんだよ……自信なくすよぉ」

どうして、新入生である彼女がここまで落ち込むのか。

では、ここで振り返るとしよう。

柴原さんこと柴原海涼は、さきほどあったばかりの実習（物を動かす）でド派手なことをしてかしてしまったのである。

彼女は雅毅とは違い、この学園には本当に魔法使いになりたいという夢を叶えるため入学した。国内にこんな学校があるということ

を知り、親元を離れ寮に入り学校に通うことになった。両親にはどんな高校なのかはつきりと告げてはいない。本心を告げることできなかった海涼は、心の中に罪悪感を抱えながらこの地にやってきた。自分の夢を叶えるため、両親をがっかりさせないために。

そんな彼女に突きつけられる現実の壁。

初めてパソコンを触るように、魔法も使いこなせるには多少時間がかかると思っていた。持ち前のがんばり精神で一日も早く一人前になるんだと。だが、今さっきあった授業で彼女はやってしまったのである。

「うえーん、あんな失敗しちゃったら、魔法使いになれないよぉー」
「でっ、でも、皆さん動かない中で、柴原さんはちゃんと動いたじゃないですか？ それは、評価に値すると思いますよ」

事件現場を目撃してるだけあって、礼央奈は更に慎重に海涼を慰める。

（彼女の傷に塩をすり込むようなことはしたくありませんが、皆さんにどのような状況だったのかと知ってもらう必要があります。そして、海涼が落ち込む理由を分かってくださるはずですよ）

学園内にある実習室。

ここでは魔術を学ぶ上で、机上だけで学ぶだけでは理解できない実証をもとに学習するために使う部屋（理科の実験や、家庭科の調理実習と同じ理屈）。

教室ではできないことも、こういう実習室なら可能になる。今回した『ある物体を動かす』ということは、入学したばかりの新生に必須な魔力をコントロールすることと結び付いている。

新生には魔力をコントロールするため、あらかじめ制御するための媒体（杖）を持参するように定められている。杖といっても使いこなせなくては意味がなく、個人個人の身近にあるものなら何でも可となっている。学校指定の杖という代物もあるが、それぞれが手に馴染むものでなら魔術の上達も早いだろうということで制限はない。

そこで、海涼はお気に入りの室内まで持ち込む、柄の先端がクマさんの傘を杖として使うことにした。クラスメートは座ったままトライしてる中で、海涼は椅子から立ち上がり両手で傘をしっかりと握る。そして、木片に動けという念を送り続け魔力を高めていく。

「さあ皆さん、集中、集中ですよ」

妙にイントネーションのおかしい外国人教師が見守る中、クラスメイト達は思い思いの杖を使い木片を動かそうと真剣に取り組む。顔に見たこともない血管を浮かび上がらせるが動かない生徒。辛うじて微動させるだけの生徒と様々。今の段階で動かせるのは極めて稀なことで、動かせない生徒が半数を占める。誰もがまだ無理だという中で、海涼は偉大なことをしでかしてしまったのである。

ボワツ！

突然室内に沸き起こる魔法っぽい効果音。

クラスメイトの全員がそんな実験なんかしてたっけと思うほど、見事な音と共に白煙が上がる。

「Oh！ こっ、これは何事でーす！？」

全体を眺められる教壇の上にいた教師は、煙の発生源へ早足に向かう。煙の中では白煙を吸い込み大いに咳き込む海涼と、微動だにしていない木片に……変化が生じていた。

「ケホツケホツ……えっ、ええっ！」

傘の柄を握ったまま顔を真っ白にして咳き込む海涼が見たもの、それは木片に劇的な変化を与え、ありもしないものを具現化させていた。

「柴原さ〜ん、何ですかこれは？」

右手を懸命に振り白煙を掻き消す教師。

「はっ、花、です、よね？」

自分でもびっくりした様子で、教師の質問を質問で返す。

「アウ……柴原さ〜ん、それは見れば分かります。ワタクシは木片を動かして下さ〜いと言ったのですよ、それをなんですか？ このセンスの欠片もない下品な花は？」

一般的に花というものは美の象徴のように扱われるが、海涼の発生させた『花』は、何の美もセンスも与えないクレヨンで殴り書きしたような花で、木片から突き出しているのだった。

「ムムム、私にも分からないです……」

海涼自身見当もつくわけなく、難しい顔をしながら傘を床に突き左手を顎に当てている。

「柴原さ〜ん！ もっと真面目にやってください〜い！」

絶叫に近い声のような奇声を発する教師を傍らに置き、海涼は再度木片を動かそうと更に真剣に傘の柄を握る。

「う〜ん、どうしてできないのかな？」

眉間に皺を寄せるまで真剣さに磨きを掛け、海涼は取り組もうとする。クラスメイトの視線を集める中、教師も混じって次なる一挙一動に注目する。

「う〜〜〜ん！」

杖として使用する傘に魔力を集中させるイメージをしながら、海涼は竹刀のように正眼に構え、木片の上空に振り下ろしピタと静止させる。

シュン ドガン！

その場にいた者、誰もが何が起きたのか理解できていた。皆が目を丸くする中、不自然に煙が出ている場所に気づき、一斉にそちらに向く。すると、さっきまであった花の生えた木片が、原型を留めたまま壁にめり込んでいたのである。

「柴原さ〜ん！ なんてことをしてくれたんです！」

「うわ〜ん、ごめんなさ〜い！」

持っていた傘を落としかがみ込んで頭を抱える海涼。注目していたクラスメイト達は、堰を切ったように一人をきっかけとして笑いが伝染していく。しばらく室内を笑いが満ちし続けたが、授業の妨げになりかねない事態に対し教師は止めるよう指示を出す。

「お〜っ！ 水海道クンブラボーですよ、完璧で〜す！」

教卓に戻る途中目に止まった生徒。仏頂面で小枝を振るいながら、

彼は目の前にある木片をいとも簡単に動かしている。

「あつ、そうっすか？」

その表情にはこれとつて懸命さも微塵も感じさせず、余裕っすつて感じで四角形を描くように机の上で動かし続ける。

「いつの間に、できるようになったのですか水海道クン？」

「さあ、オレにもさっぱり。てきとーに動けって思ってたら、勝手に動いちゃって。何なら、浮かせましょうか？」

適当に振っていた小枝を止めると、ぐるぐる円を描くように動いていた木片も止まる。

「じゃっ、浮かばせます」

静止した木片と持った小枝を直線上の位置に置き、小魚を釣り上げるようにヒョイと上げると木片も釣り上げられるように持ち上げる。

『おおっ！』

笑い声から一転、驚嘆の歓声がワツと上がる。それはまるで、マジックショーを見ていた観客がマジシャンのトリックで驚かされるようである。

「すっ、素晴らしいっ！ 水海道クン、あなたは天才です！」

素晴らしい演劇を見終え、喝采を送るような拍手を教師がしたとたん、一斉に拍手が鳴り響く室内。

『水海道君……いいなあ』

と、いうことで、一躍水海道雅毅はクラスのヒーローみないな存在になり、柴原海涼は逆にお騒がせな天然娘というレッテルを貼られたのである。

「あんなの見せられたら、私、自信消失。ショボーン」

思い出したくもない過去を顧みてしまい、肩をがっくり落とす海涼。それを見ている礼央奈はゆっくりとした動作で海涼の肩を抱き、優しく慰める。

「また落ち込んで……もう、柴原さんそんなに落ち込まないの。あ

れくらい、今は出来なくても、二年生になる時にできてればいいんです。それにしても、どうしてそんなに焦ってるんですか？ 学校生活はまだ始まったばかりなんですよ」

「礼央奈ちゃんに話してたよね？ 私の子供の頃からの夢」

何とか立て直し、海涼は元氣を取り戻し始める。

「はい、もう中学校の時からずっと聞いてますよ、柴原さんの夢。魔法使いになりたいんですね？」

理解しているということを表すように、礼央奈は言葉と同時に視線を合わせる。

「うんうん。だって、魔法が使えるって素敵だって思わない？ 絶対必ず、魔法使いになるって信じてきたから、この学校に入学したんだよ。だからさ、早くなりたくってウズウズしちゃってるんだ」まさに瞳を輝かせるというのはこれといった感じで、海涼は魔法に対してとてつもない憧れを持っている。

「その気持ち分かります。一刻も早くになりたいって思う気持ちは、ごく当然なことです。でも、急ぐことは 아닙니다。ゆっくりでも前進さえしていればいいことなんですから」

「うーん、そうかなあ？ 時には急ごうよ、遅刻しそうになった時とかはね」

ジョークを呟く余裕の出してきた海涼。その時、教室を見渡した先に、注目すべき人物がいた。水海道雅毅である。

「あーあ、私も水海道君みたいにならないなあ……」

羨望の眼差しを雅毅に向けながら、海涼はぽつり呟くのだった。

時は経過し、昼食を済ませた雅毅は友達歴の長い翔馬に連れられ構内をぶらぶら歩いていた。

絶好の散歩日和で、校内にはもったいないほど温かな陽射しに溢れ、心地良い風は思わぬこともしてしまう。

「うっほー、ここは天国だな雅毅」

「ん、何が？」

周囲に視線を配りながら、翔馬は顔をニヤつかせる。

二人は校舎から離れ、グラウンドや軽いスポーツができる芝生が敷き詰められた広場に来ていた。そこには、雅毅達のように外へ出た学年を越えた生徒達が思い思いに羽を伸ばしている。

「チツ、分かつてねえなあお前。これを見て何とも思わないのか？」
立ち止まる翔馬に合わせ、ズボンのポケットに両手をつ込んだままの雅毅も止まり周囲を見渡す。

「思いつて、何を？」

「はあ、お前は鈍感だねえ。ここをどこだと思ってるんだ？」

「……学校」

「そう、学校だ。それも、私服じゃない制服を着た生徒達が通う学校だ」

妙に意気込んで身振り手振りを加える翔馬。

「それが？」

「それがじゃねえよ！ 見てみる、あそこに誰がいる？」

翔馬の指し示す指先を無愛想に見据える雅毅。

「女子生徒」

「そうだ、女子生徒だ。どんな制服を着てるんだ？」

「見た感じ、セーラー服」

「どうだ？ 何か感じないか？」

「……別に」

「はあ、お前はつくづく夢がないな」

今度は肩をがつくり落とし、大きなため息を地面に向かって吐く。

「あの格好を見てどうも思わないのかよ？ あの丈の短いプリーツスカート。膝上20センチの樂園を」

「……お前、頭の中が溶けたのか？」

冷静に淡々と雅毅は、テンション上がる翔馬に対し異常者発言をする。

「溶けるかよ脳みそ！ ったく、お前はいつも無反応、無感情、無愛想だな。授業中なら分かるけどさ、女の子を目の前にしたとき

ぐらい、飛びつくぐらい感情をむき出しにしてもいいんだぞ」

オーバーアクション気味に、翔馬は更に雅毅に訴えかける。

「別に、そんなことする興味すらない」

「はぁ、お前は悲しい男だな。第一、お前は男としての本能に欠けてる。あんなミニスカートの女子高生達がわんさかいる学校の中にいて、関心が沸かないなんて知れたら、ゲイか何かに勘違いされるぞ！」

「そんな大げさな……」

「大げさだなんて失敬な。これは、男としての死活問題だぞ。男として生を受けた以上、異性に興味を持たないなんてことがあつてみる、ヒトを創造した神様に対して冒瀆してることになるんだぞ」

さらに声を荒げ、翔馬は男と女の関係のあるべき姿を熱く語る。

「それに、女子の制服には大きな利点がある。第一に、どんな靴下を履こうがむき出しになるすらりと伸びる太もも。そして、一番の重要ポイントはたまに見えるパンチラだ。故意にやつたら犯罪だが、風が吹いてふわっと浮かび上がった拍子に見えるあれば、まさに神のなせる業。神のなさった思し召しを無下に扱っちゃあもつたいないつてもんだ。ありがたく拝もうぜ」

何の恥じらいもなく、堂々とパンツのありがたい様を語る翔馬。

その顔は、どこか誇らしげで厚顔無恥の何者でもない。

「お前の発想、オヤジそのものだぞ」

黙って聞いていた雅毅の少なくとも多大なダメージを与える一言。

ティーンエイジャーの若者に効果を発揮するに違いない一撃。

「いいや、オヤジのパンチラはどうあろうと犯罪だ。社会が許そうが俺は許さない。俺のような若者が見る分には、犯罪にならない。というか、俺が犯罪にしない」

ニヤニヤと自分のしようとしている罪を誤魔化し、あやふやな扱いにする翔馬は、別に罪にはならないと主張する。だが、どこへいったって、犯罪は犯罪である。不可抗力を除けば。

「あゝ、いつ見えるんだろう。純粋な証、真っ白なパンツもいい

けど、ボーイッシュなストライプもいいし、女の子らしいクマさんもいいなあ。うゝん、水玉も捨てがたいし、大人っぽいランジェリーもいいかも……」

ひとり妄想の世界に没頭してしまう翔馬。

同級生としてあまり付き合いたくない雅毅は、気づかれないようなため息を吐き翔馬を残し違う場所へ行こうとする。

「なあ、お前はどんな……って、置いて行くなよっ」

翔馬が気づいた時には、雅毅は既に遠くに行っていたのだった。

入学してから数日が経過してるものの、新入生に学校の構造を理解せよというのは不可能なこと。冒険感覚で構内のあちこちを巡るのは可能でも、一度しか使用しない教室だって存在する。あれやこれやと急速に覚えなくてはいけない時期において、どこに何があるのかを覚えるには繰り返し学習が必要になる。

屋外に出ていた雅毅達は、学校指定の内履きに履き替え校内を散策しているうちに大きい体育館、大体育館そのまんまに来ていた。ここへ来る途中にも、同級生上級生問わず翔馬のエロエロ視線は止まることを知らなかった。視線が常に顔より下に向けられ、行き過ぎる女子生徒を品定めするように見続けていたのである。隣の雅毅は別に注意することなくよそ様だというオーラを出しつつ、突き返ってくる侮蔑な視線に臆することなく歩いていた。

「この学校は、なかなかレベル高いなあ」

これまで見てきた女子生徒から判断する翔馬。彼は今までどれだけの女子高生を見てきたのか知りたくもないが、そう彼は評価している。

「あれだけ短いんだ、いつ見れるか期待が膨らむぜ」

ニタ／＼と顔の筋肉が弛緩いきり、締まりのない表情を浮かべる。「オレは絶対、付き合わないでよろしく」

瞬時に釘を打ち、自分に被害が及ばないよう予防処置をする雅毅。大体（大体育館の略）は今まで過ごしてきた小・中学校よりも遥

かに広く、バスケットコートが一面取れば良かった体育館は、この学校では三面ぐらい使えそうな広さがある。左右にはギャラリもあり、開け閉め可能な窓ガラスが何十枚と左右にある。

「やっぱ、広いなあ。中学校と比べ物にならないぜ」

「そうだな」

大体のステージから見て後ろ側の入り口で立ち尽くす雅毅達。昼休みの体育館は、自由に開放され何らかの用事がない限り、バスケットやバドミントンなどすることができる。昼休みも中盤に差し掛かり、今体育館はバスケットをする男子やバレーボールをする女子で占拠されている。

「この中じゃサッカーもできるぜ、きつと」

「そうだな」

またしても聞いているのか聞いていないのか判断しづらい返事をし、雅毅はそれぞれスポーツしている生徒を眺めている。

「お前の返事、何の面白みも状況も分かんないぞ」

「あつそ」

頭のとっぺんに近い位置を一本指で搔く雅毅。これといって興味を示さず、ただ事務的に答えるだけの単純作業。

「いいねえ、まさに学校生活、青春真っ盛りって感じだねえ」。

さっそくカワイイ彼女見つけて、遊びまくりてえ」

一人盛り上がってる翔馬を一人残し、雅毅はとぼとぼと歩き出す。スポーツを楽しんでいる生徒の迷惑にならないよう外側を歩き、ステージから正面にあるギャラリへ続く階段の前で止まる。左右対称の中央から見る大体は、とても広く奥行きもありスケールの違いに驚嘆してしまう。

「やっぱ……高校は違うな」

ぼつり感想のような一言を呟く雅毅。

「おい、一人で行くなよな」

ようやく現実に戻った翔馬が雅毅の所までやって来る。

「もうそろそろ戻るか？ 次の時間、移動だし」

「あつ、ああ」

校内の散策を切り上げ、大体を出ようとした時、上の方から女子の声が聞こえてくる。

「荷物重いから、気をつけてね」

「はい」

見上げてみると、視界を遮るほど大きなダンボール箱を抱えた女子生徒が降りてくる。中身は定かではないが、大量に物が入っているのが慎重な足取りから推測できる。

「おつ、格好のチャームス。どんなパンツが見ちゃおつと」

同時に気づいた翔馬は、あえてスカートの中身を見てしまおうと階段下に移動する。

「止めとけよ、こんな所で……」

珍しく止めさせようと声を掛ける雅毅。その時、訴えかけるように聞こえてくる誰かの声。

『危ない！』

かすれたような、耳にやっと聞こえる小さな声。再度確認しようと、どこから聞こえてるのか方向を定めている矢先、それは現実に起きた。

「キャッ！」

それはスローモーションのように時間の流れを無理矢理歪め、自然の摂理に逆らった動きを見せる。

「くっ！」

自分だけが回りよりも素早く動くことができ、右のポケットに入っていた小枝を取り出す。ダンボールの中身である水鳥のシャツル、傾いて上空に浮かび上がるダンボール、そして階段につまづき前のめりに傾いていく女子生徒がゆっくり動く。

「止まれっ！」

落ちてくるものの全ての方向に小枝の先端を向け、心の底からそう願った。自分にそんな力など存在するはずはないと決め付けていながら、雅毅は無意識のうちに小枝を振るった。

刹那、重力に逆らうことなくそれぞれ落下していたものが目には見えないヴェールに包まれる。それはまるで下から息を吹き上げて遊ぶおもちゃのように、不安定ながらも落下が止まる。

「おっ、おい、何がどうなってるんだ？」

マジックのような非現実的なことを目の当たりにし、誰よりも近くで見ている翔馬は両目を見開き驚愕しきっている。

宙にふわふわと浮いたまま、雅毅は小枝を持ち上げ安全に着地できる場所まで後退する。

大体にいた誰もが雅毅の力に驚き、スポーツに勤しんでいた生徒も手を休め固唾を飲む。徐々に凄まじい力に魅了され、呼んでもいないのに人々が自然と雅毅の周りに集まりだす。

「すっ、すげえ……おう？」

上空に浮かんだまま移動する女子生徒を見上げている翔馬。その両目にしつかりと入ってしまった喜ばしき光景。

「こんな状況で見れるとは……ツイてる」

誰に聞こえるともなく呟いた一言。風にそよいでいるようにひらめくミニスカートの中、

翔馬が待ち望んでいたものがバツチリ捉える。

「……黄色」

逃すまいと一点集中して見続ける翔馬。誰にも気づかれまいとたかをくくって。

ゆっくりと大体のバスケットコートのセンターサークルまで後退した雅毅は、ゆっくりと右腕をゆっくりと下ろす。同時に重力に逆らって浮かび続けていたものもゆっくりと下降し、ふわっと着地する。

「えっ、ええっ！」

自分の身に起きたことが信じられない女子生徒は、自分の体を見回したり体を揺すって背中を覆っているマントをひっぱったりする。

「すっ、スッゲー！ スッゲーよ雅毅！」

ひとり飛び抜けて騒ぎ立てる翔馬。

そして、巻き起こる拍手の渦。迫力は数段落ちるが、ひとりを褒め称えるにはそれで十分だった。

「誰なんだ、あの生徒……」

大体の中を見ることの出来る廊下の窓辺、薄気味悪い雰囲気を放った白衣を着ている男。

その白衣にも清潔感はなく、ずっと使い続けた証のような汚れが付着している。

「あの力……侮れん存在になるな」

眼力だけで人を殺してしまいそうな据わった眼で、男は光景を見据えていた。

「見事なパフォーマンスだったな」

ステージ側の入り口付近から見据える意味深な視線。

「一年生にしては、なかなか使いこなしている」

「あの一年生さん、すごいですう」

それぞれ表情や言葉は違えど、口々に賛辞を送っている三人。

「これからのことを考えると、彼を引き抜いておいた方がいいみたいだ」

リーダーらしき金髪の少年は、何か確信を得たように微笑するのだった。

自分が何をしてたのか分からなかった。

気づけば、大体の真ん中辺りまで来ていたし、何をして引きつけたのか周囲には多くの生徒が群がっていた。そして、自分の右手には何故か授業で使った小枝が……。

「すげえよ雅毅、お前、あんな才能があつたんだな！」

「才能？」

いつも興奮している翔馬は見慣れてるものの、興奮している理由が自分にあるというのが理解できない。

「無神経、無頓着、無愛想のトリプルセブンのお前が、魔法を使って人助けすんなんて信じられねえよ」

「人助け？」

自分にも身に覚えのない言葉だった。一般的には、魔法で人助けは無理だとしても、意識的に『助ける』なんて指令を頭から出した覚えがない。体力でカバーし、捨て身に助けることなら誰でも出来る。しかし、まだ発揮はおろか魔法の『ま』の字も知らない段階で、人ひとり、ケガを負わせず助け出せたという点がおかしい。

「……トリプルセブンは、余計だ」

自分の身に何が起こったのか半信半疑のまま、雅毅は普段はしないツツ込みを入れる。

「あつ、あの、ありがとうございました」

助けられた女子生徒は、ちょっとおどした様子でお礼を述べる。助け出した彼女は無事だったが、散らばったシャトルはダンボールの中に数個を残し後は全て散乱している。

「……あつ、ああ、どうも」

性格が出ているのか、自分でしたという自覚がないだけあつて曖昧な言葉で濁す。助けたという自覚がないにしては、右手にある小枝が妙な違和感を与える。

「お前、やっぱり魔法の才能があんだよ。きっと、もつとスッゲー事できるぜ」

翔馬のテンションの高さはどの場所でも違和感なく発揮されるが、雅毅の心にはある声が引つかかっていた。

『危ない！』

このフリーズ。別に言葉自体は何も怪しくはないが、この言葉を発した人？ もしくは、

虫の知らせか何か分からないが、この声の主が何なのか分からない。「もう、気を付けなさいって言ったばかりなのに……助けてくれてありがと。それにしても、すごい力を持つてるのねあなた」

助けだした女子生徒に荷物を持たせた女子生徒も加わり、注意と

共にお礼を述べる。やはり、あの魔法は皆が気になるところか。

「あれはたまたまって感じです。ケガが無くて良かったです」

「ホントよね。さっ、ポーっとしてないで、シャトル拾いましょ、時間がないわ」

散乱したシャトルを拾い始める女子生徒達。取り巻く生徒等も時間が気になり始め、徐々に輪が解かれていく。そこへ、

「まっ、待つて！ そのすごい人っ！」

解れ出した輪の中に飛び込んでくるは一人の女子生徒。しかし、取り巻いていた生徒とは異なり、とてつもないオーラを迸らせ瞳を爛々と輝かせている。

「あつ、あの、私に魔法を教えてくださいませんか……」

言い切り終えようとした時、その中心にいた人物の姿が目に入る。

「あーっ！ きつ、君は、水海道雅毅君！」

「あんた……今日、木片に花を咲かせて、壁に穴開けた奴」

冷静さが逆に冷酷感を与えてしまったらしく、花さか娘、海涼が泣き崩れる。

「うえーん！ 忘れようって思ってたことを、思い出させないでよお」

「こんな場所で泣くな」

人がまばらになるとはいえ、人が皆無ではなかったため、泣かれるもんなら目立ってしょうがない。

「グスン……ごっ、ごめんなさい……」

涙で潤む目頭を擦り、ようやく立ち直り始める海涼。

「それで、大魔法使いの雅毅君に何の用なわけ？」

突然の来訪者におちゃらけた様子で尋ねる翔馬。

「あつ、あの、私に魔法のコツ教えてくれないかな？」

突拍子もない言葉に、聞いた翔馬はおるか雅毅まで少し虚を突かれてしまう。

「コツう？」

真剣に、そしてしっかりと意思を込め、海涼は断言する。前の事

件と、今とのギャップある言動に自然と面と面を向かい合わせる翔馬と雅毅だった。

2章

二章 天然トラブルメーカー

あの声は誰のものだったのか……

いつも、無愛想で頭の中を誰にも悟られないことがない雅毅。その彼が、この学園に通うようになり徐々に変化の兆しを見せ始めた。

第一に、現実的に存在しない『魔法』というものを学ぶための学校に入学してしまったこと。これこそ、日常から非日常な世界への起因していることに変わりはない。自分の中に眠っていた才能がこの学園で覚醒し、皆が四苦八苦する授業を難なくこなしていく自分。そして、あの事件。

自分の意思とは別に発動した目に見えない力。『自分』という人格を押さえ込み、マリオネットを操るかのように『自分』を動かした力。そして、あの時の声……

それら全てがこの学園に入学して起きたことであり、自分の意思とは違う何か別のモノが目覚め出しそうで、単なる恐怖からせり上がる生易しい怖さとは違うものを感じていた。

その一方で、自分の居場所さえ侵害してくる厚顔無恥な人物にも迷惑を掛けられていた。

「ねえ、マークくん教えてよ。別に隠さなくてもいいでしょ？ 誰にも教えたり、お金を出させて商売なんてしないからさあ」

ああ……ウザい……

大体での一件以来、この女の子、柴原海涼は何かと雅毅の周囲をびつたりマークし、ことあるごとに質問をしてくる。

どうすれば、魔法使いになれるの？

どうすれば、力をコントロールできるの？

どうしたら、マークくんみたいになれるの？

e t c e t c

と、こんな内容の質問を学校の登校時から下校時まで、暇やチャンスがあればすぐにしてくる。例え授業中の教師から大目玉を受けようが、話をうわの空で聞いて実験を失敗させてもめげず、彼女は雅毅から魔法を使いこなせるコツを聞き出そうと奔走している。

それでもって、またしてもT・P・Oなど気にせず性懲りもなく聞いてくる。

「ねえ、マークくん、聞いてよお」

ここはというと、学園内にある実習を目的とした授業をするための教室がいくつもある別名「ラボ棟」と呼ばれる場所。簡単に言うと、小・中とあった理科室や家庭科室、調理室といったその目的の授業に合わせた部屋が多く並んでいる。

だが、一般的な公立・私立高校と違うのがやはり魔法を習得するという目的があるため、今、雅毅達クラスが使用している部屋も特別に設けられている。

「えっと、このヤマカドオオヒラソウは興奮時の鎮静剤としての効力がある。だけど、大量に服用すると呼吸困難に陥ってしまうから注意すること、いいな」

昔ながらの深緑色の黒板の前に立ち、チョークで板書する凛々しき女性教師。彼女の名を鹿嶋典佳と言い、若い教師の中でも優秀な逸材で、生徒からの信頼も厚く悩み事にも親身になって乗ってくれる。担当の科目は地理と薬学で、常にスポーティーなジャージを着ている。さらっとしたショートカットも相まって、若き体育教師に間違ってしまいそうである。

「ちよつと黙ってくれ。センコーの話が聞こえねえ」

席の指定がないということが災いし、雅毅の側にやってくる海涼。実験がしやすいよう六人掛けの机を囲み、机の先頭に座っている雅毅に対して真ん中に座っている海涼。背丈の問題もあって、右ひじを突いて教師の話に耳を傾けている雅毅に話しかける海涼の姿は見えない。

「ぶう、真面目に話し聞いてるように見えなんですけど……」
ぼそつと耳打ちするような仕草で、背中を言葉で小突いてくる。
「授業中ぐらい静かにしろ。センコーに見つかっても知らないぞ」
背後に目配せをしながらも、雅毅は完全に振り返らず体勢を維持している。

他の生徒は、熱心に教師の話に耳を傾けながらもノートを取ることは怠らず真面目に授業に参加している。静まり返った教室には教師の声と、ノートを取る音、時々消しゴムで消している音しかしていない。今の授業風景はいたって平穏で、勉強のあるべき姿を映し出している。一部を除いて……

「私、別に気にしないもん。誰に注意を受けても、マークンから魔法を使えるコツを聞き出すためなら何だってするんだから」

「それより、さっきからマークンマークンって何だ？」

「それはもちろん、水海道くんのあだ名だよ。水海道雅毅。雅毅だからマークン」

何とも低レベルなあだ名……

と、雅毅は正直なところ思っていた。小学生じゃあるまいし、仲良しこよしで学校生活なんて送る気なんてさらさらない。ましてや、こんな鬱陶しい小娘などとは一緒にいる空間でさえ嫌気がする。

「……であるから、このイレーネススリーピーは焚くと睡眠作用を引き起こす。むやみに素手で触らないように。舐めただけでも睡眠魔に襲われるからな」

黒板の前にある台の上、それぞれ小分けにされ皿に盛ってある乾燥した葉を皆に見せる。

「この二つを混ぜると、簡単な火薬になってしまっから火気厳禁だぞ。いたずら半分で調合などしないように、いいな？」

生徒の反応を確かめ、手応えを感じる典佳。

教室に集まった生徒の目を順に見ていく教師。このクラスの担任であり、教科の担任を務めているだけあって生徒の反応を確かめるのも重要である。生徒にちゃんと理解してもらっことや、つまらな

い授業もできるだけ楽しく分かりやすいものにしようと、彼女は彼女なりに研究し努力し、よりよい授業を作り上げようとしている。

「ん？」

生徒の顔を順に見ているうち、普通ならこちらを見ているはずの顔が後ろを見ている生徒を見つける。

「水海道君」

一度、警告の意味も含め名を告げる典佳。しかし、反応を示したのは周囲の生徒ばかりで肝心の当事者が気づかない。

「はあゝまったく……」

周囲の様子にも気づかず、自分が呼ばれたことにも気づかず雅毅は後方（海涼に）向いている。

「みつかいどうっ！」

薬さじを握り締めた典佳。刹那、怒気を含んだ声と共に薬さじを投げつける。

目にも止まらぬ速さで短い距離を移動し、注意すべき人物、雅毅の後頭部に直撃……するはずだった。

「イタッ！」

それはまるで予期していたような動きを見せ、インパクトの瞬間、紙一重に回避し後ろの生徒、海涼に当たってしまう。

「えっ！」

投げた本人も驚きを隠せないでいた。瞬時にクラスの視線を集め、一人消えてしまった生徒の動向に注意が向く。

「うええええゝん、どうしてゝ、どうして私がこんな目に……」

床に座り込んだ海涼は直撃してしまった額を、涙目に手で擦っている。

「何がぶつかったんだ？」

一人不可解に床に座り込む海涼に対し、状況が理解できない雅毅。「ちよっ、ちよつと柴原、だいじょぶか？」

行為を起こしてしまった張本人、典佳も生徒の安否が気になり急いで駆け寄る。

「ちょっと……ジンジンしてますけど、大丈夫です……」

幸いなことにプラスチック製の薬さじだけあり、大きなケガには至らないものの海涼の額は赤くうっ血している。

「……これが当たったのか」

他人事のように座っていた雅毅は、床に落ちていた薬さじに気づき拾う。

「お前達は、一体何を話していたんだ？」

ケガを負わせてしまった海涼を気遣いながら、雅毅に対し質問をぶつける。

「おっ、オレは別に何も……」

「柴原は？ 何を話していたんだ？」

「うーん……わっ、私は、ただ水海道君に魔法を操れるコツを聞くとしてました」

ジンジンとした痛みが薄れていく中、海涼はこぼれ落ちそうな涙を拭う。

「何だ、話をふってたのはお前か。いいか、授業中は私語を謹んで授業に集中すること。」

当たったことはあたしが悪かったと思ってるが、今度からはちゃんとするんだぞ」

「はっ、はい……」

「水海道、お前もだぞ」

振り向きざまに告げられ驚く雅毅。

「おっ、オレもですか？」

「ああ、一方的に話しかけられていたとは言え、話していた事に変わりないだろう」

「そっ、そうですね……」

あまり納得できない様子に、後ろ頭を掻く雅毅。

一番先に注意される対象になっていただけあって、喧嘩両成敗に事態を収拾する。

「さっ、授業を再開するぞ。みんな席に戻れ。柴原、ケガはすまな

かった。後で医務室に行こうな」

ぞろぞろと様子を見ていた生徒も席に戻り、典佳は薬さじを持って中断していた授業を再開する。

「はい……」

ケガが尾を引いているようで、赤く額を腫らした海涼はゆっくりと席に戻る。その様子を見ていた雅毅は、特に赤く腫れた額に何となく目がいつていた。

クス　クス　クス

さつきから続いている囁き合うような笑い声。前の時間よりは幾分ボリュームは落ちたが、授業が始まったとたん急に始まり出す。不思議なことに、それは海涼が座っている席よりも前ばかり起っていることで、後ろに座っている生徒はピクリともせず、いたって真面目に授業に参加している。

「えー、次の設問ですが……」

今教鞭を揮う教師も、開始当初から違和感を覚えていながら注意せずにいた。年の頃は四十代といったところだろうか。ある程度、実績や経験を積み自分自身の教育方針を固めてもおかしくない年代だ。しかし、彼はその方針すら定着しない新任教師のようにおどおどし、人の顔を伺いながら肩身を狭くし授業をしているように見える。

「……笑いの原因は、あれか？」

海涼よりも前の席に座っている雅毅は、ちらちら後方を伺い真面目に取り組んでいる彼女を確認する。

数時間前にクラス担任に薬さじをぶつけられた海涼は、授業の終了と同時に担任に連れられ医務室へ行った。そこで治療され戻ってきた彼女の姿は、いかにもアニメチックな格好で赤く腫れた額の痕には大きなばんそうこうが貼られていた。多分、それがクラスの失笑を買ってしまった、今に至るまで続いているのだろう。

『ったく、アイツは嫌でも目立つちまうな』

無愛想な表とは裏腹に、そんなことを思っている雅毅。しかしながら、自分が紙一重でかわした流れ弾が見事に額を直撃したことを思うとなんとなく面白い話で、彼女の行いの悪さを象徴しているように思える。

『まっ、話しかけてきたアイツが悪いわけだし、自業自得ってトコだな』

自分の心の中で、さっき注意された納得できなかった思いを海涼の姿で中和する。

「で……次の問い、ですが……」

トン トン

突然聞こえてくる戸を叩く音。一番近くの席にいた生徒や、多少の物音にも反応を示すようにビクツとした教師は、瞬時に誰か来たことを察知する。

教師は、自ら赴き誰が訪れたかを確認しようと戸を開けようとした。しかし、戸は自分の意思とは異なった力によって開かれ、瞬間に開けた人物と目が合ってしまった身を引くように驚く。

「あっ、あの……君達……」

教師に伺いを立てるところか、何も言葉を発しないまま教室に入ってくる男女混合の生徒達。

戸を開け、先頭を歩くはこの辺りでは珍しいブロンドヘアにグリーンの瞳の生徒。真ん中を歩く生徒は、長い黒髪が特徴的ですらりと伸びた手足の長いスレンダーな女子生徒。最後尾を歩くは、外見、外国のアンティークドールのような気品ある顔立ちの女子生徒で、顔の左右にある縦巻きのカールがお嬢様に相応しい印象を与える。女子生徒が付けているスカーフが空色であることから、彼らは最上級生らしい。

周囲の反応などお構いなしに、彼らは我が物顔で下級生達の間をすり抜けある生徒の前で立ち止まる。

「君が、水海道雅毅君だね？」

それまで俯いていた雅毅は、聞き覚えのない声に反応を示しよう

やく誰の声を判断した。

「そうですけど、何か？」

「話があるんだけど、付いて来てもらえないかな？」

「いつですか？」

「これからだ」

冷静に感情の断片すら与えない声音で、黒髪の少女が告げる。

「あつ、あの……」

自分の眼前で展開していく事態に対応できず、おろおろしている教師。彼らの噂を耳にしてるだけあつて、できるだけ関わりを持ちたくないと思っている。しかし、心の内にある一片の授業をしなくてはいけないという部分もあり、必死に葛藤をするものの次の一歩が踏み出せない。

『あの人達誰なんだろ……マークんに何の用かな……』

闖入してきた上級生に囲まれ見えない雅毅に対し、心配の念が募っていく。

「君を悪いようにしないし、危害を加えるつもりもない。付いて来てくれないか？」

真っ直ぐメガネ越しに視線を感じる雅毅。

外見からは悪人のように見えないし、このまま授業を受けていても何も面白いことがないことを考慮し決断する。

「……分かりました」

ゆっくりと席を立ち、無言の合図の後入ってきたとは逆の順に進んでいく。雅毅は二番目と三番目の間に挟まれ教室を後にする。

「おつ、おい……君達……」

何の行動を起こせないまま、ようやく一言を絞り出す教師。

「まっ、マークン……」

クラスの中で唯一海涼は席を立ち、連れ出されていった戸口を見続けていた。

「すまない。授業中に連れ出してしまって」

授業中にも関わらず連れ出された雅毅。連れ出され行き着いたのは、屋上にある温室ハウス。この中では温室しか育たない薬草やハーブなどが栽培され、むせるような強い香りで充満している。

「別にいいッスよ。授業、退屈でしたから」

どんな目的で連れてこられたのか知らされてないというのに、雅毅は気丈というか無神経にしてはほどがあるほど落ち着いている。

「まっ、あの人の授業ならそう思うのも無理はないか」

苦笑を浮かべる雅毅よりも背の高い少年。目鼻立ちもすっきりとし、欧米人に特徴される彫りの深さも、平均的にのっぺらとした日本人とは比べ物にならない。

「……それで、ここに呼び出した目的は何ですか？」

直球と真ん中に切り出す雅毅。単刀直入過ぎる問いに、話しかけてきたブロンドの青年は外人らしいオーバーリアクションをする。

「まあまあ、そう焦らないで。これからゆつくりと話すよ」

目の前の少年は穏やかな表情を浮かべているが、左後方にいる長い黒髪の少女の表情は硬く、右後方にいる小柄な少女は絶えず笑みを浮かべている。

「僕達ばかりが君の名前を知ってるのはアンフェアだから、とりあえず自己紹介をしておくよ。僕はユークリッド・ウエルバック。アメリカ合衆国出身。みんなからリッドって呼ばれてる。専攻魔法は風魔術だ、よろしく」

穏やかな表情で自己紹介するユークリッド。専攻している魔法をさらっと言っただけの姿は、上級生の風格がある。

「君の右後方にいるのが、マリーシア・フランクベルク。ドイツ出身で、専攻魔法は氷魔術。外見的に幼く見えるが、彼女の氷魔術は侮れない」

右側の背後を一瞥する雅毅。紹介された少女マリーシアは、雅毅の右側に立つと無理矢理右手を両手で握ってくる。

「初めまして水海道君。マリーは、皆さんからマリーって呼ばれますっ。よろしくですっ」

海涼と背丈がほぼ一緒であるマリーシアは、優しさをお裾分けするように、ふわっとした感触のある両手で雅毅の右手を握る。

「そして、君の左後方にいるのが、久無真琴。彼女は君と同じ日本人で、専攻魔法は飛行魔術。モデル顔負けのスタイルを誇っているが、彼女の飛行魔術を生かした体術は学園トップクラス。何でも手にしたものを高速で投げ飛ばすこともできる。ジャパーニーズで言うところのシュリケン……なのかな？ そのようなことができる」

右手を開放された雅毅は紹介された少女を一瞥する。無表情で笑みすら浮かべず佇む少女。長い前髪で左目だけを覆い隠し、極端に感情表現を避けているように見える。

「……よろしく」

必要最低限な顔の動きだけをし、真琴はまた沈黙を守る。

「まあ、ざっと自己紹介したところで本題に入る。僕は回りくどい言い方を好まない、だから単刀直入に話す。僕達の仲間になつてくれるかな？」

温室で育つハーブ達に囲まれた通路の上、ホント何の取り留めない案を提示するユークリッド。こんな胡散臭い話に対し、素直に受け止め従うなどあり得る訳がない。例え深甚な人物であろうと、何の見返りもない話は乗らないだろう。

「……仲間にする理由はなんですか？」

三人の上級生に囲まれ、雅毅は見えない圧力に押されて下手に動くことができない。

「理由は簡単。僕達はある禁術が記されたレポートを探している。

そのレポートを探し出すために、君の力が必要なんだ」

「魔法の『ま』の字も知らないオレでも、必要な戦力になるんですか？」

決して彼らを信じていない雅毅。ごくごく一般的な高校の上級生から呼び出され、仲間になれと言われても躊躇ってしまうのだ。こんな特殊な環境下にある学校で、何かを探し出すため協力してくれなどと言われ、素直に従うことなんてできるわけがない。

「お前の素質は十二分に分かっている。大体での件、しっかり見させてもらった」

「はい。水海道君の力は、とっても凄かったです」

同じ女の子でも性格が違っただけで、雅毅は口調や言葉遣いに違いが生じてしまうんだと気づかされてしまう。

「君が大体で生徒を救った現場を僕は偶然に見ている。一年であれほどの力を使えるんだ、じきに僕達に匹敵するほどの魔法を使いこなせるだろう」

「あの、言っておきますけど、オレ、魔法には全然興味ないですから」

彼らの目的が明確になり関わり合いたくない雅毅は、この場を去ろうとユークリッドに背を向ける。

刹那。

風を空気を切り裂き、動体視力の限界にさえ捕らえられないスピードで何かが首元に当たっている。

「……興味ないなどという理由で、片付けられては困る」

振り向き様のモーションに動きを阻害され、首の皮膚から全身に伝達される冷たさに悪寒が走る。

「真琴、交渉の場で武力行使してはだめだ。もっと穏やかな対応をしなくては」

「……だが、こうもしなければ、こいつは自分達に協力しないんだぞ」

諫められる真琴は、鋭い眼光を突き付けた雅毅ではなくユークリッドに向ける。

「君の気持ちも分かる。だが、このような力による圧制からは何も生まれない。ただ他人を傷つけ、服従させるなど人として道徳に反する行為だと思わないか？」

至って冷静に、ユークリッドは真琴をなだめる。今している行為が、心ある人として恥ずべきものであることを。

「……分かった」

心を落ち着かせ、首元に当てていたものを雅毅から遠ざける。

「……うん？」

自分の首元に突きつけられていたものを目で追っていた雅毅。その正体を確認したものの、不釣り合いな光景に肩透かしをくらう。

「ばっ、バターナイフ？」

手元に戻した真琴は息を吐きかけ、ハンカチで丁寧に磨く。

「久無さんのマイ・バターナイフですう。パン派の久無さんは、常に持ち歩いているんですよ。」

マリーシアのどうでもいい説明の最中、満足できるまで拭いたバターナイフをポケットにしまう真琴。

「バターナイフなんて、凶器でも何でもないじゃないですか！」

人の趣向はさまざまだが、パンにバターやマーガリンを塗るためのものを、脅しの道具に使うなんて馬鹿にするのもいい加減にしてほしい。

「いいや、水海道君。真琴の能力を甘く見てはいけない。例えばそれが幼稚で凶器として相応しくない物でも、彼女の手に掛ければ立派な殺傷能力を携えた武器になる。さっき説明したが、彼女は飛行術を得意としている。ありとあらゆるものを手にしただけで、彼女は武器に変えてしまうんだよ。運動エネルギーを与えられたものは、何であろうと破壊兵器になる。それを、バターナイフと仮定して考えてみれば、自ずと分かるはずだ。」

そうなると、真琴がバターナイフを持つ理由は説明がつく。身近にあるものであるもののほど、敵は呆気に取られ気を緩めてしまう。その隙を突いて、凶器と化した物を投げつけてしまえば確実に戦意を失ってしまう。そう、現実の今のうちに……

「わっ、分かりましたよ……」

上級生であるゆえんを知らされ、雅毅は強がっていた心が畏縮してしまう。

「それにしても、相変わらず早いですねえ、久無さんのシュリケン。目にも止まらぬ速さですう。」

見慣れているはずのマリーシアは、マジックを見せ付けられたかのようなシンプルな返しをする。

「べつ、別にこれは手裏剣などではないんだが……」

異文化コミュニケーションが取れていないようで、素早い武器の動きだけで思い込んでいる。

「手裏剣というのは、手元にあるものを標的目掛け投げるものであって、これだけの動作は言わない」

ちよつと面食らった様子で、簡素な説明をする真琴。

「へえ、そうなんですかあ」

説明を受けたマリーシアは素直に受け止め、一つ賢くなる。

「……まあ、これぐらいにしてだ、君にはすまないと思っている。

これも全て、君のためなんだ」

「オレの……ため？」

ふと疑問に思い、ユークリッドの方へ振り返る。

「生憎、レポートを狙っているのは僕達以外にもいる。彼らは君の存在を煙たがり、どんな手段だろうと構わず、君の命を狙ってくるだろう」

「どつ、どうして、オレが命を狙われるんですか！ 何もしてないじゃないですか！」

ユークリッドに食って掛かりそんな勢いで喚く。

「……自分で蒔いてしまった種だ。他人がどうこうしてくれるなど考えるな」

冷淡な言葉の中に、真琴は甘えを許さない強い意志を込めしつかりと断言する。

「……くそ」

背後に佇む真琴を一瞥し悪態を吐く。

「この学園で今、君という存在によって変わろうとしている。君の潜在能力に恐れ慄き、覚醒する前に亡き者にしようとするだろう。それでも君は拒否するかい？」

これから起きようとしているただの推測だというのに、ユークリ

ツドはあたかも現実に起きてしまったように巧みな話術に引き込まれる。

「まあ、どのような答えを出すのか、君の一存に任せるよ。それと、君を守るのは僕達だけだということを忘れないでほしい」

最後、雅毅の後ろに控えている二人に対し軽く頷く。そして、それが合図のようにタイミングを見計らって温室ハウスから出て行く。一人残された雅毅。突きつけられた脅し紛いな話に、心が揺らぎ自制心は崩壊しかけていた。

『どうして……オレは、何も悪いことなんかしてないじゃないか……魔力があるせい……こんな、こんな学校なんて……』

後悔に苛まれ、雅毅は小刻みに揺れるほどぎゅっと拳を握りしめ立ち尽くすのだった。

『やはり、この学園には何かある』

温室ハウスの中、一人の人物が息を潜め耳を澄ませて会話を聞いていた。外見だけでは性別の判断がしづらい身なりをし、利き手には剪定用の鋏がある。

『やはり、上からの情報は正しかったわけだ。一刻も早く、禁術の記されたというレポートを見つけださねば』

ずれ落ちかけたメガネを直し、その人物は枯れかけた葉を切り落とした。カットした音に魅了されながら、切り落とした葉を指先で回していた。

「まったく、授業中に教室を抜け出るなんて、しょうがない奴だな」その日の放課後、教科担任から授業の出来事を聞かされた典佳はデスクに頬杖を突き独り言を呟いていた。

「多少周りの生徒よりできるからって、授業態度が悪かったら元も子もないじゃないか」

生徒の成長ポイントがあるのは伸ばすべきだと思う。しかし、その対となってしまうマイナスポイントをどれだけ削減できるか、生

徒を預かる教師達は常に考えなくてはいけない。完全無欠な人間などいない。ましてや、何の取り得もない人間もない。それぞれの個性を伸ばし、それを阻害しているウィークポイントをどれだけ無くせるのか。それらは一生の課題であり、教師としての宿命である。「仕方ない。今回は目をつむることにして、次がないように言っておかなくちゃな」

自分の中で決着をつけ、デスクに広がったテキスト類を整理する。放課後の教務室は部活の顧問をしている教師がいるため、案外がらんとしている。残っている教師といえば、ひ弱で可憐な美人教師やバーコード頭の中年教師など数名いる。

「鹿嶋先生……」

「うわっ！ すっ、すみません和鍋先生、何か用事ですか？」

突然背後から話しかけられ、反射的に驚いてしまう典佳。目上の教師の反感を買わないよう冷静に努め、回転するイスを動かし和鍋と向かい合うようにする。

「ある生徒について、お聞きしたいことがあるんです」

話しかけてきた和鍋は、学園に在籍し教鞭を揮う立場にありながら生徒との関係を育もうとしていない。一方的に授業を展開し、生徒からの質疑にさえ応答せず、決められたプログラムをこなす機械のよう早々に立ち去ってしまう。学園内の教師達でさえ敬遠し、その行動や研究している内容に一切口出しできないでいる。

「生徒……ですか。でも、和鍋先生の授業はないですよ？ 研究で忙しい先生の注意を受けるような生徒がいましたか？」

「注意するほどのものではありません。鹿嶋先生のクラスに、水海道雅毅という生徒がいるはずですが……」

さつき注意を聞かされたばかりの教え子の名。授業を抜け出したことと関係があるのかと、疑問が頭をよぎる。

「水海道雅毅ですか……ええ、確かにウチのクラスの生徒ですよ。何か問題行為でもしましたか？」

「……いや、ないですが……その生徒の特徴を聞きたいのです」

和鍋の姿勢はどこかよそよしく、他の教師に聞かれてはまずいように小声で話す。

「特徴ですか？ うーん、まあ、一年にしてはなかなか魔術を使いこなしてるみたいですよ。いっちょまえに授業を抜け出すし、あたしの授業で注意されますし、まあ、困ったカワイイ生徒ですよ」

まだ付き合いだして日は浅いものの、生徒の性格や授業を受ける態度は他の先生から話を聞いている。どの教科に得意・不得意があるかとか、何に興味があるのかとか様々なことを頭に入れなくてはいけない。

「そのようなことを聞きたいのでは……」

何か詳しいことを知りたがっている和鍋。しかし、時と場合を考えそれ以上の発言を避けているように見える。

「あつ、あの、鹿嶋先生」

遠くから聞こえる澆刺感ある声。バネの効いた背もたれに体重を掛け後ろを見ると、ジャージ姿の若い教師が手を上げてこちらを見ている。

「あつ、そうだ！ 学年の職員会議があつたんだ！」

肝心なことを思い出し、慌てながら予定表をまとめた手帳を探す。「あつ、すいません。水海道のことで、何を知らたいんですたっけ？」

待たせてしまっている和鍋に気づき、探している手を一旦止める。「いつ、いや、別に……」

言葉尻を濁し、和鍋は自分の存在を知られるのが嫌な様子でそくさと立ち去る。

「あつ、先生……」

突然の行動に挨拶する暇がなく、和鍋の知りたがっていたことが尻切れてしまう。

「和鍋先生……」 どうして水海道のことなんか知りたがったのか……「あつ」というまに消えた和鍋を気にしつつも、切迫した会議に向けて、片付けたばかりのデスクを再び元の状態に戻してしまうのだっ

た。

3章

三章 Key

はあ、なんて気分が落ち着くんだろう。

日々の雑踏、頭ごなしに叱ってくるセンコーの声、あーしろーしろと自分の領域に無断で侵入してくる姉貴。そして、金魚のフンのようにまとわりついてくるお騒がせ天然娘。

日々是精進という昔の偉い人の言葉があつたりするが、そんなに寛大な心など持ち合わせてはいない。褒められれば嬉しいし、怒鳴られればムカツとする。喜怒哀楽を抑え込むことなど所詮できない芸当で、素直に出してしまえばどれだけ楽なことか。

しかし、そんな大つぴらな人間など社会では通用するはずもない。どこかで我慢し耐え抜き、その場をただひたすら耐え凌いで一刻も早く時が過ぎるのを切望する。そして、発散すべき場所を確保し、日々の生活を生き抜いていく。

緊張と緩和は微妙なバランスの中で成り立ち、どちらかが傾いてしまえば人の精神が崩壊していく。地球だって、海だって、月だって微妙なバランスの中で保たれ存在している。

「はあー誰もいない屋上で、一人寝転がって空を眺める。こんな至福な時はねえな」

空は天候に恵まれ、暖かな陽射しと優しく肌を撫でていく風を与えてくれる。今の雅毅にとって、ここがどこだろうと時計は何時何分を示しているようが関係ない。ここにいて、ここでこうやっていたいという自由意志のもと、雅毅は行動している。

「オレ……どうしてこんな学校、通うようになったんだ？」

改めて感じる学校を選んだ理由。

自宅から通える高校なんて、交通手段を考えればどこへだって行けたはずだ。多少なり、収める学費や学力の差はあるだろうが、自

由に学校を選択できる意思がある。それがどこをどうして、こんな訳の分らない世間から偏見視されそうな学校を選んだのだろう。別に興味本位で入ったわけでも、進学率や就職に対して熱心な教育をしている理由で入ったわけでもない。近くて自分の学力に合っている。

ただ、それだけ……

自分の性格の問題なのだろうが、両親や姉は自分で決めるべきだと言い、アドバイスの一つもくれなかった。ちゃんと耳を傾けるかは定かではないが、一言二言なりに欲しかった。そうすれば、もっと慎重に学校を選べただろうし、自分の将来のビジョンを描けたかもしれない……

今となってしまうえば後の祭りと言えないが、入学してしまっただけで卒業しなくてはいけない。それが自分に付きまとう『責任』であり、義務教育期間とは違う大きな点である。

「……くそっ、気分紛らわすためにしてるってのに、嫌なことを思い出しちゃった」

資金の有り余る私立校だけあり、屋上に置かれたベンチもデザインに凝っていて、寝心地（座り心地）は悪くない。

「はあ、あ、やってらんねえ」

ずっと掛けっぱなしだったメガネを外し、胸の辺りに置いて両目を閉じる。何もかもが幻影であり、全てが夢であって欲しいと願いながら。

肺呼吸から穏やかな腹式呼吸に移行としていた矢先、屋上へ続くドアが勢いよく開け放たれる音が現実世界に引き戻す。

「ハア、ハア、やつ、やつと見つけた……」

聞き覚えのあった声に細目を開け、ここが現実世界であることをゆっくり認識していく。

「まあ、あつという間にいなくなっちゃうんだもん。探し出すの苦労したんだよ」

切れ切れな息を整え、ゆっくりとした歩調で雅毅に近づいてくる。

「探さなくて結構。オレは、憩いのひとときを楽しんでんだよ」

近づいてくる音と声だけで推測し、雅毅は自分の主張を発する。

「休んでる暇があるんだったら、私に魔法を使いこなせるコツを教えてよ。教えてくれたら、邪魔なんかしないから」

いつの間にか雅毅を見下ろす位置まで来ていて、真下に照らしている太陽の影に入って海涼の顔が見えづらい。

「嫌だね。そういうモンは、自分で感じ取って初めて使いこなせなきゃダメさ。他力本願でどうにかしようなんて、甘いんだよ」

見下ろしているのが、片目を開けてぼやけた視界の中に入る。顔の表情がはつきりしないのにも気にせず、再び目を閉じる。

「そつ、そんなあ、イジワルしないでよぉ、マークんと私の間柄じゃない、教えたって損はしないよ」

「損得や、間柄の問題じゃなくて、お前個人の問題なんだよ。人に聞かないで、自分自身で研究したりしないと、自分のものにならないんだ」

延々と続く哀願の言葉に嫌気が差し、仰向けの体勢から寝返りをする。その拍子に体の上にあったメガネが落ち、カシャッと音をたてる。

「あつ、いけねっ」

落としてしまったことに気づき拾おうと手を伸ばす。しかし、音だけで落ちた場所まで特定できず、ブロックを敷き詰めた床を手探りで探す。

「へえ、マークんつて、こんなメガネ掛けてるんだ」

落ちたメガネは海涼の手に渡り、メガネの蔓を広げ物珍しそうに眺める。

「おつ、おい、返せよ」

自分のメガネがいじられていることを察知し、急いでベンチから起き上がる。

「エヘッ、似合う?」

しげしげと眺めていたメガネを、海涼は何を思ったか自ら掛けて

見せる。

「似合う？ って言われても、見えねえよ」

ぼやけた人型程度しか見えない雅毅にとって、海涼のメガネを掛けた姿や似合うか似合っていないかなんて分かるわけもない。

「うーん、残念だなあ……こんなメガネの似合う知的美人が見れないなんて」

自分の姿が見えないと分かると、メガネを掛けたままの状態で、カメラ付き携帯を取り出し自分の姿を写真に収める。

「うーん、度が強いのかな？ 視界がぼやけて目が痛いよ」

撮ったばかりの写真を保存し携帯を閉じると、掛けていたメガネを外し雅毅に返す。

「当たり前だ。正常な視力があるなら、メガネなんか必要ねえだろ」
半ば怒気を含んだ言葉を投げつけ、強引に取ったメガネを掛ける。

「ふう、ヒビとか傷は付いてねえな」

「ねえ、メガネ姿の海涼ちゃん見てみる？」

雅毅の了解を得ぬまま、海涼は自分の顔を収めた写真を保存した携帯の画面を見せ付ける。

「見せるな、鬱陶しい」

毛嫌いするように、その場を立ち去ろうとした刹那、
ドスン！

地面を揺るがす激しい衝撃で足元がすくわれ、二人は堪え切れず
尻餅を付いてしまう。

「えっ！ なっ、何？」

「地震……か……」

強かに打ちつけてしまった膝や尻を擦りながら、しばらく続く不
自然な揺れに困惑する。

「水海道雅毅、あの方のご命令だ。ここで消えてもらおう」

声がする方向に顔を向ける二人。

上空を見上げると、自然の摂理に逆らった形で空中に浮かぶ男性
教師が一人。

「えっ！ 空中に浮かんでるよっ！」

「あり得ないだろ、ありゃあ」

二人とも度肝を抜かれ、驚嘆の言葉が自然と出てしまう。

イリユージョンのような光景に目を奪われていると、男性教師は開いた手を胸の高さで掲げ魔力を込め始める。

「……ヤバイ！ アイツ、オレ達に攻撃してくるつもりだ！」

片膝を突き体勢を立て直そうとする雅毅の目に、次なる攻撃の予感を察知させる行為が目に入る。

「なっ、何で、先生が攻撃してくるの？！」

生徒には公平で、何よりも生徒を重んじる。その教師が、生徒の命を狙うという行為が信じられない。

「考えてる場合じゃねえ、早く逃げるぞ！」

座り込んだままの海涼の手を取り、無理矢理立たせた瞬間、教師の放った『気』の塊がベンチを直撃する。

「うわっ！」

「きゃっ！」

凄まじい衝撃波に体が弾かれ、ベンチから数メートルも離れた位置まで飛ばされる。

「イテテ……」

硬いブロックを敷き詰めた床にぶつけられた痛みに顔を歪ませ、海涼は擦りむいて血の滲むソックスを見つめる。

「……マジかよ」

雅毅も弾き飛ばされた衝撃を受けながらもなんとか体勢を保ち、衝撃波の着弾点を目にして驚く。

さきほどまで空を見上げるために横たわっていたベンチが、今は頭上から何かを落とす衝撃実験後のように、真ん中を中心としてくの字に折れ曲がっている。

『やっぱ、魔法なんだろうけど、どんなヤツなんだ……』

決して柔らかくない金属製のベンチが折れ曲がっているのだ、生半可な力でないことは雅毅にも見当が付く。

攻撃を放った教師は、確実に捉えた自信があっただけに、その表情に焦燥感が出始める。

「おい！　いつまでもそこで座り込んでるな、格好の的になる！」
今度こそと勢いを込め、再び『氣』を溜め始める教師。その予感を感じ取った雅毅は、再び海涼の手を取り思いっきり引っ張り上げる。

「きゃっ！　いつ、痛いよお、いきなり腕を引っ張らないで」
「じつとしてたら、痛みさえ感じなくなっちまうぞ！」

よたつく海涼を無理矢理走らせ、できるだけ回避できるようジグザグに走る。

「無駄なことを……」

一定量の『氣』を溜めた教師は、今度は両手に溜めたものを左右に振り下ろし眼下に向かって投げ下ろす。

ズガン　ズガン

『氣』の塊はプロピッチャー並みのハイスピードで投げ落とされ、逃げ惑う雅毅達に襲い掛かる。

ターゲットに命中しなかった『氣』の塊はブロック床を打ち砕き、衝撃波と共にブロック片を四散させ足場を悪化させる。

「どうして教師が、生徒を襲うんだよ！」

攻撃を尚も繰り返そうとする教師の姿を、背後から見上げる雅毅。
「まっ、マークくん、マークんの魔法で何とかならないの？」

痛みを堪えながら、手を引っ張られ続ける海涼。足元のブロック片に躓きながら、懸命に付いていく。

「無理言っな。この状況で何ができるんだよ。ろくに魔法を教わってないってのに」

必死さが手を通じて伝わった雅毅は、自分でも何かできることはないかと思案する。

その間にも教師は攻撃の手を緩めることなく続け、きれいに敷き詰められていたブロック床は無残に破壊され、所々、大小様々な穴が作られる。

『クソッ、何とかして、相手の見えない位置に行かないと……』

走り回るにも体力の限界が近づき、引っ張られ続ける海涼の足取りも重くなってくる。

「……よしっ、あそこに逃げよう」

唯一姿を隠すことのできる場所、校舎へと続く出入り口の存在を思い出し懸命に走り出す。足場が悪いことなんて、百も知っている。しかし、どんなことであろうと逃げなければベンチの二の舞になってしまう。そして、何よりも自分だけが狙われている中で、部外者を巻き込みたくないという思いが自然と溢れてくる。

容赦なく続く攻撃を掻い潜り、雅毅と海涼は間一髪で出入り口に飛び込み難を逃れる。

「クッ、逃げられたか……まあいい、これであの方のご意向が嫌でも伝わったはずだ」

仕留め損なったものの、言葉では伝えきれないことをしっかりと教え込んだという確信を持った。

攻撃の手を休め、ぼろぼろになった屋上を見下ろし満足感に浸るのだった。

「ハア、ハア、ハア……」

何とか逃げ延びた雅毅と海涼。

厚いドアに背を預け、乱れた息を整える雅毅。膝を折って座った海涼は、走ること一杯一杯だった脚の痛みが再度疼き、泣き出しそうな眼差しでケガをした場所を見つめる。

「うえーん！ 怖かったよお……怖かったよお……」

今までの恐怖体験を思い出してしまい、堰を切ったように瞳を潤ませる。

「……」

制服に付いた土ぼこりを払い落とし、平静を取り戻した雅毅は一人階段を降りようとする。

「ねっ、ねえ、待ってよ……」

行ってしまうような雅毅を、寂しさと恐怖に打ちひしがれる海涼はか細い声で呼び止める。

「ねえ、答えてよ。どうして、ねえ、どうして命を狙われなくちゃいけないの？」

雅毅の背中に痛いほど突き刺さる海涼の視線。何も思い当たる節のない海涼にとって、これまでにない恐怖感を与えられた。その原因は何なのか、今の海涼は打ちのめされた後に正気に戻るきつかけを求めている。

「……教えられない、ゴメン……」

互いに救われると思っていた雅毅。だが、他人を巻き込んではいけないという直感が働き、答えるだけの気力が沸いて来ない。

「……」

どんな言葉でもいい。それが自分を傷つける言葉であつても海涼は、雅毅の心の中を覗けるような言葉を聞きたかった。

「……私の方こそ、ゴメンなさい……」

何で謝ったのか。単純にその理由を知りたかった。それでも、今の状況で聞いたとしても理解できないんじゃないかと思い、雅毅は何も告げないまま階段を降りていく。孤独感を両肩に乗せて。

深夜、昼夜を知る人間ならとくに眠っている時間帯、草木も眠る時間にも関わらず物音の聞こえる部屋。

『くそっ……ここにもないというのか』

雑然と散らかった室内に佇む漆黒を纏う人。手近な場所に電池で灯るランプを置き、デスクの上や無数にある引き出しを隈なく探す。『チッ、必ずここにあるはずなのだ。著名な魔術士にして研究者である、陣馬浩二郎のレポートが！』

探しても探してもその所在の明らかにならないレポートに苛立ちが募り、整然と並んでいたビーカーやフラスコを腕で払い弾き落とす。

ここも空振りと諦め、ランプを持った和鍋は研究室を後にする。

誰にも気づかれぬよう細心の注意を払い、ドアの開閉にも注意しゆつくりと研究室の外へ出る。

「Mr・和鍋。このような時間帯に、研究室で何をしていたのですか？　それも、他の教師が使用している研究室で」

立ちはだかるは、上級生クラスでも選りすぐりの三名。一人はアメリカ出身の少年ユークリッド・ウェルバック。一人は艶やかな黒髪の特徴的な久無真琴。そして、西洋のアンティーク・ドールのような気品溢れるマリーシア・フランクベルク。

気づけばユークリッドが掲げる手の上空には、ほのかに照らす発光球体が浮遊し、優しい光に三名の顔と焦燥感に顔が歪む和鍋の姿が浮かぶ。

「おつ、お前達こそ、このような時間帯にどうしてここにいるのだ。直ちに担任に報告し、即刻……」

「あなたですね、一年生の水海道雅毅君を襲わせた張本人は」

自分の言葉を遮られ、思わず口を噤んでしまふ和鍋。

「あなたは、息の掛かった教師を喉け、水海道君の命を狙った。僕の推理が違うのであれば、はっきり違うと断言してください！」

待ち伏せされていたことに動転してしまい、上手く言葉を練り上げようにも中々浮かんで来ない。

「凶星、みたいだな」

「そつみたいですよ」

左右に控える二人も、悪を許さない正義感に溢れた眼差しを和鍋に注ぐ。

「さあ、理由をお聞かせ下さい。何故、昼間に水海道君を襲わせたのです？」

自分よりも一回りも二回りも年の離れた若者にさえ、和鍋は言葉だけで追い詰められ頭の中が制御不能に陥る。

「さつ、さあ、知らない。襲わせたなど、いつ、言いがかりも甚だしいぞ」

常日頃から覇気のない声をしているが、今ほどか細くおどおどし

たものはない。

「知っているんですよ、Mr・和鍋。今日のように、研究室に侵入し他の教師を取り込んでレポートを探していることを」

これでもかと和鍋が関わっている証拠を突きつける。自分達が想像していることと、和鍋がしようとしていることが合致しているという確証を得るため。

「身に覚えのないことを聞かれても、答えようがない……アニキウラス……」

ポツリ呟いたノイズのようなかすれた声。その声の意味するものをユークリッドは瞬時に理解した。

「下がるんだ！」

その言葉に何のためらいもなく、サツと後退する三人。次の瞬間、和鍋とリッド達の間には灰色の液体のような物体がゆっくりと形成し、せり上がって行く。

「フン、勘だけは鋭いな。だが、私に隙を与えてしまったことが最大のミスだ」

焦りの表情から一転し、好機を得たことで自分に勝機が巡ってきたと感じ、態度が大きくなっていく。

「なっ、何だ、あれは？」

「きつ、気持ち悪いですう」

目を逸らしたくなるような異形な光景にも怯むことなく、マリシアと真琴は形を形成していく様を見据える。

「クツ、あれは和鍋が得意とする人型生成。どんな場所でも、基本となる物質があるだけで自分を守る盾を作る。それぞれが単独で意思を持ち、創造主の命令に忠実に従う最高の駒だ」

狭い環境もあり、ユークリッドは生成が始まった人型をどうすることもできず見続けることしかできない。

「フハハ、せいぜいコンクリ人形と遊ぶがいい」

完全に形成する前に、和鍋は四体の人形にこの場を任せ去って行く。

「クツ、何としてもアイツを止めるんだ。これ以上、誰にも傷つけさせないために！」

形成が完了したコンクリの人型。ゴムのようになるんだ形状から、今はがっちり固まり、まるで型に流し込まれ固まった鋳物のようになっていると直立している。

「仕方ない、前を塞ぐ障害物を排除する。マリー、君の氷魔術であいつらの動きを封じるんだ。その隙を突いて僕が切り倒す。真琴は、倒れた間を縫って和鍋を追うんだ」

「わっ、分かりましたあゝ」

「御意だ」

前方の攻防をユークリッドとマリーシアに任せ、数歩後退する真琴。自分も戦力となって戦いたいのが、狭い環境で三人同時に戦うことが制限された今、ユークリッドの指示に従う他ない。

「凍てつく氷の息吹、我が前に姿を示せ！」

両手をクロスさせ、マリーシアは動き始めるコンクリ人形の一体に向け呪文を発する。この時ばかりはおっとりとした喋り方は消え失せ、しっかりと言葉に意志を込め凜とした表情で立ち向かう。

「ハッ！」

クロスさせた手の平、その先から白煙が噴出し浴びせられた人型が徐々に氷結していく。

「よしっ、その調子で、全部の動きを封じるんだ！」

魔術を詠唱続けるマリーシアの隣に立ち、コンクリ人型を切り倒すための武器を作り出す。

「切り裂く風陣の刃、我が前に姿を示せ！」

詠唱と共に左手の人差し指と中指を伸ばした指先で右腕を撫で、魔力を右腕に集める。

「よし！ そのまま続けるんだ、必ず突破口を作る！」

マリーシアの放った冷気で凍り始めた一体に対し、ユークリッドは体勢を低く保ち一番

に体重の掛かった足元を右腕一閃。

コンクリの塊だった人型はグラツと体勢を崩し、片足で支えきれない自らの重さに潰れる。ただ腕を振るうだけの木偶人形になった人型を、ユークリッドは横から真つ二つに薙ぎ払う。

「ふう、一体、Finish!」

再起不能になった人型は床に横たわると、元の床に取り込まれていかのように跡形もなく消えていく。

「危ない、リッド!」

真琴の危機を告げる声に揺り動かされ振り向くと、まだ凍結していない人型が自らの手をハンマー状にして襲い掛かるうとしていた。「クツ!」

振り下ろされるハンマーを紙一重のタイミングでかわし、隙を突いて背後に回り込むと頭頂部から真つ二つに斬り裂く。

高密度に圧縮した風の刃は微かな音さえ立てずコンクリを切断し、光を放つまで研磨した石のような断面を露にして崩れ落ちる。

「あと、二体」

息を吐く暇さえ与えず、ユークリッドはマリーシアの氷魔術によって動きを鈍らせた人型を斬り倒し、残るは一体。

「リッド、得意のアレ、やっちゃって下さいです」

任された仕事を済ませたマリーシアは、コンクリ人型の背後から姿を現し応援するように腕を振るう。

「では、ここはアンコールにお応えしよう」

じたばたしている人型から間合いを取り、ユークリッドは風の刃と化した右腕と左腕を重ねクロスさせる。

「無数の風の刃よ、悪しき者を斬り裂け!」

呪文と共にクロスさせた腕がエメラルドに輝き始め、右腕だけに圧縮されていた風の力が左腕まで広がりを見せる。そして、最高までに蓄えられた風の刃が無数に放たれ、防ぐ術を知らない人型が鋭い刃によって斬り削がれて行く。腕、胴体、頭、脚、全てが粉々にされ、どの部分だったのかと思ってしまうほど原型を留めていない。完全に前方が拓けたのを見計らい、真琴は両足に浮遊するための

力を圧縮して蓄え、一気に飛び出す。空気をも切り裂く凄まじいスピードで薄暗く続く廊下を翔け抜け、線でしか捉えきれない内部の様子に目を配る。

『クツ、あれだけの時間があつたんだ、すぐにでも姿を晦ませられるな』

半ば諦めモードで廊下の最奥まで到達し、姿が見当たらないことを確信し魔法を解く。

「Mr・和鍋は……」

一定量の魔力を消費したユークリッドは、発光物体の照らし出される範囲まで戻ってきた真琴に尋ねる。魔力には限度があり、人間の気力や意志の強さにも比例するように、魔力も個人差がある。今の戦闘で消費した魔力が若干多かったため、今のユークリッドは持久走を走り終えた直後のような疲労感がある。

「追いかけるには遅すぎた。リッド、お前が調子に乗って魔力の消費をしたお陰で、追いつけるタイミングを逃したんだ」

長い前髪で隠れていない右目はどこか不満感に満ち、言葉よりもウエイトを占める圧力を与えている。

「すつ、すまない、僕が調子に乗りすぎたあまり……」

「リッド君は悪くないですう。元は、マリーが言ったことですう。」

悪いのは、マリーですう」

険悪なムードの中、マリーシアが仲裁するように間に入る。自分がしてしまったことで起こったため事に対して責任を感じ、第三者が苦しむ姿を見たくなかったのである。

「まっ、誰のせいにするんだ。いいな」

叱咤していた時と比べ比較的柔和になった真琴。自分が戦いに参加していないだけに、これ以上の叱責をする義務はないと悟ったのだった。

「はつきりしたことがある。和鍋先生率いる教師グループが、水海

道君を邪魔な存在になると確定したということ。これからは、更に注意してレポート探しをしないと……」

淡い明かりが照らす中、しっかりと頷きあう三人だった。

事件のあった翌日、自分の中で多くの葛藤もあつたりしたが、忘れることに限ると判断した雅毅は今日も何事もなく登校する。珍しくお節介なお騒がせ天然娘の姿がなく、落ち着けるなと思った矢先のこと、何気なく自分の席に行ってみると机の上に置かれた紙切れに目が止まる。

「うん？ 何だ？」

手提げカバンの中身を出さないまま机のフックに掛け、誰かが残した二つ折りの紙切れに目を通す。

『来たらでいいから、教務室の担任まで。 鹿嶋』

担任の典佳らしいボールペンで書かれたメモを見る雅毅。何か注意されるようなことをしただろうかと思いつく。これとってヘマや問題行為をしたという自覚はなく、呼び出される原因が思いつかない。

「ったく、朝から何で呼び出すんだ？」

1人釈然としないまま、雅毅は思った様を顔に出し1人教務室へと向かう。

始業前の教務室。

まだ朝早いとあつてか教務室全体が慌しく動き、椅子の軋む音や書類を整理する音、教師同士の会話など雑多な音がひしめき合っている。

「失礼します」

誰の許可もなく入った雅毅。一瞥する教師もいるが、これといって構う素振りもなく与えられた目的を果たすため担任の姿を探す。典佳の方も、いつ来るのかと待っている様子で、入り口付近を見て

いたため直ぐに居場所が判明する。

来るよう手を招く典佳の姿を目にして、教師達の迷惑にならないようにして担任のもとへ向かう。

「おはよう、水海道。お前、ギリギリに学校来ないんだな？」

あまり整理は行き届いてはいないものの、教師らしく参考書や貼り付けることのできる小さなメモなど、個人で使えるデスクの上は乱雑に散らばっている。

「余裕を持って行動するって、自分で決めてるんです」

椅子に座る担任を見下ろしながら、後ろに両手を回し休めの体勢になる。

「へえ、珍しい奴もいるもんだな。だいたいの生徒は、チャイムと同時に来ればいいって考えを持つ連中が多いが、お前は偉いな」
見かけによらず、いいこと言うじゃないかと感心する典佳。こないいい生徒が、問題行動をするなんて想像できない。

「それで、何の用ですか？」

担任の他愛ない会話に付き合っても言いたげに、雅毅は話を適当に聞き流しストレートに尋ねる。

「昨日のことなんだけど、ラボ棟の屋上で何があったか知ってる？ その件について聞きたいんだ」

常に気丈に振舞っている以上に、担任でありいち魔導士である典佳は確信に迫るため、格闘家のような鋭い視線を送る。

「いえ、知りません」

あくまでしらを切る雅毅。挙動不審な素振りを見せないものの、真正面から目を合わせようとはしない。

「何にも知らないっていうのか？ お前はともかく、柴原のヤツは脚をケガしてるんだぞ。柴原は、教師に襲われたって怯えてたんだ。少なからず何か原因はあるだろう」

これといって強気に強要はしないものの、彼女が与える言葉の力と眼力は感情で訴えかけるよりもはるかに威力がある。

「確かに、教師に襲われました。けど、それ以上何も知らないんで

す。襲ってきた理由も、バックに誰がいるのかも……」

冷静に淡々と話す雅毅。感情の起伏が激しい方ではないが、ちゃんとした喜怒哀楽は出せる。しかし、担任とはいえ同じ教師に相談したとしても、解決できるのだろうかとか心配や疑心を抱かずにはいられない。

「……そっか、まあ、お前が知らないというなら、そうなのかもな。はあ、まあ、何か悩みとか相談したいことがあるなら、いつでも来い、聞いてやるぞ。恋の相談とかは、ちょっと……苦手だけどな」

自分で蒔いた種を踏んでしまい、何に笑っているのか知らないが、後ろ頭を掻きながら苦笑いする。

「はあ……」

曖昧な返事をし、用事が完了した雅毅は思い残すことなくすたすたと教務室を出て行く。

「……やっぱ、何かおかしい。あの事件、屋上がめちゃくちやになるくらい攻撃されたんだ。柴原はケガを負わされ、水海道は何も喋らない。何も無いなんて、おかしいだろ普通……」

1人どこかを見据えながら考え込む典佳。

生徒を襲う教師。

教育現場の中で、そのような異常事態が起こるなど尋常ではない。その上、同僚の教師が起こしてるとあつては、同僚である教師が止めに入らない限り收拾がつかない。内部抗争となれば、学園内で止めておくことなどできなくなる。

「……水海道雅毅、お前、一体何を握ってるんだ？」

難しい顔のまま、典佳は朝のホームルームを告げるチャイムに気づくことはなかった。

夕焼けに彩られた校舎。赤茶色の壁はオレンジ色の陽射しを浴びて一層深みを増し、由緒正しき趣を醸し出している。

校舎内に差し込む陽射しによって、廊下の床や窓ガラスも淡いオレンジに染まり、一日の終わりを告げるように平静を保っている。

人気のない廊下を歩く不思議な風体の女性。

ぼさぼさの頭に四角いメガネ。格好といえば、まるでボロ雑巾を継ぎ合わせたような多国籍の衣服をまとい、正直、清潔感を感じさせない服装。今向かっているのは、学園内でも数人しか訪れることのない、一番権威のある場所。

「失礼します、理事長殿」

重厚なドアを前にして、破天荒な格好をした女性は、似つかわしくない凜とした態度でドアの向こうの人物に許可を得るため声を掛ける。

「どうぞ、お入りなさい」

気品に溢れた声音で告げる室内の主。

入室の許可を得、女性はゆっくりとした流れで室内に入る。

室内（理事長室）は一流企業の社長室のような装いをし、調度品、歴代の理事長の顔写真など一点の狂いなく整然と並んでいる。その中、大きな窓ガラスの前にて背を向けるスーツを着たふくよかな女性。

「何用ですかペッテンバウアー先生。あながこちらへ来るなんて、初対面以来ですね」

背を向けたまま理事長は意外な訪問者に対し、優しく語り掛ける。
「理事長殿に、お伝えしたいことがございまして……」

理事長との距離を詰めるように、綺麗に整えられたカーペットの上を歩き、向かい合って置かれたソファの前で止まる。

「知っています。学園内で起きていることや、彼らの目的。そして、あなたがこの学園に派遣された理由も……」

ゆっくりとした動作で振り返り、一度年輪を重ねた皺の寄った顔で微笑む。そしてそのままゆっくりと歩き、理事長が利用しているデスクを背にする方のソファに腰を下ろす。

「なっ、何故なのですか？ わたくし、一度とたりも素性を明かすようなこと……」

理事長の見抜かれたという言動に驚きを隠せない様子で、ずれか

かったメガネを直す。

「まあ、細かい話はソファにお掛けになってからお話ししましょう」
にこやかに微笑み、ソファに掛けるよう手を差し伸べ促す。

「はあ、失礼致します……」

自分の想像の範疇を超えた出来事に度肝を抜かれ、頭が真っ白になつてしまったアンリは理事長の指示に従いソファに座る。

「さて、どこから話しましょうか。一部の教師と生徒が対立しているのは、学園内にあるかも分からない禁術の記されたレポートを探しているから。そして、一年生の水海道雅毅君が事件のキーパーソンであること。彼には絶大な魔力が眠っていて、それを危険と判断する和鍋先生をリーダーとする教師グループは命を狙い、ウエルバツク君をリーダーとした上級生グループは彼の力を買って仲間のように考えている。そして何よりも、あなたがこちらへ派遣された目的こそ、学園内で騒動となつているレポートに記されているという禁術を葬り去ることなのですよね」

あまり教師や生徒との関わりを持たない自分だというのに、ここまで学園内の内情を知りえているということに、アンリは驚かされるばかりである。その上、自分の素性まで見抜かれているなんて、改めて侮れない存在だと思い知らされる。

「理事長の仰る通りです……わたくしの目的はただ一つ、レポートに記された禁術をこの世から葬り去ることにあります。何故、そこまでの情報をお知りになつているのですか？」

「フフフ、それは人よりもちよつと観察眼が良いだけのことです。

私は、教師の皆さんに教育の何たるかを説こうとはしませんが、あなたのような秘密裏に活動している教師が問題行動を起こせば、何らかの処分を与えるつもりです。まあ、ペッテンバウアー先生は問題ありませんけど、どうかそのことだけは念頭に置いてください」

優しさの中にも鋭く研がれた棘のような言葉を述べ、再度、優しくに微笑む理事長。

「……じゅっ、十分承知の上で行動いたします。それで、その……」

「分かっています、あなたの身分は誰にも口外しません。今日のところはご苦労様でした、明日からの御教鞭、期待してますよ」

学園の実態を報告しようとしていたアンリは、逆に自分の正体を知られてしまう結果となり、今の心境は複雑なものだった。

『やはり、噂は本当だった……現理事長にして、伝説の魔道士、Mrs・八代暁子。あなたの力、見くびっていたようです……』

全身に走る緊張感に指先が振るえ、それを抑えるようアンリはギュッと拳を作るのだった。

4章

四章 絆の大切さ

あの事件は、本当に自分の身に降りかかったものなのか……

無残に破壊されてしまったラボ棟の屋上。今は、クレーンや業者が入り急ピッチで修理が進んでいる。壊れた理由は学園に所属している生徒に知らされていないが、学校関係者、主に地位の高い教師や理事長などには伝わっているはずである。

誰がどのような手段で破壊行為を行ったのか。それは、時間が経つにつれ有耶無耶にされ、単なる問題行為として処理され今日も何事もなく学校は運営されている。

「ふう〜」

実習室の帰り、ホームルームに戻る途中に立ち寄ったトイレ。自然な成り行きで立ち寄ったトイレは、学校のトイレは汚い・臭い・狭いの三大要因があるほど代表視され一番に近づきたくない場所として君臨している。私立校であるがゆえなのか、最近になって整備されたのか分らないが、カシミシユナ学園高等学校のトイレは清潔そのものである。男女共通ではのかにフローラルな香りが充満し、用を足した後などセンサーで反応し自動制御で水を流すなど配慮が行き届いている。トイレ清掃も業者が入り、常に清潔に保たれておりまさに憩いの場となっている。手を拭くための紙や、自動乾燥機など設置されトイレの悪いイメージを払拭している。

洗面台の側に授業で使用するテキスト類を置き、雅毅はハンドソープを手につけ、匂いの付いてしまった両手を洗う。両面まで濡れてしまった手のまま鏡に映る自分の前髪を整え、引き出した紙で手を拭く。丸めてくずかごに捨てようと鏡から目を離し、再び鏡に映る自分の顔を見ようとした瞬間、さっきまでいないはずの生徒が鏡に映っていた。

「……何スか？」

眼球だけを動かし、背後に立っている生徒に目をやる。背後の壁にもたれかかる様に腕を組んで立っている生徒は、きりつと締まった表情でじつと鏡に映る雅毅を見続けている。

「……話がある」

事務的な口調で言ったのは、前に授業中にも関わらず無断でクラスに入ってきた生徒の一人、ユークリッド・ウェルバックだった。

何も肯定の意を受けてもないというのに、彼はトイレを出て行く。雅毅も、苦虫を噛みつぶしたような嫌な顔をし、テキスト類を持つと後を追うようにトイレの外へ。

ドアを抜け廊下に出てみると、生徒が行き交う反対側に佇んでおり、雅毅はその間を縫ってユークリッドの側へ行く。

「……話って、何スか？」

「気丈に振舞うフリなんて、中々、肝が据わっているな。驚いたよ、重力を自在に操る教師の攻撃をかわし、屋上から逃げ延びるなんて」
まるでその現場にいたかのような冷静な言葉に、雅毅は一瞬にしてあの時のことを思い起こされてしまった。

「……屋上って、何のことですか？」

忌まわしい出来事が頭を過ぎってしまうが、持ち前の自制心をフルに使い表情に出ないよう努める。

「別に隠す必要なんてない。全部知ってるんだ、君を襲えと命令した人物や関わっている人物まで、何もかも……」

その何もかも見透かすような視線を嫌い、雅毅は誤魔化すように俯く。

「そう言うなら教えてくださいよ、誰がオレの命を狙ってるんです？」

「君の命を狙わしているリーダー、化学担当の教師、和鍋敦史という人物だ。彼は禁術を記したレポートを手にするためにこの学園に来て、夜な夜な教師達が使用している研究室を探し回っている。野心家で、目的を達成するためには手段を選ばない冷徹な男だ。そ

して、彼の手下のような存在の教師が数人ほどいる。君を襲つてきた教師も、多分この中に含まれているだろう」

同じ目的を持っているだけあり、敵の情報収集に抜かりはないらしい。雅毅を狙うリーダー格の人物のについて知っているようななど、やはり優秀としか言えない。

「リーダーが誰なのか分かりましたけど、命を狙うのが分からないんです」

自分を狙う人物がはつきりし、多少なりと疑惑は晴れたつもりだ。晴れはしたものの、物事の核となる部分がいまいちつかめない。

「そんなことは単純だ。多分、大体での君の活躍が目に入り、後々脅威になると判断して今のうち芽を刈ろうとしているんだ」

「そんな……オレは、何も関係ないじゃないか！ 関わってもいいのに、どうして命を狙われなきゃいけないんですか！」

人の目など気にする余裕もなく、雅毅は理不尽な仕打ちに対しユークリッドに胸倉をつかむ勢いで噛み付く。

「元々、この世は理不尽なことばかりさ。それを打開するには、力を持って制さなくてはならない。そうするためにも、水海道君、君の協力が必要不可欠なんだ。そうすれば、君の命を守ることだって可能だし、僕達にとっても何よりも強い味方になる。君を守れるのは、僕達だけだ」

前回と同様、ユークリッドは仲間にならないかと誘い掛ける。しかし、前回とは異なり、彼の言ったことが現実起こりケガ人まで出ている。これ以上の被害が出る前に、こっちから打って出る時なのかもしれない。

「ちよーっと、待ってええっ！」

言葉を考えあぐねている所へ、どこでどんなふうに聞いていたのか知らないが、誰もが注目するような声を上げ女子生徒が現れる。

「こそこそ先輩さんと会ったのは、そんな理由だったんだね？」

雅毅と同じテキスト類を持った少女、海涼は両手で抱きかかえるような格好で現れ、颯爽と雅毅とユークリッドの間に割り込む。

「またお前か。邪魔しないでくれ、話がややこしくなる」

「ふう、話がややこしくなるって酷いよ、私だって現場にいた張本人なんだよ」

あの日負ってしまった怪我がまだ完治してないようで、ソックスを履いていてもケガをした場所が不自然に膨らんでいる。

「君は確か、教師に襲われた時に一緒にいた、柴原海涼さんだね？」
名前だけしか聞いていなかったユークリッドは、初めて海涼と対面した。

「あれえ？先輩さん、どうして私の名前を知っているんですか？」
「上級生ともなれば、あらゆる情報を熟知しなければならないんだよ。学園内で起きた些細なことまで、僕らにとって重要なことなんだ。生徒に危害が及ぶものなら、特にね」

海涼の何ともしらつとした質問に対し、ユークリッドは笑みを浮かべつつも真剣さをひしひしと感じさせる。

「へえ、上級生になると、大変なんですね」
心底間の抜けた答えを返し、海涼は進級することに生じる大変さを学ぶ。

「おい。お前は、納得するためだけに登場したのか？」
奇妙に場の空気を壊した海涼の厚顔無恥ぶりを、脳天チヨップを交えて諭してやる。

「あつ、そうだった。もつと大変なことがあったんだ」
雅毅の左チヨップを受けたまま、自分のしようとしていたことを思い出す。

「どっちの側に付こうとしなくても、自分達だけで探しちゃえばいいんだよ。そうすれば命を狙われないし、すごい魔法使いになれちゃうかもしれないし」

まるで遠足へ行くための算段をしているかのような口ぶりで、海涼は安易な考えを抱いている。

「ちよつと待て。自分達つてのは、誰をさしてんだ？」
引っかかるポイントを聞き逃さず、すかさずツツコミを入れる。

「それはもちろん、私とマークんだよ」

無邪気というか無頓着というか、話の内容も何も考えもしないようなことを言う。話を聞いていた割に、理解する前に右耳から左耳へ抜けていった節がある。

「分かってないようだなお前は。オレは、誰に付く付かないじゃなくて、こんな事件に関わるのはゴメンなんだよ。何だか知らないレポートにだって、生徒と教師の争いだって全然興味ねえんだ」

「だいじょぶだよ。マークくんには才能だって、すごい魔力だってあるんだよ。屋上で先生に襲われた時は怖いって思ったけど、どんな敵だって、どんな障害だって必ず乗り越えられるよ」

彼女なりの説得させる言葉なのだが、何の確証も根拠もなく、本人が認めない限り何の効力を持たない。

「なんて大胆なことを言うんだ。僕達は何ヶ月費やしても見つからないものを、君達二人だけで探し出すなんて不可能だ」

「あつ、あのなあ……」

「そんなの、やってみないと分かんないですよ。さつ、マークくん、次の授業があるから教室に戻らないとね」

会話を挟む余裕を与えず、海涼は雅毅の背中を押し強引に連れ出す。

廊下を通る他の学生も、迫る時間にゆっくりだった歩調も幾分早くなっている。

「稀代の一年生に、怖いもの知らずの女子生徒。フツ、僕らもうかうかしてられないな」

他人の迷惑など省みずに背中を押す海涼の後ろ姿を見送りながら、ユークリッドは不可能を可能にしまいそうな脅威に肩を竦めるのだった。

「うーん、水海道君、協力してくれないんですか？」

「そうらしい。クラスメートのミス・柴原が自分達だけで探し出すとか言い出して、水海道君はそのまま行ってしまったよ」

「フツ、無責任な。相手にしようとしている勢力も知らないで、おめでたい連中だ」

相手方の動きも活発なものとなってきた今、一秒でも惜しい彼らは授業や研究などそっちのけで、禁術が記されたレポートの探索をしている。

大体での出来事を見ていた敵。何も関係ないというのに、水海道雅毅を脅威として認定し消そうとしている。まだ自分の力を使いこなせていないというのに。

そのような段階にも関わらず、柴原海涼は彼の力だけを頼りにレポートの探索をしようとしている。どんな不利な状況に追い込まれても、自力で打開するだけの力がないというのに。その状態のまま敵と相對しても、勝機は微塵もない。

「まあまあ、自分達に探索できる能力がないことぐらい、彼らだっ
て知ってるさ。一瞬だけでも夢を見たって構わないだろ？」

本気になって物事を見通す真琴だけあって、冗談や笑いを受け入れられないほど頭が固い。

「そうだといいいんだがな……」

窓から差し込む光だけが室内を明るくし、三人はそれぞれ分かれてレポートの探索に当たる。

数分が経過し、それぞれ思い当たる箇所を探したものの、やはりと言っしかないくらいこの場所にもなかった。

「はあ、ここにもなかったですう。このまま学園中探しても、無いかもしれないですう」

制服やマントに付いてしまった埃を叩きながら、マリーシアは二人が待つ部屋の中央に行く。

「そう簡単に諦めちゃいけない。この学園のどこかに必ずあるはずなんだ。根気よく探さないと、先を越されてしまう。元氣を出して頑張ろう」

弱気になるマリーシアをユークリッドは、優しく肩に手を置いて励ます。長期に渡って成果が上がらないとなれば、誰だって落ち込

んだり投げ出したくだったなる。しかし、ここで落ち込んで投げ出してしまえば、これまでの苦労が水の泡になってしまう。ここで踏ん張ることこそ最短の近道であり、物事の核となる重要な要因なのである。

「はっ、はい、マリー、ガンバって探しますう」

会心の笑みを浮かべ、自分が立ち直ったことを示す。晴れやかになった顔を見、ユークリッドも真琴も軽く頷き了解を示す。

この部屋の探索を終え、次の研究室に向かおうと動き出した瞬間、今までフローリングだった床は荒れ果てた荒野になり、研究室のスペースをはるかに上回る広さに変貌する。

「なっ、なんですか！ いきなり広くなったですう」

窮屈だった室内を覆う壁が消え、目の前に広がる広大な荒野を目にして驚きを隠せない。

「リッド、これは……」

「ああ、気をつけるんだ」

一瞬にして事態を飲み込んだユークリッドと真琴。背を向け三角形の隊形を作り、どこから攻めてもいいよう体勢を整える。

「あなた方が敵だということは知っています。隠れていないで出てきてください」

不意の攻撃にも対処できるよう、ユークリッドは右手の人差し指と中指を伸ばし臨戦態勢をとる。

「フッ、さすが上級クラスの中でも選りすぐりの三名だ。中々侮れん」

発生源の特定できない声に対し、リッド達は神経を研ぎ澄まし気配を察知する。

刹那、何もない赤茶けた大地が音もなく亀裂が走り、揺れ動く切れ目の向こう、暗黒な世界が広がる中から三名の人物が現れる。

「やはり、お前か！」

彼らの正体を見、真琴は片方だけ見える目尻をきりっと引き締め睨み付ける。

「教師に対してお前呼ばわりとは、些か素行が悪いようだ」

長く漆黒を思わせる黒い白衣を纏い、和鍋は余裕の笑みを浮かべる。彼の左右には男女それぞれ教師を従えているものの、魂が抜けているように虚ろな表情をしている。

「どっ、どうなってるんですかあゝ？」

「あれは一種の催眠術のようなものを施されているんだ。立って歩いてはいるが、意識は無く術者の命令だけ聞く」

普段の時とは違う教師の姿に恐怖を感じ、一歩身じろぐマリーシア。それに対し、ユークリッドは冷静な状況分析をして、頭の中で戦略を練る。

「さすがだユークリッド・ウェルバック。私が掛けた術を見抜くとは、やはり侮れんな」

褒める言葉を述べるものの、心の底から賞賛しているわけではなく、どこか危機感を含んでいる。

「同僚の教師に催眠術で操るなど、どんな目的があるんですか！」

「フツ、知れたこと。学園の風紀を乱す生徒には、監督する教師が何らかの処罰を与えねばなるまい。特に、私の邪魔をする生徒ならなおさらの事」

堂々と対峙して初めてその真意を訊くユークリッド。雅毅を襲わせた張本人から確固たる証拠を手に入れ、彼の狙いを正確に理解しなければならぬ。

「お前こそ、生徒の命を狙うなど教師としてあるまじき行為。理由如何によつては、例え教師だろうと許さん」

真琴も凄みを利かせ和鍋に言い放つ。

「教師に齒向かうとはいいい度胸をしている。風紀を乱す者には厳重な処罰だ」

「交渉が苦手なようですね。あなたが望む処罰、どのようなものか望むところですよ！」

言葉での交渉が決裂し、和鍋もリッド達も戦闘態勢に入る。

暗く狭い印象の研究室が消えた今、互いに思いの限り力を出せる。

「よし。上松、お前は火属性の魔法で奴らを攻撃しろ。そして、船井、お前は光の魔法でカモフラージュし時間を稼ぐのだ。いいな」

「はい、承知しました……」

「はい、承知しました……」

事務的な魂のこもっていない言葉を呟くと、若い男性教師は電源が入ったように動き出す。中年の女性教師も動き出し、右手の二本の指を伸ばし胸に置く。

「さて、処罰の時。心して受けるがいい！」

三人はそれぞれ動き出し、和鍋は環境に合わせた人型の生成に入り、上松は凄まじい跳躍と同時に両手に空気をも焦がす勢いの炎を具現化させる。唯一回避を命じられた船井は呪文を唱えずして自らの体を風景と同化させる。

「どつ、どうするんですかあ？」

「真琴は炎使いの男性教師を頼む。君のスピードなら相手にできるはず。そして、マリィ、君はカモフラージュしている女性教師を抑えて欲しい。難しいかもしれないが、彼女の動きを止めれば一気に勝機が流れ込む。僕は、和鍋を相手にする。みんな、頼む！」

今にも攻撃してきそうな男性教師を牽制し、ユークリッドはそれぞれに指示を与える。敵のフィールド内にいる限り、無駄な行動ひとつでも負けに繋がる。

「御意だ、リッド！」

「がつ、頑張るですう！」

敵の投げ下ろす火球を三人は瞬時にかわし、分担された相手に向かう。

「研究室では急を突かれたが、今回ばかりはそうはいかない」

言葉を紡ぐ間に生成は続き、液状化した大地はそれぞれ腕を剣や斧、槍やハンマーといった武器に変形させる。

「どこだろうと同じことだ。今日こそ、お前の悪事を打ち砕いてやる！」

体勢を整え、ユークリッドは和鍋の前に現れた四体の人型と相対

する。そして、左手の人差し指と中指を伸ばし、右腕を呪文と共に撫で風の刃を具現化させる。

「異次元の空間で、永久に眠るがいい」

手駒を差し向けるように腕を払うと、水を得た魚のように一斉に襲い掛かる人型。ユークリッドも刃と化した腕を前へ押し出し、走り込む。

広いフィールド内を三手に分かれたリッド達。ユークリッドとは違い、マリーシアや真琴は広さを十分に活用した戦いを演じる。

風さえ吹かない荒野に響く爆音と熱量を含んだ爆風。何千度にも及ぶ火球が荒れた大地に叩きつけられ、巻き上がる粉塵とガラス化した礫が飛び散る。

炎の球を具現化させ、無数に投げつけられる中を、真琴は両足に浮遊するための力を蓄え瞬時にかわす。

『相手の攻撃はかわせる。だが、中々距離が詰まらない……』

相手の攻撃をかわせはするものの、真琴の間合いにならない。所々、穿つ地面にできたガラスを踏みつけながら、真琴は相手の隙を窺う。意思を持たないと言っても動きは自然そのもの、違和感やぎこちなさはない。

男性教師は空中戦を諦め、地面に降り立つと瞬時に両手に赤々と燃えたぎる炎を作り出す。

『地上戦を選んだか。こつちとしてはやりやすい』

刹那に訪れる互いの間。鳴り止まない爆音や吹き付ける粉塵は一時収まり、離れた位置に両者が対峙する。

『前方からの攻撃ならかわしやすい。地に足を付けた状態で終わらせる』

ここが勝機と思った真琴は、地面に転がったガラスの欠片を数個拾う。

『一番乗りは、譲らない！』

手の平に欠片を乗せたまま、真琴は浮遊するための力を手に集め

る。

攻撃を繰り返さない相手を探し出すことは容易ではない。

二方向からは凄まじい爆音や鎗を削る凄まじい音が飛び交っている。その中において、マリーシアは箱に閉じ込められ、周囲をバンバン叩かれているような辛い状況下にいた。

「まあ、どこなのさ」

周囲の風景と同化した女性教師を探し出そうと、マリーシアは荒野を走り回り奔走している。

魔力に関しては人よりずば抜けたものを持っているが、肉体的な体力には自信がなく普通に走り疲れていた。

周囲を見渡しても広がるは荒涼とした草木一本も無い大地。その中において、カメレオンのように周囲と同化した教師を探すのは至難の業である。

「はっ、走り回っていても、ぜつ、全然分らないですう……」

360度見渡し、マリーシアはどこにいるか分からない女性教師の姿を探す。遠くで真琴やユークリッドが戦っている。自分でも何か役にたたなきやという衝動に駆られるも、姿の見えない敵に対して手が打てない。

「マリーも頑張らなくちゃいけないです。リッドも久無さんも、戦ってるんです。マリーも役に立たなくちゃ」

遠くで戦っている仲間の姿に触発され、マリーシアは両手を突き出しクロスさせると呪文の詠唱に入る。

「凍てつく氷の息吹。我が前に姿を示せ！」

周囲の空気を取り込み、冷気として圧縮した白煙が手の平に集まる。

「ハッ！」

気合と共に放たれた白煙は一直線に走りぬけ、後を追うように氷の道が作られる。

「きりがないですけど、この方法でいくしかないです」

前方に続く氷の張った道を見据え、マリーシアは決心するのだ
た。

「ハアアッ！」

対峙するには遠い距離だった。しかし、自分にはプロの陸上選手
よりも、地上にいるどんな生物よりも速く走れるという自信がある。
非科学的な発想かもしれない。けど、自分を魔力が絶対である世界
で生き抜くために、魔力と体術を組み合わせた能力が自分に必要だ
と。

両足に蓄えた魔力を一気に爆発させ、真琴は男性教師目掛け突進
する。相手も肉薄する敵に対し両手に溜めた火球を投げつける。

伊達に教鞭を揮う教師だけあり、投げつける火の玉の速さは目で
追えないものがある。避ける素振りさえ見せず、突進してくる真琴
に対し投げつけられる火球。完全に避けきれず頬を掠め、皮膚を焼
き火傷を引き起こす。それでも構わず、真琴はどんどん距離を詰め
至近距離まで接近する。

「これでも受けてみる！」

攻撃の手が緩んだ隙を突いて、真琴は手にしていたガラス片を投
げつける。避けきれないと判断した教師は、飛んでくる欠片を手に
溜めた炎で防御する。吸い込まれたガラス片は高温の炎で燃え尽き、
男性教師に届くことはなかった。

「少しばかり、眠っててもらおうか」

防いだのも束の間、すぐ側まで迫っていた真琴の姿は見え失っ
てしまう。心を操られていても、一瞬にして消えた敵に対して焦燥
感があり体の制御が鈍る。

致命的な隙を見逃さなかった真琴は、男性教師の左側に立つと思
いっきり頬を殴りつけた。

完全に油断していた男性教師はものの見事に弾き飛ばされ、数十
メートルをのた打ち回りながらようやく止まる。

「ふう、こっちは片付いた」

ヒリツとする頬を撫で、真琴は遠くで氷魔術を繰り返し唱え走り回っているマリーシアの姿を見る。

『苦戦してるな、マリー』

一足早く一人を倒した真琴。その足で、姿の见えない敵を探し回るマリーシアの元へ向かう。

「こっちは片付いた。一緒に探し出そう」

戸惑いながら氷魔術を放つマリーシアに駆け寄り、優しく肩を叩く。

「えっ、えっつと……はっ、はい」

中々できなかった自分に対しての戸惑いを覚えながら、マリーシアは心強い味方を得たのだった。

一体の大地から分離されて作り出された人型は、剣状化した腕を振り下ろし攻撃を仕掛ける。相手の攻撃を咄嗟の動体視力で捉えると、ユークリッドは刃と化した腕を上げ攻撃を受け止める。圧縮した風の刃は、元々土だった剣を真つ二つに切り、切り離された剣先は地面に落ちる。武器を失った人型に対し、ユークリッドは体を屈め地面を蹴る反発力を利用して腹部を切り裂く。

「クッ、またか」

確実に斬った手応えのあるユークリッド。上下に分割された人型は戦闘不能になることがなく、部品を寄せ集めては再生し復活する。その光景にユークリッドは見飽きていた。

何故なら、その行為は延々と繰り返し、剣を持った人型が再生したのはこれで五度目になる。

和鍋が生成した人型は、その場に原料となる素材がある限り半永久的に生成・再生ができる。前回、マリーシアの氷魔術のお陰で現状を打破できたが、今回ばかりは一人で相手にしなくてはいけないしかし、これは一時の時間稼ぎに過ぎず、メインはマリーシアの働きに掛かっている。和鍋や生成された人型の注意をマリーシアから離すのが、今の自分に課せた任務である。

『頼んだぞマリィ、君の働きがこの戦いのキーなんだから』

少し息の上がったユークリッドを四体の人型はいつの間にか囲み、武器に変形させた腕を一斉に振り上げる。

「たかがゴーレムの存在で、僕に勝てると思ってるのかい？」

四方を囲まれているのにも関わらず、ユークリッドはまったく怯まず槍を持った人型に飛び掛る。

カモフラージュした女性教師を探す真琴とマリィシア。マリィシアは繰り返し魔法を唱え地道に搜索し、真琴は空中に舞い上がって何か違和感を与えるものを探す。

『マリィが放った氷塊で逃げるスペースは少ない。どこかにいるはずだ……』

高い位置で全体を見渡し、真琴は目を凝らして全体像を把握する。懸命に氷魔術を繰り返しているマリィシア。その位置から南下した場所で、ユークリッドは和鍋が生成した四体の人型と戦っている。当の和鍋は継続的に魔力の放出を行っているためその場から動けず、味方が一人欠けたことさえ気づいていない。

「うん？」

勘だけで魔法を放っているマリィシアの背後、数メートルの位置に氷とは異なった空間の揺らぎのようなものを見つける。

「見つけたぞマリィ！」

発見した瞬間、急降下する猛禽類のような速さを纏って地上のマリィシアの元に戻る。

「えっ！ 本当ですか？」

「ああ、お前の後方にいるのを確認した。マリィ手荒なマネはしたくないのだが……」

身構えもしない無防備なマリィシアを軽々持ち上げると、真琴は腕の力だけで投げ飛ばす。

「うわぁ〜なっ、何で、投げるんですかぁ〜？」

「マリィ、カモフラージュした教師はその下にいる。地面に向かっ

て、氷塊を放つんだ」

徐々に遠くなっていく真琴の声を信じ、マリーシアは空中でバランスを整えながら地面に両腕を突き出す。

「凍てつく氷の息吹。我が前に姿を示せ！」

自分の放った冷気の反動を堪え、マリーシアは必死に抗った。自分のしていることがみんなのためだと信じて。

氷柱の群れが一直線に作り出され、ある一部分だけが不自然に盛り上がっている。

「あれ〜？ あそこだけ変ですう〜」

徐々に落下していくマリーシア。人が無傷に着地できない高さまで上げられていただけあって、受ける衝撃は生半可なものではない。

「きゃあ〜っ！ 落ちるですうううう！」

改めて自分がどんな状況なのか理解したとたん、マリーシアは軽度のパニックに陥りじたばたもがき出す。

「……久無さん」

自由落下していた体が急に止まり、どこか心地良い浮遊感が包む。

「良くやったなマリー。見事命中した」

「あつ、ありがとうございますう……」

真琴に抱かれながらゆっくりと下降していく二人。その最中、不自然に凍りついた氷塊が砕け中から中年の女性教師が現れ、状態そのままに崩れ落ちる。

『クツ……船井の結界が破られたか』

研究室を包み込んでいた異空間のフィールドの揺らぎを感じる和鍋。ここでの勝負を諦めるように人型の生成を止める。

「はあああつ！」

力を失った最後の人型を切り倒し、ユークリッドの前に和鍋の姿が現れる。

「さあ、あなたが操っていた教師は倒れました。どうします？ まだ戦いますか？」

風の刃を腕に纏ったまま、ユークリッドはその切っ先を和鍋に向ける。

「フッフッフ……」

次なる行動を匂わせるような意味あり気な押し殺した笑いをする。次の瞬間、和鍋は懐から何かを取り出し投げるような仕草をする。

「イタッ！」

何を投げたのかと思い浮かべていた最中、急に聞こえたか細い少女の声。その声の方を見ると、遠くでうずくまる生徒と支えるかのように寄り添う生徒がいる。

「なっ、何を投げたんです！」

肝心のことを問いただそうとした瞬間、限りなく続く荒野は跡形も無く消え去り、薄暗く狭い研究室に戻る。

「フッフッフ……いつまでチームプレイができるかな……」

ユークリッドの問いに答えず、和鍋は黒衣のような黒い白衣を翻し闇へと消えていく。

「クッ……また取り逃がしたか……」

追い詰めたのにも関わらず、逃げ出してしまった和鍋に対し臍を噛むように悔しさを押し出す。

「はっ、早く来てくれリッド！」

真琴の危機感ある声に揺り動かされ、急いで駆け寄る。そこには、制服が黒く滲むほど左腕から出血し、苦しそうに喘ぐマリーシアが横たわっている。

「なっ、何があっただ？」

「分からない。何かマリーの腕を掠ったと思った瞬間、いきなり倒れたんだ」

和鍋が見せた何かを投げる仕草。突然出血し、倒れたマリーシア。

二つの事象に合点のいったユークリッドは、真琴達がいる周辺を見渡してみる。

「これか……」

壁に貼られた紙に突き刺さったナイフを見つけたユークリッド。
あまり深く刺さっていないため、あっさりと抜いてみると刃先には
間違いなく血痕が付いていた。

「和鍋がこれを投げたとなると、刃先に何か毒を塗っていたのか……」

「リッド！ マリーの顔が青ざめていく」

抱きかかえたマリーシアの病状の悪化に、悲痛なまでの叫びを上げる。

「どうしよう……唇もチアノーゼで、体温が異常に冷たい。何か手はないのか……」

付けていたスカーフを使い、真琴は傷口をきつく縛る。

「いつまでチームワークができるかなと言ったのは、このことだったのか……」

和鍋が呟いた一言を思い出し、憎しみを覚えたように手にしていたナイフを床に投げつける。

「リッド、このままじゃマリーは死んでしまう。何か治療を施さない……」

「だい……じょうぶ……しっ……しんぱい……しな……いで……くっ……久無さん……」

血の気を失った柔らかな唇を微かに動かし、悲しげに俯き真琴の顔を見上げる。

「だっ、大丈夫なものか！ 君はケガを負ってるんだ、喋っちゃいけない！」

健気に空元気を見せ付けるマリーシア。彼女の頬を触ると氷のよう
に冷たい。

「このままじゃ、マリーは死んでしまう！ 早く医務室に運ぼう！」
体温の低下を防ぐと、真琴は自らのマントを外しマリーシアに
被せる。

「……僕が、僕が、もっと注意をしていればこんなことに……」
「後悔するのはいつでもできる。今は、マリーを医務室へ」

真琴の声に突き動かされ、ユークリッドは原因不明な病に侵されたマリーシアを背負い急ぎ医務室に向かう。

温かなオレンジ色に染まった空。筋雲がどこまでも続き、夕焼け色の空を縞模様彩っている。

医務室から見える景色は日常風景に馴染んだものだった。トラックを走る女子生徒。サッカーのゴール目掛けボールを蹴り込む男子生徒。

学校生活を謳歌し、甘酸っぱい青春をかみ締めている学生達。楽しいことも辛いことも全部、いい思い出として振り返るために。

カーテンで仕切られたベッドに眠る栗毛色の髪の少女。普段の彼女を知る人物なら、誰もが可愛らしい女の子だと口を揃えて言うだろう。しかし、今の状況を見て感想を言うのであれば、凍死寸前の可愛そうな女の子と言えない。

「マリー……」

点滴の落ちる管に繋がれたマリーシアの手を優しく握るユークリッド。末梢血管に当たる指先は氷のように冷たく、血液の流れを遮断されたように青ざめている。

ベッドの両脇には心拍計や体温計が置かれ、モニターに繋がれるように多くのコードが何重にも掛かる布団の中へと続いている。体温低下の著しいマリーシアは、これ以上症状が悪化しないよう点滴や抗生物質といったものを投与されている。

それでも尚、彼女を苦しめる原因から開放するには至らず、ひき付けを起こしているように震えている。

「どうだ状態は？」

囲っているカーテンを開けて入ってくる真琴。どこか疲れた表情を浮かべ、マリーシアを見下ろしながらユークリッドに近づく。

「あつ、ああ、異常……ない……」

悲壮感と疲労感を緬い交ぜにしたようなやつれた顔を上げ、寄りそうように立つ真琴の顔を見上げる。

「先生と相談したのだが、やはりマリーの急激な体温低下の原因が分からない。ナイフによる創傷から感染したに違いないが、どのような毒を盛られたのが不明だ」

マリーシアの置かれた状況の説明を耳にしたのにも関わらず、ユークリッドは魂の抜け殻のように理解に至っていない。

「……クソッ、僕が……僕が……ここまで不甲斐ないなんて……」
両手を両膝の上に置き、俯きながら自分に非があることを呟くユークリッド。ギョツとズボンを握り締め、情けない自分に対して悔しさが込み上げる。

「散々探した挙げ句、見つからない上、マリーをこんな状態にしてしまうなんて……最初っからしなきゃよかったんだ……」

助けることも、守ることもできない自分に対して起こる苛立ちと絶望。一緒に探さないと誘ったあの時に戻れたなら、マリーをここまで苦しめることはなかったはず。そうだというのに、自分は己の欲求を満たすためだけに無責任にも仲間を誘い入れた。一人でも責任はないと擁護しても、自分自身を誤魔化し正当化しようとするなんてできない。

「もう……止めにしよう。これ以上、真琴やマリーを危険な目に遭わせるなんて、僕にはできない……」

消え入りそうな命の灯を、懸命に燃やし続けているマリーシア。姿を見据えながら、ユークリッドは後悔の念に苛まれる。

「そんなこと……言うな」

膝に置かれたままの右手を取ると、真琴はこれでもかというほど左手に力を込め握り締める。

「そんなこと……言うんじゃないっ！」

つかんだ手を力任せに引っ張り上げ椅子から立たせると、真琴はユークリッドの手を繋いだまま、空いた右手をマリーシアの右手に置く。

「一体、誰のためにここまでしてきたと思ってんだ！ 自分を何様と思っている！ 最初から覚悟なくして付いて来ると思っていた

のか？ 止めようなどと二度と口にするな。

自分と、何よりもマリーの思いを踏みにじるようなことはするな。分かったか？」

これでもかと手の骨を粉碎するつもりで、再度、ユークリッドの手を握り締める。

「……ああ、分かった。すまない、自分を見失っていたみたいだ。君やマリーの思い、

決して裏切らない。神に誓って……」

ようやく本来の姿を取り戻したユークリッドの姿に、表情も和らぎ握り締める力を緩める。

「マリーの侵されている病気を何としてでも治そう。治療法を見つけて出すんだ、必ず」

「ああ、必ず見つけ出そう。大切な仲間なのだから……」

手を繋がれた三人は、ここに誓いを立てた。仲間を見捨てず、必ずや目的を果たそうと。

5章

五章 地下室の出来事

マリーシアが倒れてから夜が更け朝が来ても、体調の回復を見せることはなかった。看病をすると提案したもの、生徒が寝ずに看病するなんて良くないことだと、校医はそのまま医務室に残り付つきりで看病してくれた。

時々うわ言のようにユークリッドや真琴の名を呟いていたことを聞かされた二人は、病魔の淵にしようとも仲間のことを考えている健気な姿に心が痛んだ。

「……あの古い屋敷の中に、マリーの侵されている毒の血清があるのか」

マリーシアが倒れてからというものの、二人は授業や研究に打ち込む気力などなく、毒に苦しむマリーシアの顔が頭から離れない。

現在、昼食や雑談を楽しむ生徒などで賑わいを見せる中庭に場所を移して、これからについての相談をしていた。

「これまで、あそこに近づいたことはなかったが、あの場所にあるとは信じられない」

この私立カシミシユナ学園には多くの珍しい建造物がある。この敷地内にある古い屋敷のどこかに、マリーシアを苦しめる毒を直す血清があるのだと校医から教えられたのである。

「とにかく、闇雲に探すよりも見当が付いてる場所を探そう。事態は一刻を争う」

「そうだな。急いで屋敷に向かおう」

そうと決まったとたん、真琴は動きを見せるがそれに続こうとするユークリッドは何か思い悩むように佇んでいる。

「おいリッド、事態は一刻を争うんだぞ。急ごう」

「……いや、待ってくれ真琴。あの屋敷の構造は複雑で、建物以外

にも地下室がある。そのような中を二人だけで探すのは危険だ。誰かに協力を仰ごう」

「自分達以外に、協力者などいるのか？」

虫のいい話に、離れていた真琴が嫌な顔をして戻ってくる。

「ああ、してくれるかどうかは分からないが、候補はいる」

「えーっ！ あのお人形さんのような先輩さんが病氣！」

ユークリッドが挙げた候補生は、訳を聞いて早々驚嘆の声を上げる。

雅毅達を呼び出したのは学園内に併設された女子寮前で、昼間ともなれば利用する生徒は皆無に等しく人の目を気にすることなく密談ができる。

「原因不明の病に侵され、命の危機なんだ。協力してくれないか？」

「……嫌です」

自分達のムードに引き込めると思った矢先、それを真っ向から打ち崩す一撃。

「先輩の命が危ないことは分かりました。けど、オレ達には何も関係ないじゃないですか。これ以上、ゴタゴタに巻き込まれるのはゴメンです」

焦点の少しずれたメガネを直し、雅毅は協力を拒否する。

「ヒドイよーっ。マークくんがそこまで冷血漢だなんて思わなかったよおー」

今にも泣き出しそうな勢いで、海涼は雅毅にしがみつく。

「忘れたのかよ、屋上で襲われた時のこと。もう、目立つようなこととはしたくないんだ」

「そんな、そんなあー。あの時は怖かったけど、今は先輩さんの命が掛かってるんだよ。助けられるかもしれないのに、見捨てるなんて事、できないよおー」

あくまでも協力しない雅毅に対し、海涼はしっかりと諭しづけてやるように制服を掴んで前後に揺らす。

「そうなんだ、仲間の命が掛かっている。頼む、協力してくれ」

いつもクールで冷静な真琴でさえ、危篤状態の仲間を心配し頭まで下げる。

「普段、頭を下げるようなことをしない真琴がこうも願いでているんだ、僕からも頼む」

真琴を見習うように、ユークリッドも見よう見まねで金髪の頭を下げる。

「……誰も襲ってくるってことはないんですね？」

「ああ……」

「……負けました。協力しますよ」

やっとのことで折れた雅毅に、海涼は掴み掛かったままの手をゆっくり離す。

「やっぱり、マークくんは優しいね」

につこり微笑んで見せる海涼。無邪気な笑みの裏に、どんな恐怖が待ち構えているのかも分からないというのに。

「感謝する……あの、気になるんだが、さっきからマークくんというのは誰なんだ？」

思いも寄らないユークリッドの一言に、この場にいた誰もが一瞬にしてマリーシアの力を得ずして凍りついてしまった。

鬱蒼と茂る雑木林の中。そこに、学園内に古くから存在している屋敷が建っている。過去数十年もの間人間の手を入れられることのなかった雑木林は、手付かずの荒れきった自然の姿を表している。

「うわゝ、こんな古い建物があるなんて知りませんでした」

外装は古さを醸し出しているが、あまり破損箇所はなく見た目にはしっかりした造りをしているように思える。

「この中に、マリーが侵されている毒を治せる血清があるんだ。二人共、協力してくれたことに感謝する。何としても、血清を探し出しマリーを救ってやって欲しい」

屋敷内に入るということで、ユークリッドや真琴は室内の暗さに

対応するため、それぞれ懐中電灯を持ち合わせている。

「で、オレ達を呼んだってことは、このまま二人で行かせるわけじゃないんでしょ？」

連れて来られて従わされた雅毅は、不機嫌に後頭部を掻く。

「その通りだ。この屋敷は地下室もあって、二手に分かれて探す方がいい。そういうこともあって、チーム分けをする。僕は柴原さんと組み、真琴は水海道君と組む。何か異論はあるかい？」

三人の顔を見渡し、同意を求めるユークリッド。真琴は軽く頷き、雅毅は別に意に介さずな様子。そして海涼は、何か異論があるのかうずうずした様子でユークリッドを見つめる。

「僕達は血清がどんなものなのか知っている。それに、力のある者と力のない者が組んだほうが危機に対処できる。残念だが、柴原さんは僕と組む」

即急な事態を考慮し、海涼は不平たらたらしい様子でユークリッドの側に寄る。

「お前は、自分とだ」

鋭い視線を浴びせられながら、雅毅は渋々真琴の側へ寄る。

「僕達は上へと向かう。君達は、地下を探してくれ」

それぞれ組と方向が決まり、屋敷内へと入っていく。

薄暗くジメツとした通路。明かりという明かりが射し込まず、奥へと続くは暗黒の世界。唯一照らす懐中電灯の灯りはとても微力で、地下室に入ってしまった今では身の回りぐらいいしか分からない。

「はあ……なんでこんなことに付き合わされちまったんだ……」

コツコツと反響する足音に混じり、聞こえる文句の呟き。地下を探索する組は、日常会話など必要最低限の言葉しか発しない二人だけあって、心の奥の不満が爆発してしまう。

「ゴタゴタはもうたくさんなんだよ……それなのに、どうしてこんなトコにんだよ」

文句の調子もどんどんエスカレートし、今まで黙っていた真琴も

ストレスが溜まってしまふ。

「文句を言うのも無理はないし、自分達に対し不平があるのも分かる。無理矢理つき合わされ手伝えなんて、やりたくはないはず。だが、自分達のことを嫌になっても構わないが、病床に臥すマリーのために協力を頼む」

互いの顔を照らすように、真琴は懐中電灯を上へと向ける。薄暗い中に映るは、意地と意地をぶつけ合う二人。

「……はい」

圧力の違いに折れてしまふ雅毅。それを見計らい、真琴は血清の探索に戻る。

どれくらい歩いたのか。距離感覚を奪う暗く続く通路を進み、複雑な造りをしている地下道を歩く。

暗闇の先を見続ける真琴の後ろを付いていく雅毅。今に至っても、協力という善意の気持ちはまったく芽生えず、嫌々な表情を湛えたままである。

「いてっ！」

順調に進んでいた真琴が急に立ち止まり、よそ見をしていた雅毅は背中に顔をぶつけてしまふ。

「なんすか？」

「……様子がおかしい」

何やら女の勘なのか、第六感のようなもので危機感を覚える真琴。懐中電灯を四方八方に向け、身に覚えた予感を確かめる。

「おかしいって、どこが？」

真剣に周囲を観察する真琴の顔を覗き込もうとした瞬間、背後からビル解体のような破壊音が迫ってくる。

「マズイ！ 天井が崩れ始めている。走るんだ！」

いち早く背後の気配を察知し、真琴は危機感を投げ掛け走り出す。

「まっ、マジかよ！」

そこまで迫っている通路の崩壊に、雅毅も居ても立ってもいられず走り出す。

真琴が握り締めている懐中電灯は乱暴に上下に揺れ、前方の安全を確かめる役になうことなく前後往復を繰り返す。

二人の息遣いも崩れ落ちる天井の瓦礫にかき消され、後ろを付いてくる雅毅の気配が分からなくなる。

「逃げ！ 天井が崩れて押しつぶされてしまうぞ！」

「わっ、分かってますよ！」

何度かずれ落ちるメガネを直しつつ、懸命に真琴の背中で翻るマントを追う。

「遅いぞ！ 何をグズグズしている！」

一瞬だけ背後を振り返った真琴は、暗くて見にくい足元の出っ張りに足を引っ掛け転んでしまう。

「大丈夫ですか？」

「あつ、ああ、何でもない」

転倒したことさえ気にも止めない様子で立ち直ると、二人は併走して通路を駆け抜ける。

津波のように押し寄せる瓦礫に追われながら、二人は無我夢中で走り続けた。迫る崩落音に押され、二人は突き当りまで走り抜けた。

ドガン！

一気に天井が崩れた瞬間、真琴はとつさに隣を走る雅毅に抱きつき滑り込む。

同時に通路は塞がれ、閉じ込められてしまった。

屋敷内の上層部にて血清を探索しているリッド組。地下とは違い、完全に日光を遮蔽していないため木戸を閉めた窓から微かな明かりが射し込む。長年にわたって管理されてない室内は、積もりに積もった埃や蜘蛛の巣などがあり、さながらお化け屋敷の装いをしている。

「なんか、不気味ですね……」

板張りの床を平均台の上を歩くように、海涼は慎重に歩を進める。誰も使われることのない古い屋敷。生活観あるアンティークの調度

品があるというのに、全てが長年の埃が降り積もり灰色に染まっている。

「使われなくなっで、かれこれ八十年くらいか。それにしては、かなりしつかりとした造りをしている」

室内のありとあらゆるものを見て回り、目的の血清を探している。常に離れることはなく、必ず声の聞こえる範囲内にいる。

「マーくん、だいじよぶかなあ……」

最後まで離れ離れになることを嫌がっていた海涼。互いの様子が分からない今、どんな危険な目に遭おうとも助けに行けることはできず不安が蓄積していく。

「大丈夫だよ。真琴が付いてるんだ、何があろうと水海道君を守るさ」

「そうだいいんだけどな……」

蓄積した不安感を吐き出すように、海涼は深いため息を吐く。

すると突然、屋敷内を地震のような縦揺れが起こり、フローリングが軋みを上げる。

「なっ、何!」

「地震……なのか……」

その揺れはすぐに納まり、周囲には被害という被害は出ていない。

「大丈夫かい、どこもケガはない?」

海涼の安否が気になり、急いで駆け寄る。

「はい、どこもケガはないです」

不安要素から開放され、安堵のため息を吐く。

「今の、何だったんですか?」

「分からない。分からないが、とにかく真琴にも連絡を取ってみよう」

徐に携帯を取り出し、地下で探索している真琴達に連絡を取ろうとする。しかし、携帯の画面に表示されるアンテナはなく、圏外であることを表示している。

「おかしい、学園内だというのにここは圏内だ」

「あつ、私の携帯もそうです」

自分でも確かめるように携帯を取り出し、ユークリッドに見せる。

「何があつたというんだ。さっきの揺れと不通の携帯電話……」

携帯の画面を見つめたまま、予想外の事態に困惑し固まってしま
う。

『マークン……』

手に持った圏外と表示された携帯を握り締め、海涼は雅毅の安否
を気遣うのだった。

「クソッ、完全に塞がれてしまった」

地下通路の天井が崩れ、逃げ延びた先にあつた地下室に閉じ込め
られてしまった真琴と雅毅。唯一の道を絶たれてしまった今、完全
な密室の中にいる。

「ここで魔法を使つたとしても、出れるか保障はない……」

通路を塞いでいる瓦礫の前で立ち尽くし、真琴は憎き瓦礫の塊に
拳をぶつける。並みの人力では破壊されず、細かな埃がちりちりと
落ちるだけだった。

「……ここでじつとしているのも時間の無駄だ。この場所に血清が
あるかもしれない、探すぞ」

真琴の傍らで座っている雅毅を促し、最低限の仕事をこなそうと
する。

雅毅に懐中電灯を持たせ、真琴は閉じ込められてしまった室内の
探索を始める。注意深く見てみると、そこには会議室で使われるよ
うな大きな机や本棚、古めかしい分厚い多くの古書など、昔何かの
研究がなされていたことを匂わせる。

「何なんですか、ここ？」

多くの奇怪な器具が並ぶ棚を照らしつつ、雅毅は率直な疑問を口
にする。

「さあ……自分にも分からない。だが、昔ここで何かの実験が行わ
れていたようだ。キメラの開発か、魔物の召喚か、もしくは、使用

を禁止されている禁術の研究か……」

懐中電灯に照らされる分厚い本を横にずらし、予想を呟く。

「こつちを照らしてくれ」

多くの本が並ぶ本棚から、今度は横にある棚へと明かりを向ける。

「これは薬品棚だ。この中にあるかもしれない」

侘しい明かりの中、容器も大きさも違う薬瓶を取っては移動させるということを繰り返し、ある一本を手にして動きが止まる。

「これだ！ 血清に間違いはない！」

透明な小瓶に入った液体を左右に振り、日常見せない喜びを表に出した真琴が振り返る。

「あつたんですか、血清？」

容器の中身を確認するように、雅毅は懐中電灯を当てながら自らも見る。

「ああこれだ。これがあれば、マリーの侵された毒を解毒できる」

血清を見つけ出したことを報告するため、瓶を雅毅に持たせ携帯でユークリッドを呼び出そうとする。しかし、耳を当てて聞こえてくるは会話中のような音。

「おかしい、繋がらない」

何度も短縮ダイヤルをするものの、一向に繋がる気配がない。何が原因なのか確かめようと画面を見ると、普段三本立っているアンテナは消え圏外となっている。

「電話が繋がらないんですか？ ここ、山奥のわけないですよね」

「……携帯見てみる」

携帯を取り出すため、雅毅は懐中電灯を真琴に預けポケットの中に手を突っ込む。

「……ダメだ、オレのも圏外です」

「この屋敷、何かおかしいぞ……」

互いの携帯画面に映る圏外の文字に、血清を見つけ出した喜びはどこかへ消えてしまった。

この異常事態に危機感を察知したユークリッドは海涼と共に屋敷の外へ出、再度携帯で連絡を試みようとする。しかし、ここは電波を遮断する建物内のように圏外のみである。

「だめだ、どうしても携帯が繋がらない」

突然圏外になってしまった原因が分からないまま、ユークリッドは担任を呼びに行くといってしまった海涼を待っていた。これまでに身につけた魔術の知識を総動員し、こんな事象が今までにあったかを思い起こす。類似していることまで当てはめようとするが、まったくもって適合しない。

「せつ、先輩、先生連れて来ましたあ！」

雑木林の中を走ってくる女子生徒とジャージ姿の人影。足元の悪さに苦戦してるが、緊急を要することにそんな苦は消えてしまう。

「ユークリッド！ これはどういうことなんだ！」

連れて来られて早々、屋敷前で立ち尽くしているユークリッドに食ってかかる。

「鹿嶋先生……」

「あゝ柴原から事情は聞いた。授業をサボったことを叱りたいところだが、事態が事態だ、どうにかして二人を助け出そう」

眉間に皺を寄せたまま、典佳は教師として注意することをぐつと堪える。

「先生、あの、この場所って不思議なんです。お屋敷の近くにいますと、携帯が圏外になるんですよ」

上がってしまった息を整え、落ち着こうと胸に手を置く。

「この屋敷は何十年もの間封印が施され、誰も使われることはなかった。使わない屋敷を放置していることに疑問を感じたんだが、この屋敷の地下室を陣馬浩二郎氏が使っていたらしい。まあ、あたしがここに赴任してきたときからの噂に過ぎないが……」

この古い屋敷がどんな状況に置かれていたのかを聞き、ユークリッドはこれまでに芽吹いた芽が一気に開花したように思えた。ずつと探してきたレポートを記した人物が使用していた地下室。これは、

何も関係がないなんてあり得ない。

『この中に、探し続けていたレポートがあるに違いない』

確信のようなものを得たユークリッドは、暗く沈んでいた心に温かな一条の光が射し込むように思えた。

「このお屋敷には、不思議な力があるんですね？」

「ああ、陣馬氏は稀代の魔導士。使っていた屋敷に何らかの魔術を施していてもおかしくない」

海涼の率直な感想に、教師としての典佳は生徒の理解度に嬉しくなってしまう。しかし、

心の内では魔導士としての典佳がある疑問にぶち当たる。

『何十年もの間解けなかった封印が今になって、どうして解けてしまったんだ？』

教師が思い浮かんでしまった疑問を、今の状況で答えられるものはいなかった。

どれくらいの時間をこの中で過ごしたのだろう。日の光も射し込まない地下室に閉じ込められ、闇の中を照らすのは唯一の持ち込んだ懐中電灯のみ。文明の利器でしか時の経過を知る術のない現代人には、かけがえのない自然から教わることができない。

「はあ……二時過ぎちゃいました。いい加減、ここから出たいっすよ」

壁にもたれかかり携帯の画面を見下ろし、疲れの色が見え始める雅毅。地下に入ってから約四時間が経過し、目的のものを発見したものの唯一の通路が塞がれ、毒に苦しむマリーを救い出すことができない。

「先輩の魔術が何かで、ここから脱出できないんですか？」

「残念だが、ここから脱出できるような魔術はない。無理に天井を打ち抜こうとしても、瓦礫に埋もれるのが関の山だ」

暗黒に包まれた天井を見上げる真琴。

「あつ、脚、ケガしてますよ」

足元に置いた点けっぱなしの懐中電灯に、真琴の左脚の膝が擦りむけ血が滲んでいた。

「うん？ ああ、こんなかすり傷、ケガのうちに入らない」

自分でも気づかないうちに負っていた傷を見下ろし、一度膝を曲げてみせる。

「……よせ、そんなのしなくてもいい」

何を思ったのか、何でもかんでも面倒くさく捉えている雅毅はポケットに入ったハンカチを膝に巻きつける。

「いいんすよ、こんな時ぐらいしか使わないですし。姉貴が勝手に持たせたモンですから、使わないと後で怒られるんです」

しっかりと止血するように、ケガを負った部分を覆い縛る。

「柄にもないことを……」

ちよつとした照れ隠しをしながら、真琴は顔を背ける。

「あの、ちよつと気になってたんですけど、どうしてあのアメリカ人の先輩と組んでるんですか？ 先輩の力があれば一人でもレポートを探し出せんじゃないですか？」

ハンカチを縛り終え、再び壁におっ掛かって座る。

「簡単なことだ。一人で探すよりも複数で探した方が見つかりやすい。仲間として動いてるのは、一時的なものだ」

冷静に且つ能率的な構想に、やはり上級生はあなどれない存在感あるものだと思ってしまう。

「先輩の家柄はどんな感じなんですか？ オレの家は平凡なごく一般的な家庭で、魔法とは全く縁がないんですけど、先輩の家はやっぱり魔導士とか関係あるんですか？」

ちよつと遠慮気味に、雅毅は真顔で遠くを見据える真琴に訊く。

「自分の家系は、先祖代々、西洋魔術士の家系で成り立ち、祖父も祖母も、親戚一同、魔術を扱うことができる。近年、その血は薄まる一途を辿り、自分の代になり術者に適合するものは自分だけになった。この学園の出身である当主に、この学園でトップの成績を修め、久無家を盛り立てるように言われ、今に至っている。魔法なん

ぞに興味のないお前には、到底理解できない世界だろう」

綺麗に整った顔を覆い隠す前髪が揺れ、妖艶で大和撫子の代表として扱われそうな美しさを放つ真琴。そんな彼女と雅毅は会話をしている。

「家柄とか、当主とか、オレには無縁な世界みたいですね。でも、そんなんで、息苦しくないですか？」

思いも寄らない雅毅の一言に、真琴は表情が強張ってしまう。

「息苦しい……？」

「なんか、先輩の話し聞いてると、誰かのレールに乗せられ、思い通りにさせられてるみたいなんですよね。オレみたいな凡人が言うべきじゃないと思いますけど、もっと気楽に考えてもいいんじゃないですか？」

不意に浮かんできた当主の顔。

今まで虎の子として育てられ、周囲の人間はとつても優しく、どんな悪いことをしても決して叱ることはなかった。だが、あの時、一番に可愛がってくれた祖父の険しい顔。自分の両肩に、家柄という単なるエゴを満たすためだけに乗せた重責。久無家次期当主としての人格と能力を身につけさせるため、血の出る思いで刻み付けられた能力。力が全てであり、未来永劫その名を知らしめるだけに存在させられているという事実。それでも構わないと思ってた。だって、他人から必要とされているから。

「……閉鎖的な環境の中に押し込められ過ぎたようだな。自分の意思を無視し、人の考え方を押し付けられ、自分を見失ってた」

必死になって誰よりも強く賢くなるため、自分を押さえつけ人を裏切ってまで高みを目指そうとしていた自分。そんな生き方に誰が賛同するだろうか。

「いつ、一年の分際で、分かった口を言うんじゃない……」

何の知識も能力もない年下の男子に気づかされ、真琴は今までに経験したことがないくらいの恥ずかしさを味わっていた。

「そつ、それはそうと、いつも連れ歩いている柴原とはどんな関係

なんだ？」

恥ずかしさを紛らわせようと、改めて気丈に振る舞い訊く。

「オレはアイツを連れてなんてないっスよ。ただ、アイツが魔法のコツを教えるだの、オレみたいになりたいだの、そんな理由だけでストーカーみたいに付いてくるだけです」

ずっと続く迷惑爆弾を背負わされている雅毅は、ここぞとばかりに鬱憤を晴らす。

「お前も、なんだかんだ言って、苦勞を背負い込んでるんだな……」
互いに心の内をさらけ出した今、自分が間違っただ道に進もうとしていたことに気づいたのだった。

真琴達と連絡が取れなくなってから数時間、安否の不確かな状況で緊張と焦りはピークに達してしまった。

「先生……マークン達を助けられないんですか？」

最近になく雅毅と離れ離れになった経験のない海涼は、哀願の気持ちを含めながら典佳にすがり付く。

「……この状況じゃどうすることもできない。外見は頑丈そうに見えても、建物内の老朽化が激しい。救い出すどころか逆に被害が拡大してしまう」

自分の教え子がどんな状況なのか分からないだけあって、長時間閉じ込められているにも関わらず救い出す算段が浮かばない。

「……僕が助け出します！」

散々手を拱いていたユークリッドが、意を決し屋敷内へと進んでいく。

「止める、ユークリッド！ お前が行ったところでなんとかなる状況じゃないんだ」

強行に及ぼうとする生徒の腕を掴み、典佳は必死に思い止めようとする。

「離してください。真琴が、仲間が救いを求めているんです、一刻を争うんですよ！」

掴んでいる手から逃れようと、ユークリッドは力一杯腕を引っ張る。

「頭を冷やせ！ 衝撃を与えただけで、この屋敷が崩れ落ちるかもしれないんだぞ」

「一か八か、試してみますよ。仲間の命を救うためなら、何だってやってみます！」

思いっきり自分の腕を引き抜き、助けを待つ真琴達のもとへ向かう。

『……きつと、助け出してください。先輩……お願いします』

勇敢に屋敷内に戻っていくユークリッドの後姿を見据えながら、海涼は胸の前で手を重ね祈るのだった。

携帯の画面に映る時刻はとうとう四時にさしかかろうとしている。こんな事態を予測していなかったため、空腹を満たす食料も水もなく、疲労感も相まって力が出ない。

「……はあ、いつまで閉じ込められ続けられるんだろ」

無駄な体力消費を抑えるため、二人は一時間前から動くとは思わなくなった。いつ助け出されるかわからない状況の中で、どれだけの持久戦に耐えられる体力を残せるかで助かる確率は上昇する。「心配するな。学園には優秀な教師が何名もいるんだ、じきに助けが来る」

じんわりと伝導してくる冷たさに耐えるため、真琴は自らのマントを外し雅毅と一緒に尻に敷いている。

「そうだと、いいんですけどね……」

何の根拠もない励ましの言葉に、もう話を続ける気力がない。

ずっと点けっぱなしだった懐中電灯も光量を失い始め、どんどん周囲が暗くなっていく。

「電気が……消える……」

煌々と照らし続けてくれた豆電球が光を失い、とうとう地下室は闇に閉ざされてしまった。

「だつ、大丈夫ですよ、二人共携帯を持つてゐるんです、微量ながら明かりはあります」

自らの携帯の画面を開き、ほのかに明るく映る自分の顔を見せる。
「ああ、そうだな……」

いつ救われるのかという不安感に駆られながら、真琴は雅毅に勇気付けられる。

しばらくささやかな光の中にと、何か奇妙な音が聞こえ始める。

「何の音だ？」

一時的に光を放つ携帯の画面を左右に振り、視覚的な情報をもつて理解しようとする。

「どこから聞こえるんだ？」

座ったままの真琴は思わず立ち上がり、音の聞こえる天井付近を見上げる。刹那、

ビキ ビキ ビキ ドゴーン

突然思いも寄らぬ場所から質量の大きい物体が落下し、凄まじい轟音と共に土煙が舞い上がる。

「おーい、真琴っ！ 水海道君っ！ いるなら返事してくれっ！」

ぽつかりと空いた光の射し込む天井の穴から聞こえてくる聞き覚えのある声。その声に導かれるように、光の柱の側まで近づくと二人

「そっ、その声はリッドか？」

いきなりの明るさに瞳孔が対応できず、眩しさに目を細めながら天井を見上げる。

「二人共ケガはないか？」

ようやく明かりに目が慣れ、穴を覗き込むユークリッド顔が目に入る。

「大丈夫だ、大したケガは負ってない」

「良かった。二人とも、そこから出られるかい？」

「ああ、自分が水海道を引っ張っていく。穴から離れてくれ」

覗きこんでいたユークリッドが引っ込むのを確認し、真琴は分厚

く切り出された岩壁の上に立つ。

「さっ、ここから出よう」

今までに見たことのない優しげな笑みを湛え、見上げている雅毅に手を差し伸べる。

「はっ、はい」

あまりのギャップの違いに一瞬戸惑いを見せるが、差し出した手を掴み二人は数時間振りに地上へと脱出したのだった。

窓から射し込む陽射しはオレンジ色に染まっている。薄手のカーテンからでも分かる色に室内は彩られ、一日の終わりを告げようとしていた。

地下室で発見された血清は急いでマリーシアに投与され、結果が出るまでに数分を要した。ずっと体温低下が著しかったマリーシアの容体は快方に向かい、顔面蒼白だった顔も血の巡りが良くなっていた。

「あっ……みつ、みんな……」

低体温に苦しみ意識を失っていたマリーシアの意識が戻り、ベッドの左右に控える皆の顔を順に見る。

「気が付いたかマリー、良かった……」

人間本来の温かさを取り戻したマリーシアの手を両手で握り、ユークリッドは元気になった様を見据える。

「うわーい！ 先輩さん元気になったー！」

元気になるようずっと見守っていた海涼も自分のことのように喜び、医務室内で騒ぎ立てる。

「マリー、元気になって、ホント、良かったな……」

この件の最大の功労者である真琴も、今まで誰にも見せたことのない涙を浮かべた顔を見せる。

「みつ、皆さんが、まっ、マリーを助けてくれたんですね……ホント、ホントにありがとうございますっ！」

病み上がりなのにも関わらず、必死な思いで感謝の言葉を紡ぐ。

か細く弱々しく感じるが、みんなを安心感に包む何よりも心地いい声だった。

「気にするんじゃないよ。だって、僕達は仲間じゃないか。仲間なら、苦しみ困っている仲間を救おうとするのは当然のことだよ」

人のぬくもりの詰まったマリーシアの指先に軽くキスをし、そつとベッドに戻す。

「仲間……そうですね、マリー達は仲間ですね……」

控えめな笑みを浮かべ、自分を侵された毒から救ってくれた皆に感謝の意を込めて見せる。

「ありがとう、君達のおかげでマリーを救うことができた。何てお礼を言えばいいか」

マリーシアの様子を遠くで見ている二人に対し、ユークリッドは会釈をして感謝を伝える。

「いえ、いいんですよ。人を助けるのに、深い理由なんていらないんです。ねえ、マークン」

ずっと黙りこくっている雅毅に話をふる海涼。いきなりのことに対応できず、ビクツとしてしまう。

「うん？ あっ、ああ、そうだな」

「んもう、話し聞いてないんだからあ」

笑みのこぼれるやり取りを見ていたユークリッドが、あることを思い出す。

「真琴とマリーは聞いてないと思うんだが、鹿嶋先生が言ってたんだ。真琴達が閉じ込められていた地下室、あの場所は昔、陣馬浩二郎が研究室として使用していたと」

注目すべき人物の名を耳にし、真琴も病み上がりのマリーシアでさえ表情が一瞬で変わる。

「ほっ、本当なのか?!」

「ああ、もしかしたら、あの場所に目的のものがあるかもしれない」
ようやく探し求めていたものに近づけ、リッド達は確信を握るのだった。

6章

六章 気づかない何か

何ともスリリングで波乱に満ちた一日だったことか。あのお騒がせ天然娘に付き合わされ、ドイツ生まれの先輩の命を救うため血清を探すことに。

そこからが危機一髪、九死に一生を得るような事件へと発展した。地下室に命辛々逃げ延び、通路を断たれてしまい閉じ込められてしまった。幸いなことに、その地下室は何らかの研究室だったようで、そこに探し求めていた血清があり先輩の命は救われた。結構危険な目に遭ったのにも関わらず、目立ったケガがなかった雅毅はその後何事もなく帰宅した。一日学校をすっぱかしてしまったことを忘れるぐらい疲れきったこともあり、夕食もそこそこに風呂に入り速攻でベッドにもぐるとそのまま眠ってしまった。

まどろむことなく瞬時に眠った雅毅。普段、夢を見たという自覚はあるもののその内容まで覚えているということはない。しかし、今回現れた夢は、いままでの次元とは違うものであった。

そこは見慣れたような光景だった。

何も物体も液体もない虚無の世界。唯一識別できるのは色覚の黒だけ。常に縛り付ける重力もなく、フワフワと浮いたような状態で衣服を纏わない雅毅は空間の中で彷徨っていた。

何も無い暗黒の世界を彷徨っていると、突然視界を奪う強烈な光が襲う。温かくも冷たい光に包まれ、しばらく目を開けることができなかった。

『……たす……けて……』

誰もいないはずの空間に聞こえる幼い声。

純粹で無垢で、何の穢れもない声に一瞬にして心が解れ目を開ける

と、光に満ち溢れる小柄な塊が佇んでいた。

『君は……』

声を発したのはその光の塊なのかを確かめるように、手を伸ばそうとする。

『助けて……お願い……ここから……救い出して……』

助けを求める声は徐々に嗚咽へと変わり、必死さと苦悩をありありと伝えてくる。

『何で、どうして泣いてるの？』

『……お願い……』

雅毅の問いは聞き入れられることなく、声を発し続ける光の塊はなおも助けを求める。

『誰なの……君は……』

その理由だけでも突き止めよと再び手を伸ばす。触れたと思った瞬間、光の集合体であった塊は激しい光線を放ち再び視界を光が包む。暗黒の世界をも凌駕する光の量に両目が麻痺し、瞼が機能を果たすことができない。

「うあつ！」

夢の中そのままに眩しさと目が覚めてしまい、ドッキリに驚いたような奇声を上げる。

激しい動悸と首筋を伝うじつとりとした感覚を覚え、雅毅は枕元にあるデジタル時計の時刻を確かめる。

「につ、二時過ぎか……」

かなり目覚めのいい視界で時刻を捉えたと、落ち着きを取り戻すようにベッドの上に大の字になる。

「……はあ、夢見て飛び起きるなんて初めてだな」

小さな電球しか照らしていない天井を見上げ、思い出したように呟く。激しかった呼吸も落ち着き、改めて夢の内容を思い浮かべる。

「どうしてこんなに鮮明に覚えてるんだ？ 今までにこんなこと、ないよな……」

ずっと天井の一点を見据え、雅毅は急激な疲労感に襲われ気を失ったかのように再び眠りに落ちていった。

一クラス三十人程度の中で、一人の生徒が一日休んだとしてどのくらいの生徒が気に止めるだろうか。クラスの人気者、あるいは古い言い方の番長なら無言でも放つオーラでクラスの全員が気づくはずだ。彼らとは対照的に友達も皆無に等しい生徒なら、存在感のなさに気づかれることはないだろう。唯一気づくとしたら、教科ごとの教師ぐらいか。

この日も、クラスは活気に溢れうるさいくらいに騒々しい朝のSHRを迎える。何着持っているのか定かでないジャージ姿の担任が教卓の前に立ち、出席簿とボールペンを手に点呼をしていく。

「朝西……柴原……平島……」

テンションは様々だが、生徒達は自分の名を呼ばれ返事をする。

「えーっと……水海道……水海道雅毅」

繰り返し雅毅の名を呼び、来ているかを確認する。それでもないということ、典佳は雅毅の席を見る。

「うん？ 来てないのか。遅刻するなんてありえないし、欠席するなら欠席するって電話の一本ぐらいしろよな、ったく」

普段はいる一生徒の不在に不信感を抱きつつ、典佳は点呼という勤めを続ける。

『あれ、マークくん、今日休みなのかな？』

斜め前方にいるはずの雅毅を探すが、典佳の点呼に間違いなく、そこは空席となっていた。

この日は、授業中に厚かましく乱入してくる闖入者も、爆発を起こすような実験もなく平穩に授業を消化してく。午前最後の授業前の小休憩の時間、いつも聞き相手になってくれる雅毅のいない海涼は、机に頬杖を突き心配を表すようにため息を吐く。

「どうしたの柴原さん、いつもと違って元気がないね」

海涼と長い付き合いの銀縁メガネの少女、礼央奈は落ち込むような仕草を目にして声を掛ける。

「うん……マークくん、どうして休んだのかなって心配しちゃってね」
頼杖の体勢のまま、海涼は傍らで立っている礼央奈の顔を見上げる。

「普段休むなんてことないからね。何か理由があって休んだと思うけど……」

「ねえ、マークくん風邪を引いちゃったのかなあ？ それとも、来る途中で交通事故に遭って大ケガしちゃったのかな？ それとも、極悪非道な魔王に連れ去られて、体に乗っ取ろうと怪しい魔法を掛けられちゃってるのかなあ……」

どんどんリアリーのない空想にのめり込んでいく海涼。単なる妄想なのにも関わらず、感情的になってしまい両目を潤ませる。

「どんどん、非科学的になっていつてる……大丈夫だよ、きつと風邪を引いてしまって休んでいるだけだよ」

これも自分の役目とばかり、現実から逃避しがちの海涼に教える。
「風邪で休んでるなら、やっぱり、お見舞いに行かなくちゃでしょ？」

頼杖から頬を離し、海涼は少しトーンアップする。

「でも、水海道君の住所、分かりませんよね？ 誰か、知り合いに聞かないと……」

「あつ！ 平島くん！」

ちょうど海涼の席の側を通りがかる翔馬を呼び止め、雅毅についてのことを聞き出そうとする。

「あい？ 何の用？」

突然に呼び止められ、行進を途中で止めたような体勢になる。

「マークくん、うん、水海道君と友達だよ、ね平島くん？」

「おお、アイツとは物心つく前からのダチだぜ。そんな俺に何の用なの、海涼ちゃん？」

「今日、どうして休んだのか聞いてない？」

哀願にも近い真っ直ぐな潤んだ瞳で海涼は見上げる。

「うーん、俺もさつきメールしたんだけど、中々返ってこないんだよね。小・中と休んだことねえんじゃねえのってくらい休んだことがないのに、今日は音信不通なんだよ」

やはり、普段は休まない雅毅が休むのにはなにか理由があると判断し、海涼は感情むき出しに翔馬に詰め寄る。

「ねえ、ねえねえねえ！ マークン、いや、水海道君の住所教えて！ どーしても、なんとしてでもお見舞いに行きたいの！ お願い、お願いします！」

自分の願いを聞き入れてもらうため、生徒がいる教室のなかだといつのに、翔馬につかみ掛かり必死に体を揺する。

「そつ、そりゃあー別に問題ないけど……教えても、目的地まで辿り着けるの？」

つかんでいた手を離すと、意気込みを見せ付けるように右手を握りこぶしにする。

「だいじよぶ！ 互いに繋がる気持ちがあれば、無人島でも巡り会えるよ！」

妙にテンションの高い海涼に完敗し、翔馬は渡されたメモ用紙に雅毅の住所を書く。

「よーしっ！ 放課後、マークン家にいくぞおっ！」

フルスロットルに入った海涼は、作った拳を人目もはばからず振り上げるのだった。

雅毅がどんな理由で学校を休んだのか、その理由を知りたいことで頭が一杯になった海涼は、午後の授業などただ聞いているだけの状態で理解することはなかった。一日の授業が終了すると、一目散に礼央奈を連れ立って、制服や荷物を持ったまま出歩かない学園外へと出た。

寮住まいの二人にとって、学園外の世界は海外に等しく全てが珍しく感覚を惑わせてしまう。翔馬からもらった水海道家の住所は簡

素なもので、どこでどちらに曲がるかぐらいしか記されおらず、順路はさらに迷いを増す。互いに繋がるものがあれば巡り合えると断言した海涼だが、相思相愛でないのか、それともそんなのは迷信なのか定かでないが、スムーズに雅毅の家までは行けない。

「うえーん、マークの家はどこなのぉー」

学園外を歩くマントを翻す女子生徒二人。道順に四苦八苦し、夕方方の住宅地にて地図を頼りに彷徨っていた。

「やっぱり、平島君に案内を頼めばよかったのかもしれないね」

翔馬に描いてもらった地図と建物を睨めっこをして、海涼は初めて訪れている住宅地の中を歩く。学校指定の学生カバンとクマさんの傘を片手に、もう片方の手に地図という格好で雅毅の家を探している。早く会いたいという気持ちが焦りを招き、嫌でも分からない道が余計に惑わす。

「どこかでマークくんが立って待っていてくれないかなあ……」

「そつ、それは無理だと思うよ。向こうは来るなんて知らないんだから……」

道を案内することできない礼央奈も多少なりと迷っている責任を感じ、一途に思っている海涼の助けになってあげたいと思っていた。

「あつ、あそこ、電話ボックスがある。あそこを左に曲がれば、マークくんの家だ！」

ようやく最後のヒントを見つけ出した海涼は、駆け足に電話ボックスを左折する。その後を慌てた様子で礼央奈も追いかける。

先に曲がった海涼を追いかけると、彼女はある一軒の家の前で立ち止まっていた。

「柴原さん、見つけたの？」

「うっ、うん……ここ、みたい……」

門前に置かれた表札を見ると、間違いなくあまり馴染みのない『水海道』と書かれている。

「ああードキドキするう……」

用済みとなった地図を描いたメモをポケットにしまい、人指し指を立てインターホンに手を掛ける。

ピンポン

独特の音が玄関の外にいる海涼達にも聞こえ、しばらくして家中からゆつくりとした足音が聞こえてくる。

「はあ、やっと会えるんだね……」

高鳴る鼓動を抑えながら、私服で登場するであろう雅毅を待ちわびる。

玄関先の三和土で何かを履いている物音が聞こえ、いよいよ対面の時が来る。

「……はい？」

内側からドアを開けた人物、その人は見覚えがあるのにどこか違和感があった。

「あつ、あの……雅毅……くん……は……いま……すか？」

絶句してしまう海涼に対し、出迎えた人は見慣れない制服の少女達を訝しげに眺める。

「あんた達、雅毅に何の用？」

ジーパンに七分丈のシャツで現れた人物は、雰囲気的にやる気のなさを醸し出し、細長いメガネを掛け、姿を見ると雅毅とそっくりなのである。

「あの……元気がどうか、えっと、お見舞いです。お見舞いに来ました」

背丈も変わらないホントに瓜二つの姿に驚きを隠せないまま、海涼は今思いついた訪れた目的を口にする。

「あつ、そうなの。まあ、上げれば」

無愛想さも姉譲りといった感じで、雅毅の姉らしき人物は二人を招き入れた。

「雅毅の部屋は、階段を上がった左の部屋だから」

海涼達を入れた姉らしき人物は、あっけらかんとした態度で雅毅

の居場所を教えると家の奥へと行ってしまった。階段前で立ち止まった海涼と礼央奈は、それぞれ階段の上や家の奥を見ていた。

「あの人、マークんに似てるね」

「似てるどころか、双子と言っても信じますね」

いきなり現れた雅毅とそっくりな人物に驚く二人。親戚はよく似るといわれるが、背丈も格好も似ているとなると狐にでもつままれたような違和感がある。

あまり横幅のない階段を礼央奈を先頭にして上る海涼。高校生になつて、それも男子の部屋に入ろうとしている海涼の心臓は心拍数を増す。足元を確かめるようにゆっくりと上り、左右に部屋のある踊り場で止まる。

「いよいよ、マークんにご対面だね」

「ちゃんとお見舞いしましょうね」

小声で交わすと、冷静を保つように一呼吸を置いてドアをノックする。

『あつ、はい、どうぞ……』

弱々しくはあるが確かに雅毅の声が室内から聞こえる。ちゃんと許可を得て、海涼はドアノブに手を掛ける。

「……あれ、姉貴？」

「マークん、体の調子、だいじょぶ？」

見当の中にいた違う人物の声を疑問に思いつつ、ベッドから出た雅毅は枕元に置いていたメガネを掛ける。

「来たのかよお前達。っていうか、誰からこの住所を聞いた？」

思いも付かない人物の訪問に驚き、掛けていた布団を一気に剥がす。

「えっと、マークんの友達の平島君から」

「ったく、アイツか。余計なことしやがって……」

友達のありがた迷惑な行為に頭を抱える雅毅。パジャマとして使っているのか、ベッドから起きた雅毅は上下同じ色のトレーナーを着ていて、まさにラフな格好をしている。

「平島君から聞いたよ。小・中学校と全然休んだことがない雅毅が、どうして休んだんだろうって」

雅毅の許可なしに少しだけ室内に入り、礼央奈も雅毅の姿が見えるまで距離を詰める。

「……まあ、座れよ。せつかく来たんだし」

ベッドの上で胡坐をしながら、雅毅は立ちっぱなしの二人をカーペットの敷いた床に座らせる。

「あの……お身体は大丈夫なんですか？」

丸くカットされた毛足の短いカーペットに膝を折って座る二人。

海涼は手放せないクマさんの傘は床に置くものの、手を離そうとはしない。

「まあ、今ンところはだいじょぶだ。昼間はダルくて起きれなかったけどな」

「そうなんだ……」

思ってた以上に重体でない雅毅の姿に安心感が募り、ガス抜きのような安堵のため息がこぼれる。

「おーい、ジューズ持ってきてやったぞ」

雅毅の様子を気遣っていた時、薄めの丸いお盆に、オレンジジュースの入ったコップを三つ載せた雅毅そっくりな女の人が来る。

「ああ、あんがと」

軽く礼を言うと、女の方は海涼と礼央奈にそれぞれコップを持たせ最後の一つを雅毅に持たせる。

「よお、どっちなんだ？ どっちが本命なんだ？」

コップを持たせると、何やら小声で耳打ちをする。

「はあ？ いきなり何言ってるんだよ」

「女の子が二人も見舞いに来るなんて、友達以上の感情がなきゃねえだろ」

こそこそと小声で品定めのような会話をし、楽しそうに会話をしている海涼達をじろじろ窺う。

「お前の好みは、まあまああってトコか。早くガールフレンドゲット

して、短い学園生活をエンジョイしろよ」

病人にするにはきつめな強さで雅毅の頭をゴシゴシ擦りつけ、にんまりとしたり顔を見せつける。

「じゃっ、ごゆっくり。手厚く看病してあげな。若いモンは若い同士、お邪魔な姉は引っ込みまゝす」

何を期待しているのか、コップを全て渡し終えた姉は、意味深い視線を海涼達に向けながら出入り口の前に立つ。

「ったく、用が済んだんならとっとと出て行けよ！」

姉の魂胆が見え見えだった雅毅は、煩わしい姉を追い出す。

「へいへい」

雅毅と同じようなメガネを掛けた姉は位置を直すと、つまらなそうな表情で部屋を出て行く。

「あの人……」

「……ああ、オレの姉貴」

嫌な気分を振り払おうと、持たされたジュースを半分近くまで一気に飲み乱暴に枕元の台に置く。

「とつても、似てますね」

「そうかな？」

一陣の風が吹きぬけていったように、三人は姉が出て行った戸口を見ていた。

「そっ、それにしても、マーくんのお部屋って空が多いね」

気を取り直すようにジュースを一口啜ると、部屋の至る所に貼ってある空の写真に気づく海涼。

「うん？ まあ、好きって言うか、心が落ち着くって言うか、空って同じように見えて意外と違うトコがあるのが面白いんだ」

部屋中いたるところに貼られた空の写真。雅毅の言うように、雲の形、大きさ、多種多様な人間の顔が一人ひとり違うように雲の姿も違う。

「あんまりじっくり見たことはないですけど、そう思うと確かに、季節によっても天候によっても空の表情は変わりますね」

雅毅の言動に動かされ、今まであまり興味など持つことのなかった二人も空の写真を観賞する。

「でも、クマさんとかアイスクリームとか、形のはっきりした雲はないんだね」

一様に写真を見終わった海涼は、何とも幼稚な感想を呟く。

「そんな雲あるかよ」

飲みかけのジュースを飲みきり、雅毅は海涼達と向かい合うようにベッドの縁に座る。

「えゝ無いのお？」

「あつたら、世界がひっくり返る」

付き合いきれないとばかりに、雅毅は頭を振る。

「そうそう。今日はどうして学校を休んだの？ 症状が軽いのは置いていても、休んだ原因は何？」

両手でコップを握りながら、ベッドに座っている雅毅に訊く。

「よくわかんねえんだけど、朝、すっげえ体がだるくて、ベッドから起き上がることもできなかったんだ。風邪でもねえし、バカみたいに働いたわけでもねえのに、突然体が動かなくなったんだ」

身に降りかかったことが嘘だったように、今の体はなんともない。あの時の身に起きた出来事は何だったのか？ 強烈な重力に押さえつけられたような、体中を拘束着で締め付けられたような感覚。霊体験とは異なる、もっと違う精神的な負荷を与える不思議なものだった。

『まさか……夜中に見ていた夢と関係があるのか……』

不思議体験など半信半疑なものばかりだが、雅毅の身に起きたこととは不思議系繋がりでそれぐらいいしかない。

「突然の倦怠感ですか……何とも不思議な症状ですね」

「ねえ、礼央奈ちゃん。ケンタイカンって何なの？ すっごい重い病気なの？ マークくん死んじゃったりするの？！」

雅毅に関すること、何か難し気な言葉を耳にして海涼の恐怖感は煽られてしまう。

「簡単に殺すなよっ！」

「けっ、倦怠感というのは、簡単に言ってしまうと体がだるくなることです」

海涼の天然さ加減には付き合いきれないとしても言いたげに、雅毅はがつくり頭を落とす。

「へえ、だとすると、貧血みたいな感じかなあ？」

「近いような……遠いような……」

どのように説明すれば理解してもらえるのだろうか、礼央奈は難しそうに悩む。

「でも、よかった。もっと重い病気かと思ってたけど、こうやってお話ができたから安心した。明日、学校に来れるよね？」

「ああ、何とか行くよ」

雅毅の元気とまではいかないものの、その姿と話ができた海涼はそれだけでも満足感に浸れた。

「良かった。あっ、もうすぐ寮の夕食の時間だから帰るね。お姉さんに、ジューズご馳走様でしたって伝えてね」

「今日はお邪魔しました」

押し迫った時間を気にし、二人は荷物を手に立ち上がる。

「じゃっ、また学校で会おうね」

荷物を持たない左手を振る海涼。礼儀正しくカバンを両手に持ち深々と頭を下げた礼央奈。違った別れ方をすると、二人は礼央奈を先頭に部屋を後にする。海涼は別れを惜しむように満面の笑みを浮かべながら繰り返し手を振る。雅毅も釣られるように片手を挙げて見せていた。

「じゃあな。道に迷うなよ」

「うん！」

部屋を出る最後のタイミングで頷いてみせる。そしてドアが閉じられると、それまで明るい雰囲気包まれていた室内を寂しげな空気が流れた。

「……この部屋って、こんなに静かだったか……」

両膝の上に両肘を寄せ、両手を頬に置いた雅毅はしみじみと部屋の中を眺めるのだった。

玄関先の三和土で靴を履く二人に包丁の心地いい音が届く。時間の経過と同時に空腹感が募る。

「お邪魔しましたあゝ」

きつちりと靴を履いた二人は水海道家を出る。そして、玄関を出てオレンジ色から紫に染まる空を眺め、礼央奈はあることを思い出す。

「あの……帰り道って覚えてます？」

心なしか不安で埋め尽くされた礼央奈は、おずおずと隣にいる海涼に尋ねる。

「……うん」

半ば誇らしげに、にこやかな笑みを浮かべつつ海涼は首を左右に振るのだった。

丑三つ時ぐらいの時刻のこと、完全に眠りについた学園内の図書室に灯る一つの明かり。

人気のない不気味さを醸し出す空間にも関わらず、一人の女性がある分厚い書籍を読みふけていた。

「……なるほど、過去にこのようなことがあったのか。そうならば、あの子にも前兆が……」

注目すべき点を見つけ出したアンリは、学園内で起こっている事実と直面するのだった。

温かな空気に包まれ、桜の咲いていた季節はもう過去のこと。街は濃い緑で覆い尽くされ、キラキラ眩しい陽光があちこちに恵みをもたらしている。世間一般で流行病のような五月病も半ばに差し掛かり、挫けそうな心を押し留めた新人生は我慢の限りを尽くしながら毎日を過ごす。

「あゝダルすぎ……」

何とか学校にカムバックを果たそうと懸命に歩みを続ける雅毅。凜々しく制服を整えているにも関わらず、朝から襲う急激なダルさに心も体も弛み、体全体に及んで力が入らない。

『何なんだよこのダルさ。頭も痛てえし、胸も苦しいし、どうなっちまったんだオレの体』

……」

お喋りしながら登校している生徒にも追い越され、近いと思っていた学校がこんなにも遠いと感じたのはこれが初めてだった。

「はあ……はあ……休んでばっかいらねえし、早退してもいいから、学校に来たっていう事実だけあれば出席にはなるもんな」

筋肉痛よりもきつく重い足取りのまま、活気に溢れる校門を抜け生徒玄関へと向かう。どんどん構内へ入っていく生徒の中、一人見慣れた生徒が玄関付近の流れの中に佇んでいた。長い黒髪を垂らし俯く姿は、現代のチャラチャラした女子高生も見習えと宣言したくなるほど落ち着いている。

「せつ、先輩……」

重い足取りで近づくと、向こうも存在に気づき顔を向ける。

「水海道、おはよう」

「どうしたんですか？ 誰か待ってるんですか？」

「あつ、ああ、まあな……」

何か照れのようなものをひた隠すように俯き、ポケットからしっかりとアイロンを掛けたハンカチを取り出す。

「……これ、返す。恩はきっちり返すのが、自分のポリシーだ」

無理矢理雅毅に返すように渡すと、今度はカバンの中から小瓶を取り出す。

「何ですかそれ？」

「これは、代々々無家で継承され続けてきた『蘇力錠』というものだ。鍛錬後など、急激な体力の消耗時に一錠飲むだけで活力が戻る代物だ。お前、まだ体調が悪いのだろう？」

「どっ、どうしてそれを知ってるんですか？ 担任と友達しか知らないことを」

核心を突いてしまった自分の失言に、真琴はカーッと顔が上気してしまう。

「……りっ、リッドから聞いたんだ。昨日、学校を休んだということ」

「そうなんすか……」

全てを熟知していると豪語していただけあって、身近のある生徒が学校を休んだことなど瞬時に分かるのだろうと雅毅は思った。

「これを一錠飲めば、体調は回復するにはするんだが……」

蘇力錠の入った瓶を渡そうとする手に躊躇いがあり、雅毅の手に置いて離そうとはしない。

「するんだが？」

「……これには独特の副作用があつて、激しい泣き笑いが出て止まらなくなってしまうんだ」

彼女がどうして躊躇っていたのか、これではつきりとする。

「うっ……激しい、泣き笑い……」

「短くて一日。長くて三日だ……」

飲んで体力が回復しても、引き起こるとてもない副作用を耳にして一気に飲む気は減退する。

「……でもだ、飲めば瞬時に体力は回復する。それは保障する」

「うっ……まっ、まあ、すぐく必要だっと思う時に飲みますよ……」

人の善意を無下に断れず、雅毅は渡された『蘇力錠』をもらうことにした。

「……元氣になれよ。顔を見せないだけで、近くにいる奴らは気になるんだからな」

自分のしたことがとても恥ずかしかったようで、真琴は呟くと足早に生徒の中へ消えていった。

雅毅を襲うダルさは治まる気配などなく、机に向かうにしても頬杖をしていなければすぐにグタツとしてしまうほど深刻なものだった。周囲の目も次第に哀れみを含むようなものになり、痛々しい視線がチクチクと刺さる。

真琴から渡された『蘇力錠』を飲む気にはならないが、出席したという気力だけで授業に参加し、現在、枯れ葉に火を点けるということをしている。

『あゝダリい……この時間終わったら、医務室でも行くか』

フラフラな状態のまま、雅毅は頬杖で堪えながら小枝を握り強化ガラスの皿に置かれた枯れ葉に火をつけようとする。

周りの生徒は、いつものように熱心に真剣に話を聞きながら実践している。しかし、成功するものは少なく、焚き火のような焦げ臭さが室内を充満している。

「えゝつと、空気も焦がす業火の炎よ、我が前に姿を示せ」

何にも真剣みもなく呪文を唱え小枝を振るう雅毅。努力しなくても魔術を使いこなせるという自覚があり、今日も授業を終わらせようとした瞬間、

ぐおおおおっ！

獣の咆哮のような轟音が発生し、同時に圧縮された質量の多い火柱が立ち上がる。教室にいた誰もが気づき、けたたましい轟音と熱波が室内を覆う。

「なっ、何だこれはっ！」

事態の確認しようと近づいてきた男性教師は、黒煙が立ち込めるガラスの皿をのぞく。

「おい！ 水海道、お前はこういう魔力のコントロールをしているんだ！ 枯れ葉を焼くどころか、学校中を火の海にする気か！」

今までガラスの皿に置かれていた枯れ葉は無残に炭化し、机、皿、天井まで至る所を煤だらけにする。

「そっ、そんなつもりないっすよ……」

持っていた小枝も無残に焼け焦げ、半分までの長さになってしま

っていた。

『完璧に魔力をコントロールできるはずのマークくんが、こんな失敗するなんて……』

クラス中の生徒が慌てふためく中、海涼は冷静にいつもの雅毅とは違うということを見抜いていた。

あまりのダルさに、雅毅は午前の二時間を医務室で過ごした後、昼食を摂るため教室に戻っていた。それでも体調は回復せず、ダルさを引きずった状態の彼は動く気力すら起きず、そのまま机に突っ伏していた。

「お前、ひでえ顔してるな」

「ホント、元気がないですね」

午前中の二限を休んだ雅毅の体調が気になり、心配していた翔馬、礼央奈、そして海涼が席の周りに集まる。

「やっぱり無理しちゃだめだよ。早退して、お家に帰った方がいいよ……」

家まで押しかけ、雅毅の体調の悪さを熟知している海涼は、悪い状況を押しても学校に来ている姿に哀れみを感じていた。

「だっ、大丈夫だ、さっきよりもちよつとは良くなったから……」

重たそうな体をもたげ顔を上げて見せるが、目は死んでいて覇気をまったく感じない。

「無理すんなよ。学校来ただけでも辛そうだったのに」

「分かった。昼休み休んだら早退するよ……」

辛い中で必死な苦笑いを浮かべ、雅毅は微量ながら元気であることを見せつける。

「水海道雅毅はいるか！」

突然、気が抜け切っている教室に響く緊張感。たわいのない会話で満ち溢れている教室内を見渡した、独特の格好をした女性は室内を見渡し目的の人物を探し当てる。

「時間がない、急ぎ来てくれ」

他に目もくれず、女性はぐったしとしている雅毅の手を取り無理矢理連れ出す。

「ちよつ、ちよい……」

あまりの一瞬の出来事に誰も対応しきれず、翔馬達は立ち尽くすばかりだった。

強引に連れ出された雅毅は、見ず知らずの女性に腕を引っ張られた後、学園の教師達が使用している研究室に連れ込まれた。

「はあ、すまない。こんな強攻策を取ってしまった」

周囲をくまなく確認した後、女性は研究室のドアを内側から施錠し誰からも邪魔されないようにする。

「なっ、何ですか、いきなり連れてきて。オレ、何か悪いことしました？」

グタツとしてしまっている雅毅を手近な椅子に座らせ、連れ出した女性はキャスター付の椅子に持ち出し座る。

「君には何の罪もない。だが、君の体に起きていることはとても重要なことなのだ。自己紹介しておく。わたくし、アンリ・ペッテンバウアーという教師だ。専攻はフランス語と星座学をして……前置きはいいい、わたくしは上からの命で、この学園にあるといわれる魔術をこの世から葬り去る任に当たっている。わたくしには分かっている、学園内で起きていること、皆が探し求めているもの、そして君の身に起きている不可解な現象も」

脚を組み直しながら、アンリは度の強いメガネを直す。

「だったら、もったいぶらずに教えてください。オレの身に何が起きているんです？」

自分の身に起きていることを何としても聞き出すため、ダルい体に活力を漲らせる。

「君の身に起きた一連の現象は、全て皆が求めている禁術を記したレポートに起因している。異常な魔力の上昇、不可解な倦怠感。全て、陣馬浩二郎が仕掛けたことなのだ」

前に聞いたことのある名前だった。

陣馬浩二郎。

その人物が、入学してからの雅毅の良し悪しを定義し、レポートにも関わりを持つている。

「でも……何で、何でオレなんですか？ 魔法に興味も関心もない、オレなんかを選んだんですか？」

「その理由に関しては分かりかねるが、君の身に起きていることは一刻を争うのだ。君は、レポートの封印を解く鍵だ。このまま放っておけば、倦怠感は深刻化し、命を落としてしまう。その前に、レポートの封印を解き、君の命を救い、禁術をこの世から消す手助けをしたいのだ。協力してほしい」

メガネをしていても伝わる眼光の鋭さに一瞬気圧される雅毅。全て身の知らないうちに展開していただけあり、理解のスピードを遥かに超えている。

「勝手なことを言わないくださいよ！ オレ、何にも関係ないじゃないですか！ 巻き込まれた上に協力してくれなんて、ムシが良すぎますよ！」

「何と言おうが、君はただ協力してくれさえすればいい。自分の命を捨ててもいいのか？ 助けられるのは、わたくしだけだ」

右手を胸に当て、アンリは自信ある所を見せつける。

「もう、後戻りはできないのかよ……」

力なく呟いた雅毅。改めて、自分という存在が嫌になり、この世の理全てが敵であると悟るのだった。

7章

七章 二人

もう、何もかもが嫌になった。学校も、人間関係も、自分に対しても……

自分の身に起きていること知らされ、雅毅は学校へ行きたくなくなり家に閉じこもるようになった。体のダルさの原因は分かったものの、治療法が全く分からず常にベッドに潜り込んでいなければならなかった。

自分の存在意義が、分からなくなっていた。

雅毅が学校を休んでから三日が経過した。

一日中雨が降ったり、風が強い日もあったりと天候が安定することなかった。それはまるで、ある一人のクラスメートの心を映し出したようである。この日も、一日中天候が優れず小雨が降ったり止んだりを繰り返している。

「はあ、今日もマークくん休みかあ……」

授業と授業の合間の休憩時間、数日繰り返している雅毅の席を見て海涼はため息を吐く。

「もう三日になりますね。水海道君が学校に来なくなってから」

ざわざわとした教室の中、机に突っ伏している海涼の側に歩み寄る礼央奈。この数日間、元気のない友達を放つてなどおけない。

「最後に会った時は元気だったのに、急に休むなんておかしいよ……」

「体のダルさが続いているんでしょうか？」

「はあ、会いたいなあ……」

突っ伏している顔を机に押し付けながら、海涼は虚ろな眼差しで黒板を眺める。

「あゝ、聞いてます?」

なかなか話が噛み合っていないことに気づき、礼央奈は海涼の肩に手を置く。

「えっ! あっ、礼央奈ちゃん、何か用?」

ビクツと顔を上げ驚きの表情を浮かべる。

「もう、気づかなかったんですか? ずっと近くにいたのに」

話を聞かず独り言のように話している海涼の姿に、哀れのような悲しさを感じる。

「ずっと気にしてますね、柴原さん。水海道君のこと」

「うん……突然学校を休むんだもん、それも三日間。気にならない方が、おかしいよ」

それ以上思いついたくないのか、海涼は両手を机の上に交差させて置き再び突つ伏すのだった。

多分、魂の抜け殻というのはこういうことなんだろう。

突然、突きつけられた事実。

確証なんかなくたって、元々、嫌になり始めた学校を休む理由なんてごまんとあった。ただ、そのきっかけが欲しかっただけかもしれない。けど、自分において、何かしたという事実がないにも関わらず巻き込まれてしまったのは、正直気分のいいものではない。

元凶たる学校を、気づけば三日間休んでいた。両親には風邪だという口実で学校を欠席し、まだ体調が優れないとその時ばかりベッドに潜り込んで病人を演じる。厳密には病のようだが、治療法のはつきりしないだけあってどうしようもない。ずっとベッドに潜るのだって飽きが生じるし、じっとしていることに対しても嫌になる。

常にラフな格好で部屋に閉じこもり、日々の喧騒から逃避するようにならずと窓辺に座り空ばかり見ている。心の救いである青空はここ数日現れず、くすんだ心を洗い流すことができずばおつと過ごしていた。

「おい雅毅、お前、閉じこもりなのか?」

ずっと塞ぎがちの弟のことが気掛かりで、姉の桃衣はちよくちよく雅毅の部屋を訪ねる。

「……」

話しかけられても反応を示さず、雅毅はダランと腕を投げ出したまま外を眺めている。

「どんな理由か知らないけど、あたしか親に話した方がいいんじゃないか？」

いつもは可愛らしくもない減らず口をぶつけ合う仲なのに、こうも反応がないと否応なしに心配してしまう。

「……ほっとしてくれよ。オレ、何にもやる気がないんだ」

窓の外を見据えながら、雅毅は空虚な言葉を呟く。聞いても聞かなくてもいいような感じで。

「はあ、そうかい……」

力なく呟いた姉は、どうしようもないとでも言いたげに肩を落とし部屋を出て行く。

「……もう、やんなっちまったよ」

姉が出て行ったドアを一瞥し、雅毅は虚ろな瞳を再び外へと向けた。

降り続く雨はない。そして、照り続ける陽射しもない。

四季の移ろいがはつきりした日本において、気温の上下は地域によつて様々だが、天気の良い日も悪い日もある。

数日間優れない天候が続く、一生晴れ間など拝めないと思った休日、今までの愚図ついた空模様が嘘のように雲一つない快晴がやってきた。それまでずっと雅毅のことを思い続け、天候の悪さと相まって暗く沈んでいた海涼はこの日とばかりに学園外へと飛び出した。気持ちの良い天気恵まれ、海涼は普段着ることの少ないお洒落を意識した服を纏う。

髪型はそのままにピンクの肩リボンＴシャツ、グレーのプリーツスカート、白いニーソックスを履いた海涼は礼央奈と一緒に行ったつ

きりだった雅毅の家へと向かう。

一度しか行ったことはないのに、海涼の頭の中には雅毅の家までのルートがインプットされていた。これも、思うがゆえの為せる業か。

温かな陽気に誘われ、海涼は鼻歌交じりに雅毅の家へと向かう。

その目的は勿論、雅毅に会うため。

結局、雅毅は学校を五日間休み、その間の海涼はどこか幽体離脱したかのように元気がなく、何をするにも手に付かずといったことも多く、周囲からも著しい変化がありありと見て取れた。その思いを一気に発散するため、着飾った彼女は道草などせず一直線に雅毅の家へ向かう。

「おい、お前にお客さんだぞ」

ずつと閉じこもったままの雅毅の部屋を訪れる姉。

中を見てみると、パジャマ姿の雅毅はベッドの上で仰向けに横たわり天井を見上げている。起きていることを確認した姉は、訪ねてきた客を部屋に入れそつとドアを閉める。

かすかに誰か来たという気がした雅毅は、無言のまま部屋の中を見渡す。右から左へパンすると、ある一点で静止しそれを確かめるように上体を起こす。

「きつ、来ちゃった……」

突然に現れたことなのか、あるいは、服のセンスに自信がないのか分からないが、海涼ははにかんだ笑みを浮かべ雅毅を見据える。

「どうして、来たんだよ？」

「……マークんに会いたかったからかな？」

疑問を疑問で返し、常に元氣一杯の海涼はもじもじしながら側に寄って行く。

「……誰に入れてもらったんだ？」

「マークんの、お姉さんに……」

気まずい空気が流れ、それ以上のまともな会話が成立しない。互

いの心を知ることにはできないが、海涼は数日振りに会えた雅毅に対し嬉しさで一杯だった。重病で苦しんでいなかったのもそうだが、何よりも、現実姿を見て声を聞けただけで感慨無量だった。

「あのね、さっき言ったこと、ホントなんだよ」

無言のまま見つめている雅毅を直視できず、海涼は視線を忙しく動かす。

「ううん、何でもない、何でもないの。ただ、マークんの体調が気になったから」

思わず口について出そうだった言葉を飲み込み、心を落ち着かせベッドの側に歩み寄る。

「体調か。体調なら、今日は別に」

常に襲われていたダルさが今日はなく、雅毅はベッドの上に胡坐をかいてみせる。

「そうなんだ……それは良かったね。それでさ、どうして一週間近く学校を休んだの？ 体調が悪いことの他に、何かあるんじゃないの？」

雅毅の心を見透かすように、海涼は数日間心を苦しめる続けた原因を訊ねる。体調が悪いのは仕方ないことだとしても、一端を担っている苦しみから解放できるのではないかと思っている。

「あつ、あのな、学校を休んだ原因は、体調の悪さだけじゃないんだ……」

ここで素直に話したら、どれだけ心が落ち着くだろうか。心を苦しめる鎖は解かれ、開放感に浸れるなら全部吐き出したい。けど、そんな気にはなれなかった。

どうしてなのか。自分でも分からない。

「もう一つ、もう一つ……」

勢いで話してしまいそうだった雅毅は、絡まっていた視線を外す。

「もう一つって、何なの？」

不可解な尻切れに海涼も異変に気づき、ゆっくりと雅毅の顔を覗き込もうとする。

「もう一つ……クソッ、駄目だ……」

話したいという欲望よりも押さえつけようとする圧力に負けてしまい、その圧力の捌け口を拳に込めベッドを殴りつける。

思いもよらない暴拳に一瞬身動きをする海涼。それでも、心を苦しめ続ける原因を取り除いてあげたい彼女は、ある提案を持ちかける。

「……いつそ、出かけちゃおうよ！　ずっと家に閉じこもってても気が滅入るだけだし、どこかに行こっ！」

禍々しい怒りに満ちた雅毅の右手を取り、海涼は努めて明るく振舞う。

「行くつて、どこに？」

「どこだっていいよ。同じ場所じゃなきゃ、どこだって。あつ、そうだ、私の寮に行ってみない？」

勝手に行き先を決めてしまうと、海涼はベッドに胡坐をかいていた雅毅を立たせる。

「おつ、おい！　このままの格好で連れて行く気かよ」
腕を振り払いベッドの端に座る。

「えへへ、そうだね。このままじゃ、マズイよね」

天然娘のゆえんたる天真爛漫な笑みを浮かべる海涼。やっと雅毅と楽しい話ができて、嬉しさが込み上げる。

「ったく、行ってやつから、家の前で待ってる」

ぶつきらばうに告げると、雅毅はベッドから立ち、メガネをベッドの上に投げ上着を脱ごうとボタンに手を掛ける。

「……おい、着替えまで見るつもりか？」

部屋を出ようとしな海涼の姿に気づき、外そうとしていた手を下ろす。

「えっ、あつ、ごつ、ゴメンなさい……」

自分のしようとしていたことに気づき、慌てた様子で部屋を出て行く。

「ったく、とんだ休日になっちまったな……」

独りごちる雅毅は、言ってしまった手前、渋々パジャマを脱ぐのだった。

渋々海涼に連れ出された雅毅は、自分の体調が不安でたまらなかった。倦怠感が数日間にも渡り続いているにも関わらず、外出してしまつていいのかと改めて考えてしまふ。突然倒れてしまふという可能性がある中で、海涼に迷惑にならないかと逆に思っていた。

「いい天気で良かったね」

始終笑みを浮かべながら、海涼は楽しそうに雅毅の顔を見上げる。まるで自分の楽しさを分かち合うかのように。

「あつ、ああ……」

久しぶりに外出した雅毅。

学校生活の比重が一日を占める学生にとって制服以外で外を歩くという機会が少なくなり、私服にあまり用がなくなっていた。髪には手を加えず、フード付トレーナーにジーンズというラフな格好で、雅毅は久々に履いたシューズの感触を確かめる。

「あの……無理して外に出ちゃったけど、具合が悪くなったらすぐ休もうね」

今更になり、海涼は勢いで出かけようと言ってしまったことを悔いる。視線を斜め下に向け、大人しそうに両手を組んで歩く。

「ああ、分かったよ」

自分でも無理はいけないと思っていた節もあり、海涼の気遣いはどこか心を楽しにしてくれる。

「よお、お前の寮に行くって言つても、女子寮だったら男子禁制なんじゃないか？」

「ううん、別に平気だよ。無断で入るのはダメだけど、監視員の人に言えば昼間だけ男子でも入っていいの。こっそり男子を夜間に連れ込んだりする先輩とかいるみたいだけど、ホントはダメなんだよ」

「……どこまで常識が通じるかな」

ポツリ呟いたことを海涼に訊かれたが、大したことじゃないとす

ぐに話を終わらせた。

この五日間を埋めるように、海涼はありとあらゆる話題を一方的に話し、それを雅毅は相槌を打ったり首を前と左右に振るだけで対応した。

案の定、いつも登校するたびに通る大きな校門は閉ざされ正面から入ることはできない。

海涼は学園に勤務している教師などが通る門を教え、監視員のおばさんに入る旨を伝えて休日の構内へ入る。

「すげえ静かだな」

常日頃生徒や教師達でひしめき合う構内において、閑散とした風景は逆に寂しさを与え人恋しさに駆られる。

「でしょ？ 休みの日になるといつもこうなるんだ。時々、庭の手入れをしてくれる業者さんとか、部活動してる生徒さんとかいるだけで静かなんだよ」

雅毅よりも学園内にいる時間の長い海涼は、物悲しさを含みながら静かな校舎を見上げる。

「構内の散策もしたいから、まずは私の部屋行って少し休もう」
改めて笑みを作った海涼は、雅毅の体調を気遣いながら女子寮に案内する。

女子寮は、前にユークリッド達から呼び出された際に訪れたことがあり、場所はなんとなく覚えていた。しかし、今回は中へ入ることだけに、緊張しないなんて嘘になる。

「寮か…… なんか、凄いな」

「どんなトコが凄いの？」

女子寮へと入る出入り口の前で立ち止まり、思いもしない雅毅の言葉に訊ねる。

「いや、一人暮らしするのって、何となく大変そうだから」

「あつ、そうだね。最近慣れちゃってて、そんなこと忘れちゃってた。でも、大変なことは大変だし、楽しいことは楽しいし、いい人生経験だったりしてね」

ちよつと得意気に、人生経験という部分を気に入った海涼は特徴づけるような言い方をする。

「じゃっ、私の部屋にレッツ・ゴー！」

作った拳を高々と上げ、元氣瀉刺に海涼は雅毅を寮内へと案内する。

女子寮は三階建で構成されており、学生が利用する玄関口から左側に部屋が伸びている。海涼の部屋は最上階の中央付近にあり、そこに着くまでかなりの距離を歩かされた。

「……ホントに入って大丈夫なのか？」

「だいじょぶだよ、男の子を入れるの初めてだけど、そんなに緊張しなくていいよ。リラックス、リラックス」

何の恥じらいも感じず、海涼は自分の部屋のドアの鍵を開ける。魔術を教える学園にしてはごく一般的な金属製の鍵を使ってるし、寮内には何ら魔術の類のものはない。

「さあ、ようこそ海涼ちゃんの部屋へ」

重そうなドアを開けて目に飛び込んできた物、それは何とも説明しがたい一般社会において有り得ないものばかりだった。

「うっ……」

雅毅はとりあえず絶句した。いや、絶句せずにはいらなかった。その理由は、海涼の変わった趣味に起因している。

「凄いでしょ、私の集めたマジックアイテムの数々」

一つ一つ説明してあげると、海涼は雅毅を室内に招き入れ、室内の中で一番まともなポップデザインのテーブルの前に座る。

「これ……一人で集めたのか？」

室内をしげしげと見渡し、ただならぬ雰囲気醸し出す装飾品の数々を目にした雅毅は、体調の良し悪しに関係なく眩暈を覚えてしまう。

「そっだよ。こっちに来る前からマジックアイテムの収集に凝ってて、今ではもうこんなに集めちゃった」

室内にはそれ相応の服や制服など、女の子っぽさを出しているものも無いわけではない。

しかし、それにも増して彼女の言うマジックアイテムの数が尋常じやなく多く、可愛らしさより不気味さが強い。

「これは凄いいんだよ！ 誰だったか忘れたけど、それはそれは有名で強大な魔力を持った魔導士さんが使ってたレアな魔導書なんだって。で、こっちが、有名な女魔導士さんが愛用していたローブなんだって。世界に一着しかない代物だって言うから、思わず買っちゃった」

まるで下手な博物館の案内人のように、海涼は室内に置かれた魔法に関するアイテムを、手にとっては鼻高々に自慢話をする。しかし、どれもこれも胡散臭く、彼女が言うところの魔力を感じるだのレアだの、貴重さが微塵も感じ取れない。

「あつ、あのさ、自慢したいのは分かったけど、そんな貴重なものを高校生なんかに売るか？」

「えっ？」

誇らしげに集めたコレクションの自慢する海涼の言葉が止み、冷静に見続ける雅毅に目を向ける。

「落ち着いて考えてみる。本物のレア物なら、極々普通の高校生なんかに売るか？ 普通の代わりに『金持ち』が付く高校生なら別としてだ。売り手は、本物か偽物か区別する前に自分の利益しか考えない。そうだろ？ 金を持ってなさそうな人間に、本物なんか売り付けるか？」

「うーん……そう言われると、そうなのかも……」

ヒドクパニくるどころか、海涼は至極冷静に物事を捉え他人事のように呟く。どれだけお金をつぎ込んだのかも知らずに。

「でも、いいの。偽物でも本物でも、私は価値のある物だって信じてるから……」

一度ぎこちない笑みを浮かべ、海涼は紹介した品々を元の場所に戻し始める。

ここまで歩いてきた疲れが出たのか、雅毅は微量ながらダルさを感じベッドにもたれ掛る。何気に整理している海涼の後姿の近く、背の低いタンスの上にマジックアイテムと並んで一枚の写真立が置いてある。

「それ、家族の写真？」

「えっ？ あつ、そう、家族みんなの写真」

整理を終えた海涼は、雅毅に言われた写真を手にする。

「お父さんとお母さん。私に……ペットのジークン」

「ふうん、ペットも飼ってるんだ。何歳ぐらいなんだ？」

家族揃って写っている写真。周りの雰囲気から家の庭で撮影したその写真には、海涼本人と海涼の両親、そしてペットのジークンとゴールデンレトリバーと一緒に写っている。

「えっと……生きてたら、十三歳、かな」

「生きてたら？」

「三年前、病気で死んじゃったんだ。でもね、寂しくないよ。毎晩、夢の中でジークンと遊んでるから……」

一度手渡した写真立てに目を向けながら、海涼は虚勢を張って健気に話してくれた。大丈夫だって言っても、その顔には寂しさが色濃く出ている。家族同然に暮らしていたペットの死を、彼女はまだ受けきれないようである。

「……仲良しだったんだな」

「うん……夢の中じゃなくて、一回でもいいからジークンと遊びたい……」

思いのたけを話した海涼は、気づくと両目に溢れんばかりの涙を浮かべていた。夢の中で会えても、現実の世界で会えないことは肉親を失ったぐらいの悲しみがある。その強い思い入れは、目尻からこぼれ落ちそうな涙が物語っている。

「……えへっ、こんなシンミリしてる場合じゃなかったね。もうそろそろ、構内を散歩しよう」

写真立てをテーブルの上に置き、海涼はいつの間にか溜まってい

た両目の涙を手の甲で拭い取る。そして、雅毅に微笑みかけ、ゆつくりと立ち上がる。

「体の方はだいじょぶ？」

「あつ、ああ、なんとか……」

いつも元気が取り柄のような海涼とは違い、悲しみに沈む姿を見た雅毅は一瞬思考が止まってしまった。

「じゃつ、戸締りして行こう」

さつきまでのことが嘘だったように、海涼はいつもの笑みを浮かべ戸締りの確認に向かう。

休日の学園内は、まるで二人だけの庭のようである。グラウンドや、その他の施設を部活動の生徒が利用している以外、まったく人氣はないに等しい。常に喧騒の中にある構内が静かであると、今まで行つたことのない場所でも抵抗無く行ける。

温かな陽射しは多少なりと体の水分を消費させ、喉の渴きを訴えさせる。ずっと水分らしい水分を摂取していない二人は、屋外に設置されている飲料水の自販機でそれぞれ飲み物を購入した。

ちよつとした散歩感覚で、二人はグラウンド、テニスコート、卒業パーティーが行われるという洋館、室内プール、学園の名所である大きなナラの木を見て回った。途中、雅毅の体調を気遣い休んだりしながら、今まで訪れたことのない施設を見学し、時の流れと共に、気づくと二人は外れにある古い屋敷まで来ていた。

「あつという間だったね」

「ああ、今まで行つたことのない場所を回るだけで、こんなに時間が掛かるんだな」

木立の間を抜けて射し込むオレンジの光線。鬱蒼とした木々を抜けて射し込む陽射しが屋敷の外壁に当たり、モノトーンの味気ない雰囲気の壁が油絵のような赴きある姿に様変わりする。あの悪夢のような出来事が、今では遠い昔のように感じる。

「あの、一つ聞いてもいいかな……」

隣り合って屋敷を見つめていた海涼が、そのままの体勢でぼつり
呟く。

「うん？」

「血清を探しにこの中に入った時、地下室で何があったの？」

「地下室に閉じ込められた時？ いや、別に何も……」

あまりの突然なことに、その日のことを思い出そうにも瞬時に出てこない。

「ううん……そんなはずない。きっと、何かあったんでしょ？ そうじゃなきゃ、あの人があんなこと……しないもん……」

屋敷を眺めていた海涼が急に取り乱すようになり、雅毅の方に向き直るとそれまで楽しそうだった海涼の瞳に涙が浮かんでいる。

「なっ、何だよ急に。地下室に閉じ込められて大変だったんだ。先輩は脚にケガしていたし、互いに協力して助け合うのは当然のことだろう？」

真琴と一緒に閉じ込められていた地下室。血清を探し出したことはいいとしても、その後の出来事が海涼にとって引っかけているらしい。

「あのね、見ちゃったんだ。マーくんとか無先輩が会ってるところ……」

あの事件後、唯一会ったといえば朝の校門ぐらいだ。それ以外ずっと家に居たのだ、その現場を見ていたに違いない。

「会っていたの、見たのか」

「うん……」

いつも早めに登校する海涼は、この日珍しく寝坊してしまい、ちよつと遅く登校した所を目撃したと話した。

「親しそうにない二人が、事件の後、あんな風に話してるところ見たら、誰だっけ何かあったって思うよ、普通……」

間を隔てていた距離が縮まり、海涼は号泣寸前のような顔で雅毅を見上げる。

「ねえ……正直に答えて。あの暗闇の中で……何があったの？」

いつも無邪気で笑みのたえない海涼。夢見がちで無鉄砲な部分しかないと思っていた雅毅は、一瞬にしかすぎない些細なことで、ここまで他人を嫉妬する彼女の姿を今まで見たことがなかった。雅毅に対しての思いが強いことを物語っているが、無実の罪で疑われるのは気分が悪い。

「本当に何も無いんだっ！ 思い込むのもいい加減にしるよなっ！」
今までの和やかな雰囲気が一瞬で打ち砕かれ、縮まろうとしていた二人の距離は離れていった。

「……わかったよ。もう、マークんと話すの止める……」
悲しい決心を固めた海涼は、ポケットに忍ばせていたものを雅毅に無理矢理握らせ走り去っていった。涙を滲ませ、悲痛な思いを背負ったまま雑木林の中へ消えていく。

「……」

一方的な考えを押し付けられてしまった雅毅。自分に何も非がないというのに、心の中にはやりきれない靄のようなものが痞えていた。

海涼が握らせたものを確認してみると、手の中には、制服に縫い付けられている同じ五芒星のイヤリングのようなものだった。

その室内は禍々しい妖気で満ちていた。

深夜の図書室。それも閲覧禁止の部屋を一人訪れる人影。持ち合わせたランプに映る漆黒の白衣。見開かれた瞳は己の欲望で薄汚れ、温かな陽射しを取り込むことができない。

「フフフッ…… あったぞ、この世の全ての魔物を封じ込めたという魔の書が。これで、私の目的も完成される」

黒衣の男、和鍋は目的の魔の書を床に開き、ランプで照らしながら呪文の詠唱に入る。

「汝、我が声、我が言葉に耳を傾けよ。汝の束縛しせり封印を解いたならば、我に力を与えよ。心身汝に捧げ、絶大なる滅の力、今こそここにいいいいいっ！」

締め切られた室内を駆け巡る負の妖気。荒れ狂う突風と共に、書に封印された魔物達が堰を切ったように溢れだし室内になだれ込む。
『オマエガ、ワガハイノフウィンヲトキシモノカ？ オマエノフノチカラ、ワガハイニサシダスノダアアッ』

書の主らしき魔物がその巨体を現し、魔物の放つ畏怖に恐怖する和鍋の体へと侵入していく。質量で圧倒的な差があるにも関わらず魔物は和鍋の中へと潜り込み、体の一部となっていく。

「ぐはあああああつ！！」

心を食い破ろうとする魔物の絶大な力に襲われ、苦しみもがきながら和鍋は魔物と一体になっていく。末端の神経、細胞の隅々まで魔物の侵入は止まることを知らず、抗おうとする和鍋の体を抑制していく。

激しい痙攣に襲われた和鍋は、最後本棚に体をぶつけられようやく静止する。

「……フハハハッ！ スゴイ、スゴイズ、コンコントワキデルイズミノゴトキ、マリオクガタイナイヲカケメグルゾ。コノチカラ、ツカワズシテナニナロウ。セカイジュウニワタシノチカラヲコジスルタメ、テハジメニコノガクエンヲ、コントントキヨウフノハッシンゲントシヨウ……」

解き放たれた魔物達に囲まれた和鍋は、魔物に支配され今までの姿は消え去っていた。

翌日の天気は、快晴から一転して雨模様だった。

朝から小雨ながら降り続き、空には重たい灰色の雲が敷き詰められ輝きを放つ太陽を覆い隠していた。

この日、体調の崩れがないと感じた雅毅は、数日振りに学校へ向かおうと準備を整えていた。制服に身を包み、メガネを掛け、机の上に置かれた手鏡を見ながら頭髮を整える。粗方セットが済み、手鏡を机の上に戻そうとした時、不意にあるものに目が止まる。

『アイツ……』

無造作に置かれた一組の装飾品。五芒星の形をしたそれは、先日、海涼との会話の末にどさくさに持たされたものだった。形状からして耳に付けるものだったものの、付けるという行為にまで至らず今まで置いておいたのだった。

『……いや、全部、アイツの思い過ごしなんだ。オレに、罪なんてない』

過去の悪夢を振り払うかのように、雅毅は耳飾りを掴み取ると強引に引き出しに押し込もうとした。しかし、そのタイミングを見計らうかのように、ノック音が遮る。

「おい、今日は学校に行くのか？」

何の許可もなく、部屋に入ってくるは早朝のまどろみを楽しむようなラフな格好の姉。

「……ああ」

無断で入ってきたことを諫めようとせず、雅毅はゆっくり入ってくる姉を見据える。

「……姉貴、頼みがあるんだ。聞いてくれないか？」

「うん？ 珍しいなあ。姉に頼み事って何だよ？」

いつもと違う雰囲気の弟の姿に、桃衣は腕組みをしながら近付く。「この付け方……教えてくれ」

握り締めていた右手の中にあるものを目にし、姉は優しく微笑んで問いの答えを返すのだった。

海涼は過ちを悔いていた。自分の抱いていた疑念に、自分のしてしまった行為に。

確証も何もないというのに、自分勝手な妄想が引き起こした深い亀裂で雅毅との関係が破綻してしまった。自分が人助けをしようと誘っておきながら、人を信用しないという不道德な行為。そして何より、その責任を何もかも押し付けようとしていた事実。

全ての非を認め、誠心誠意を持って謝りたいと思った海涼は、登校する時間よりも早く支度を整え雅毅の家へ向かった。暗く沈んでい

る心を映し出しているような雨の中、お気に入りのクマさんの傘を差して。

『マークんにちゃんと謝ろう。身勝手な思い込みをしてたってこと……』

道に迷うことなく雅毅の家に着しようとしたその時、白い傘を差した人物が家の外に出てきたのだった。

直感的に雅毅だと確信した海涼は、急ぎ足で玄関先に向かい、出てこうとする人物の前に立ちはだかる。

「まっ、マークん、ごめんなさいっ！ 私……私……身勝手に、他人に迷惑を掛ける最低な人間でしたっ！ マークんのことを信じてあげられなくて、自分勝手に思い込みだりして……ホント、ごめんなさいっ！」

差していた傘も、手提げカバンも雨に濡れるアスファルトの上に落とし、海涼は両手を両膝に置いて深く深く頭を下げた。制服が濡れたっていい、カバンだって中身の教科書だって濡れてもいい。マークんを苦しめた自分が許してもらえるなら、どんな酷い目に遭ってもいいと。

「……これ、似合ってるか？」

「……えっ！」

謝って返ってきた答えに、海涼は反射的に上体を起こす。

「付けるかどうか迷ったんだ。でも、お前がくれたから、付けなきゃいけないって思ったんだ……」

切り揃えられた前髪を伝う雫の向こう、怒っているはずの雅毅の耳に付けられた見覚えのあるもの。

「……そっ、それ、付けてくれたんだ！」

喧嘩別れまでして無理矢理持たせたもをしてくれた雅毅に、言い表せない感謝の気持ちが届き上げる。

「あっ、ああ、まあ……」

雅毅も今までこんなアクセサリーを見に付けたことがなく、恥ずかしさに顔が強張ってしまう。

「姉貴に手伝ってもらったんだけど、付け方、これで合ってるのか？」

雨に濡れたままの海涼を傘の中に入れるように、雅毅は付けたア
クセサリーを見せる。

「うん……うん……それで、バッチリだよ……」

今まで抱いていた負の感情全てが浄化されたみたいに、海涼の心
の中は澄んだ清水のように綺麗に素直になっていった。

「ほら、オレみたいに学校を休みたくないだろ？ 早く傘差せよ」
ずっと雨ざらしになった傘とカバンを拾わせる雅毅。衣服やカバ
ンについた水分は乾ききれないが、このまま濡れるよりはマシであ
る。

「そんじゃあ、学校に行こうぜ」

「うっ、うん！」

わだかまりばかりあった二人の関係が修復したと思った矢先、突
然、ビルを解体するようなけたたましい爆発音が轟く。周囲の民家
が微震を起こし、爆音の余波を受ける。

「なっ、何だ、今の音？」

「あっ、あそこ！」

海涼が傘を持ち上げて見つけた雨の中に立ち上る土煙。あそこの
方角には、二人が通っている学校がある。

「あっちって……」

「学校の方だよ！」

学園の危機を察知した二人は、合図もなく次には雨の中を走り出
した。

雨の中、胸騒ぎのような不安感に襲われた二人は一目散に学校に
到着した。あの高々と上がった土煙と爆音。本当にビルの解体して
いるなら何も問題はないのだが……

「まっ、マーくん……見て……」

息を切らせて辿り着いた先に見たもの、それは、最新鋭のホラー

映画よりもグロテスクでどす黒く、直視するにはよっぽどの覚悟がなければ見れない光景だった。

「ハア……ハア……ハア……まっ、マジかよ……これ……」

二人が目にしたもの、それはこの世には存在しないはずの異形な化け物達と、同数近い人間らしい骸が血みどろを浴びて横たわっていたのだ。

「うっ……うそ……」

何もオブラートを包まずして直視してしまった海涼は、反射的に両手のものを落とし顔面を覆い隠す。

光景はあまりにも残酷で、災害現場のような悲惨さと戦場のような空虚な恐怖が支配している。空には死体を貪るハゲワシのような魔物が滑空し、翼を羽ばたかせ次の標的を漁っている。

「なっ、何だよ……コレ……」

恐怖すら超越した光景に目を疑い、再度湧き上がる倦怠感に体の力が失われる。

「イヤ……こんなの……イヤ……」

目の前の光景が全て嘘であって欲しいと言わんばかりに、顔を覆い隠したまま頭を振る。

楽しくて明るいイメージしか持っていなかった海涼は、ここまで惨いありさまに気が触れそうだった。

「水海道！ 柴原！」

聞き覚えのある声に揺り動かされ、動揺を隠し切れなかった二人は声の方へ向く。

「せっ、先生！」

二人が見たもの、それは所々きり傷のあるジャージ姿の典佳だった。

「無事だったか、お前達……」

傷を負いながらも、典佳は勇敢に戦った様が外見だけでも感じ取れる。

「水海道君、それに柴原さん」

「ユークリッド、アンリ先生、皆さん無事でしたか」

今まで魔物達と死闘を演じていたらしいユークリッド達とアンリも、雅毅達の側へ駆け寄ってくる。

「ええ、鹿嶋先生も無事で何より」

「みんな無事でよかったです」

集まったはいいいものの、話の輪に入らない真琴は周囲に警戒線を張り敵の襲来に気を配っている。

「あの……これって、一体、どうしてこのようなことになったんですか？」

雅毅達以外、皆が重症までいかないもののそれぞれ擦り傷や切り傷を負い、ことの重大性を知らしめている。

「和鍋……和鍋先生が、図書室の閲覧禁止となっている場所にある魔物を封印した書の封印を解いたのです」

「なぜ、あの人がこんなことを……」

「あの人の目的は、学園内を混乱に陥れ、どさくさに紛れて水海道君の命を奪おうとしているのです」

アンリの確信を突く発言に、皆の視線が雅毅に向けられる。

「おっ、オレの命を、奪う……」

「ああ、残念ながら、時間の猶予がないようだ。水海道君、一刻も早くレポートを見つけ出すんだ」

二人だけの中で交わされていた内容に、海涼はもちろんユークリッド達、担任の典佳でさえも驚きを隠せない。

「みつ、見つけるって言われても……どこにあるか……」

「大丈夫、君なら自ずと見つけることができる。道中、気をつけなさい」

優しく肩に置かれた手。それは、これから向かう雅毅の体を労わるような優しいものだった。

「敵だ！」

終始周囲に視線を配っていた真琴が、身に迫る危機を知らせる。

「さあ、行きなさい。ここは私達で食い止めます」

「何だか知らないが、僕達は君の援護に回る。レポートを手にする役は、君に譲るよ」

「ガンバって下さいですう」

「お前達、無理はするんじゃないぞ。何よりも、命は大切なんだからな」

それぞれに敵を迎え撃つ体勢を取りながら、二人を励ます。

「マーくん、必ず見つけ出そう。みんな、きつと、だいじょぶだから……」

持ったままだったカバンを近くの草の中へ投げ飛ばし、雨にも関わらず傘を閉じ優しく話しかける。

「……分かったよ」

自分自身のことだというのに、倦怠感が原因しているか定かでないが、雅毅はひとつも理解できない。皆の思いは北海道雅毅という一人の人物に委ねられ、必ずやってくれると信じている。

「見つけ出してやるさ。必ず！」

初めてはつきりした意志のようなものを掴んだ雅毅は、海涼と同じようにカバンを投げ捨て傘をたたむ。

「敵の群れだ、急げ！」

最後、アイコンタクトで見送る真琴と目を合わせた雅毅は、敵が襲い掛かる瞬間、海涼と共に走り出した。

レポートの在り処は、自ずと見つかる。

探し出すと宣言したものの、何も手がかりのない雅毅にはどこにあるのかなんて分からない。

レポートの封印と、自分の身に起きていることには関係性がある。事件前に言ったアンの言葉。この言葉の意味することが、レポートを見つけ出す答えなのかもしれない。

『オレが思う場所に……レポートがあるのか……』

体内を込み上げる倦怠感と戦いながら、雅毅はヒントを手繰り寄せる。哲学的な難題を目の前にして、冷静な判断が必要となるのに

上手くできない。」

「マールくん、思い当たる場所、ある？」

必死になって並走する海涼。雨足は弱まり、傘を必要としないのにしっかりとクマさんの傘を持っている。

「全然思いつかないんだ。思い当たる場所なんて……」

小雨になったと判断した雅毅は傘を捨て、走ること懸命になる。できるだけ敵と遭遇しないよう細心の注意を払い、目的のレポートを探す。

「あつ、危ない！」

テニスコート前で向かい合って立ち止まった瞬間、雅毅の方を見ていた海涼が上空から迫る魔物に気づく。

「えーっと、こういう時は……」

クマさん傘の柄をしっかりと握った海涼は先端を魔物に向け、必死に念じる。

『魔物よ……どこか……遠くへ……ここから違う場所へ……』

前に習った物体を動かすという魔術を思い浮かべ、念が通じるよう柄をしっかりと握る。

「ううううううん……ハッ！」

気合一発放つと、牙をむき出しに急降下してくる魔物の体が、気によって弾き飛ばされるかのように後方へと消えていく。

「なっ、中々、お前のド派手魔術も役立つもんだな」

背後からの襲撃を防がれた雅毅は、海涼に対し皮肉交じりに褒める。

「えへへ、これも勉強の賜物だね」

海涼も負けじとこの場に不都合な満面の笑みを浮かべる。

「ここは違うみたいだ。他を探そう」

この場所でないと感じ取った雅毅は、次の場所へと走り出す。

学園内の主要な場所を当たるものの、雅毅が思う『ココ』という場には巡り合わなかった。途中、海涼に負けじと雅毅も杖のような媒体を持たずして、襲い掛かる魔物に対し手をかざし消えろと念じ

ただけで消してしまうという力を発揮し、魔物を掃討する。

『この異常に高い力も、レポートと関係あるのか……』

これといって魔術に関しての知識がない雅毅が、魔物を消してしまふことなどできるわけがない。やはり、封印を解かなければならない状況下にあるようだ。

休む暇なく学園内を探し回った末、雅毅達はある建物の前に辿り着いた。

あの古い屋敷。

ユークリッドが呟いた、陣馬浩二郎という人物が使用していたという地下研究室がある場所。そして、何よりも真琴と一緒に閉じ込められ、不思議なことがおき始めた出発の地。

「ここだ……この中に……レポートがある……」

深刻化している倦怠感の中、雅毅は無意識に呟いた。それはまるで、レポートに導かれるように。

「ホント……ホントなんだね？」

疲れきった面持ちで、海涼は遠めに屋敷を眺めた。

屋敷内に入ると、外の喧騒が嘘のように聞こえず、まるで湖畔に建つ別荘のような静寂が包む。

直感的にこの中だと判断した二人はゆっくり室内を散策し、ユークリッドが開けた大穴のある部屋に入る。

「この下……レポートはこの中だ……」

何の根拠もないというのに、雅毅は丸くカットされた床下、地下室にあると告げる。

学校の関係者が室内を調査でもしたのだろうか、穴には下へ続く縄ばしごが掛けられている。

「分かった。じゃあ、私が先に下りるね。傘は、預けておくから」
縄ばしごの耐久性を確かめつつ、海涼は意を決してゆっくりと穴の中へ降りていく。傘を預けられた雅毅は、急激に増したダルさと戦いながら穴の中をのぞく。

地下室への移動手段が簡単に見つかり、再び忌まわしき場所に戻ってきた。室内には壁伝いにライトが設置され、暗さに困ることはなかった。

「この部屋のどこかにある……てっ、手分けして探そう……」

苦しそうな荒い息遣いの雅毅は、海涼とは反対側の壁を探し始める。数日前に訪れたときは比べものにならないくらい室内は明るく、搜索するにはちょうどいい光量がある。

「くっ、クソツ……誰なんだ……誰がさっきから助けを求めてるんだ……」

ちょうどはしごを降りた時点から、雅毅の頭の中では聞き覚えのある少女の声が延々と繰り返し響いていた。

「早く……助けて……早く……封印を……解いて……」

幼げな雰囲気を持った優しい少女の声。前に一度聞いたことがあるものだったが、それはどこでどんなふうに聞いたのか思い出せない。

「クソツ……誰なんだよ……」

苦しさに顔を歪めながら、雅毅は照らされている壁を慎重に手探りで探す。どこか変な場所はないかと探している雅毅の目に、一枚の絵画が止まる。

内容は、スーツを着こなした年老いてもなお凛々しさをもった男性と、高級そうな大きな椅子に座る着物を着た幼い少女。二人とも表情は明るく、何かの記念で描かれたものに違いなかった。

研究室には相応しくないものだと思っただ雅毅は、体を襲うダルさと懸命に戦いながら絵を手にとろうとした、

刹那、

「フッフッフ、ヨウヤクメグリアエタナ、ミツカイドウマサキ……」
突如聞こえる変声機を通したような奇妙な声。刺々しいまでの畏怖を背筋に感じた雅毅は、その声のする方に体を反転させる。

「あっ……」

今までに感じたことのない戦慄を覚えた先にいたのは、地球上に

いる全ての動物に属さない奇妙で巨大な化け物だった。

「サア……キンジュツヲシルシタ……レポートル……ヨコセ……」

異形な姿をした化け物は、はちきれんばかりに隆起した腕を雅毅に向け差し伸べた。

8章

八章 願いを託して

突如自然の摂理に逆らった動作をして現れた異形な化け物。赤銅色の肌が露になった部分は全てにおいて血管が浮き出るほど隆起し、頭部には二本の角らしき突起物が突き出している。口からは異常に発達した犬歯が突き出し、吸血鬼のような形相をしている。両手の爪もナイフのように鋭く研磨され、体に突き刺されたならば苦しみもがきながら絶命するだろう。

この世の物とは思えないグロテスクな化け物と、雅毅達は同じ室内にいた。逃げようにも唯一の進入口を塞がれ、部屋を脱出することは不可能に近い。

「サア……レポートヲ……ヨコスノダ……」

全てを知り尽くしているのか、化け物はゆっくりと下降し雅毅を見下ろす位置に来る。

「だっ、ダメだよマークくん！ こんなヤツの言うこと聞いちゃ！」

今まで雅毅とは反対側で探していた海涼が、不意を突いて勇敢にも化け物の間に割り込む。

「おっ、お前……」

「フツ……コザカシイ……コムスメ……ワタシニ……ハムカオウト……スルノカ……」

両手にクマさんの傘を握り、海涼は先端部を化け物に向ける。その手は恐怖に震え、気丈に振舞う彼女でさえ、化け物が放つ畏怖の念に気圧される。

「だっ、だいじょぶ……こっ、ここは私に任せて。マークくんは、レポートを見つけて」

いつも無鉄砲に先走ったことが多い海涼だというのに、今は懸命に雅毅を守ろうと自ら盾となる。

「だっ、ダメだ！ お前なんかに守ることなんてできない！」

健気にも自分の命を投げ打ってでも助けようとする海涼に対し、雅毅は語尾を強め言い放つ。

「いつ、いいから、ここは私に任せて、お願い……だから……」

自分の願いを聞き入れてくれない雅毅に、海涼はゆっくりと後ろを向く。そこには、大粒の涙を零し頬を濡らす一人の少女がいた。

「海涼……」

どんな危険な目に遭うかもしれないという恐怖と戦い、懸命に立ち向かおうとする海涼。

常に守ってもらうばかりの自分が嫌で、今度は自分が守る番だと決意したのだ。

「はっ、初めて、名前……呼んでくれたね……」

初めて名前を呼んでもらった海涼は、本当に心が通じたんだという嬉しさで顔が綻ぶ。

「ここは、私が守るから、マークくんはレポートを探して。早く！」

魔力は無いに等しい。それでも守ろうとする海涼の姿に感化され、雅毅は絶対探し出してやると決心するのだった。

「分かった。ここは任せるけど、無理すんじゃないぞ！」

「うん！」

二人の分担が明確となり、雅毅は再びレポートの探索に入る。そして海涼は、ほんの少しの魔力と守り抜くという大きな決意を胸に立ち向かう。

「フッ……ワタシニ……カテルト……オモツテ……イルノカ……」

非力な存在である少女を嘲るように口角を上げる化け物。

「絶対……ゼツタイ、マークくんを守るんだから！」

傘の柄をしっかりと握り締めた海涼は、散々失敗していた物体を動かすという魔術に挑む。

化け物の背後に大きな岩があるのを見つけ、その石を持ち上げぶつけるイメージを膨らませる。

「ホウ……ワタシト……ハリアウ……キカ……オモシロイ……」

化け物は更に嘲り笑うと、若干後ろへ下がり左手を突き出す。

「チカラノ……サトイウモノヲ……シルガイイ……」

化け物は直線上に雅毅と海涼がいることを確認し、左手の関節を微妙に曲げ何かを掴むような形にする。

「グアアア……ゴウハツ！」

喉から血反吐を搾り出すような重く響く声を発し、左手に作り出した妖気の塊を打ち出す。

「きゃああああっ！」

「ぐああああっ！」

必死に岩を持ち上げようとしていた無防備な海涼は、放たれた気の塊が直撃し天井近くまで弾き飛ばされる。雅毅も巨大な衝撃波を喰らい、ともに背中から壁にぶつけられる。

強い衝撃を受けた二人は距離を置いて床に横たわり、痛みに体を支配され身動きが取れない。

「フツ……タアイナイ……ワタシニハムカウナド……イツシヨウム
リダ……」

虫けらを踏み潰すような圧倒的な力を見せつけ、化け物は必死に体をもたげようとする雅毅の前に降り立つ。

「バシヨハ……ワカツタ……モウ……オマエニ……ヨウハ……ナイ
……」

凶器の何物でもない右手を雅毅の頭部に向け、化け物は止めを刺そうと気を集中する。

「アテリア・マルツリア！」

聞き覚えのない魔術の詠唱が聞こえたと思った瞬間、天井付近から一条の強い光が化け物の背中を穿つ。

「ダレダ……」

集中していた意識が遮断され、化け物は肉の焼ける匂いを嗅ぎ取りながら背後を見上げる。

「あたしの教え子に手を出すとは、同じ教師だろうが許さない。和鍋先生！」

開けられた穴の向こう側、数え切れない傷を負った典佳が拳を突き出している。

「オウ…… ショウタイガバレマシタカ…… イズレニセヨ…… ワタシヲ…… ジャマスルモノハ…… ケス……」

典佳はそのまま地下室に降り立つと、牽制する魔物化した和鍋の視線を浴びつつケガを負った雅毅を抱え上げる。そして、クマさんの傘を握り締めたまま床に倒れる海涼の側にそっと下ろした。

「よくも力ワイイ教え子にケガをさせたな。この落とし前、きっちり付けさせてもらうからなっ！」

猛禽類のごとく鋭い視線を浴びせ、典佳は怯むことなく和鍋と相対する。

『いつ、痛いよ……』

まだ覚醒しきっていない意識の中、海涼は体に鈍い痛みが走る。

どこがどんな風に痛いのかはつきりしていないが、自分の意思を持つて動かそうとすると電撃のような痛みが貫く。

「こっ、ここは……」

ようやく意識を取り戻した海涼は、置かれた状況を理解するため五感を働かせる。

まず、頭と視線の位置から自分はうつ伏せの状態であり、頬に当たるものは冷たさから床だと分かる。

今度は両手と両足を動かしてみる。右手、動く。左手、何か細長く案外しつかりしたものがある。質感も感じるし何となく指も動く。右脚、何とか膝も曲がるし動く。左脚、動くみただけど、何だか痛い……

交通事故直後のむち打ち症のように全身に痛みが走るものの、自分の意思で体が動くことを自覚した海涼は慎重にゆっくりと体をもたげる。左手に持った傘を杖代わりに起き上がり、痛みを感じる左脚をかばいながら膝から立ち上がる。

「こっ、これって……」

傘を突いた状態で周囲を見渡してみると、いつどのタイミングで現れたか分からない担任の先生と、グロテスクで巨大な魔物が戦いを繰り広げている。

視点を変え足元に向けると、長いソックスはどこかしこも傷つき裂かれ、露になった素肌は擦り切れ血が滲んでいる。そして、唯一痛みとして認知できた左脚を上から擦ってみると、膝の頭頂部に激痛が走り、ソックスを下ろして露になったそこは青紫に染まっていた。

「骨……とか、だいじょぶかな……」

確信は持てないものの、何とか立つことができホッと安心したかった。だが、足元にある人らしき左手を目にし、安堵感から一気に悲壮感へ突き落とされる。

「まっ、マークくん！」

瞬時に誰なのか分かった海涼は、しゃがみ込むと傘を置き雅毅の上半身を持ち上げる。

意識を失ったままの雅毅にはメガネがなく、額や頬を擦り傷や切り傷で覆われ血が伝っている。それ以外の外傷はなく、重いケガはないようである。

「マークくん！　マークくん！　しっかして！　お願いだから、目を、目を開けて……」

ずっと意識を失った状態の雅毅に、海涼は悲痛な思いで温もりを確かめるように頬と頬を重ねる。いつしか流れ落ちる雫が雅毅の頬に何粒も落ち、凝固を始めた血液と混ざり合う。

「お願い！　目を覚まして、そして笑ってよ！　お話してよ……怒ってよ……何でもいいから！」

こんなに近くで温もりを与えても気付かない雅毅。どこか遠くへ行きそうな思いを繋ぎ止めようと、必死に頬を擦り付ける海涼。涙で浮かんだ血液が海涼の頬にも付き赤く滲む。

「お願い……気づいて……」

典佳は激昂していた。

学園内を混乱に陥れ、何十人もの人々に危害を加え他人を虐げてでも目的を達成しようとする考えを。そして、何よりも自分の教え子の命を奪うなど、それが国家権力だろうが全知全能の神だろうが許せない。

「このクソやろおおおっ！」

典佳は感情を剥き出しに飛び掛り、魔力を必要としない肉弾戦を挑む。構内の魔物達を掃討しようと戦っていた時の疲労感が消え去り、湧き上がる力を拳に込め戦う。

「フン……イマノワタシニ……ブツリテキコウゲキヲ……アタエルノハ……フカノウダ……」

瞬発力を生かした跳躍をする典佳を、和鍋は腕を振り払う程度の動作で叩き落す。それでも怯まず、彼女は繰り返し攻撃に打って出るが手応えはなく、まったくダメージを与えられない。

「くそおおお！ まだまだあああっ！」

蓄積されていく疲れとダメージを屁とも思わず、典佳は学園のため、自分が育てる生徒のため戦う。

「とりやあああっ！」

腕を振り下ろした瞬間を逃さず、典佳は跳躍一番で顔の高さまで飛ぶと、体重を乗せた最高の回し蹴りを和鍋の側頭部に叩き込む。グシャッと何かが折れる音のようなものが聞こえ、和鍋の頭は首を支点に鈍角に曲がる。

「ハア……ハア……どっ、どうだ！」

手応えを感じた典佳は床に着地し、体勢を整えながら和鍋を見据える。

「……グツ……ナカナカキキミシタヨ……カシマセンセイ……」

折れ曲がったまま口を開く和鍋は、両手で頭を挟み込むと元の位置に戻すため首を曲げる。グシャッと再び鈍い音がすると、和鍋の首は正常な位置に戻っていた。

「うっ、嘘だろ……」

人知を超えた異様な光景に絶句し、完全なる力の差を感じた典佳。
「サテ……コンドハ……コチラカラ……コウゲキヲシヨウ……」

正常に首が動くかを確認した和鍋は、直立する典佳に向け右腕を突き出す。

「グアアア……ゴウハツ！」

紡ぎ出された呪文と共に、発せられた衝撃波は典佳に目掛け突き進む。それを何とかかわすことに成功したものの、それは第二の事故へと発展していた。

「しっ、しばはらあああ！」

典佳は叫ぶだけで精一杯だった。彼女の背後には傷つき意識を失った雅毅と、脚にケガを負った海涼がいたのである。

二人を飲み込もうとする衝撃の波。激しい風が荒れ狂い、細かな石や室内にあるありとあらゆるものを巻き込む。

目の前に迫る衝撃波に、海涼はもう恐怖を抱かなかった。さつき負わされたダメージが残るものの、雅毅を守りたいという思いが恐怖を超越し凄まじい潜在能力を引き出す。

「マーくんは絶対、私が守るんだからあああっ！」

瞬時に持ったクマさんの傘を両手で横に持ち、ただ守りたいというイメージだけで衝撃波に立ち向かう。

バチ バチ バチ

突然静電気のような音が耳に届き、恐る恐る片方ずつ目を開く。

すると、目の前には放たれた衝撃波と、それを防ぐヴェールのようなものが激しく摩擦していた。

「えっ……これって……」

目の前で展開していることに理解できず、激しい風の中で海涼は攻撃を防いでいた。

「わっ、私、攻撃を、防いでいるの……」

自分でも信じられない能力を前にし、思考回路がめちゃくちゃになる。

「だいじょぶ……だいじょぶだからね、マーくん……」

気を失ったままの雅毅を見下ろす余裕の出た海涼は、受け止めていた衝撃波をどこかに逃がすというイメージを持って弾き飛ばす。巨大な気の塊は軌道を変えると、右手の壁に衝突し激しい爆音と共に、爆風と破壊された壁の破片を撒き散らす。

「ナツ、ナンドト…… コウゲキヲ…… ハジイタ……」

誇示している自信を挫かれた和鍋は、顔に焦りの色が現れる。

「アイツ…… なかなかやるじゃないか！」

爆風と共に舞い上がった砂塵に視界を遮られ、目元を腕でかばう。地下室は砂塵で覆われしばらく目を開けることができなかった。そして、荒れ狂っていた風も砂塵も収束に向かい、だんだんと視界が開けてくる。

「けほっ、けほっ……」

全身土埃を浴びせられた海涼はむせながら両目を開け、ようやく室内を平静が包む。

「うわっ…… すっごい……」

自分自身も砂埃を纏い、室内も薄暗いながら動揺の光景が広がっている。

「あれ？ 何だろ、紙…… かな？」

何となく見上げた海涼は、宙をひらひらと落下してくる紙らしきものを見つける。左右に揺れながらそれは海涼の目の前をかすめ、ふわっと床に着地する。

薄暗い床に落ちた紙を拾おうと、海涼はゆっくり屈みつかもうとした瞬間、光よりも速いスピードで白い何かが視界を遮った。

何かが心を包み込んでいた。

あったかくもあった。冷たくもあった。

中途半端に温かい湯水に浸かってるような、心地いい気分がした。体が宙に浮いたようなフワフワとした気分の中、反射的に目を閉じた海涼はゆっくりと開く。

「こっ、こっは……」

海涼の視界に入ってきたのは、何もない無。

一面に広がる真っ白な大地。上なのか下なのか、重力の観念を消失させる世界に海涼はいた。

「あれ？ えっと、さっきまで地下室にいたはずじゃなかったっけ？」

記憶を失ってしまったのかと、自分自身に問いかけ意識があることを確認する。

「……あつ！ マークくん！」

周囲を見渡していると、前まで地下室の床に倒れていた雅毅の姿を見つける。

「マークくん！ マークくん！ しっかりして」

自分の置かれた状況を確かめないまま、海涼はうつ伏せに倒れている雅毅に駆け寄る。

呼びかけにも反応を示さず、屈み込むと優しく体を揺する。

すると、うつ伏せの雅毅の体から半透明状の人影が煙が立ち昇るように現れる。

「えっ！ まっ、マークくんの幽霊さん？！」

不安定な形をしていたそれは徐々に姿を形成し、着物を着た一人の少女が現れる。

「あつ、あなたは、誰なんですか？」

見た感じ、日本人形のような涼やかな雰囲気醸し出す少女は、閉じていた両目をゆっくり開ける。

『……わたしは鞠花……おじいちゃんである陣馬浩二郎の孫……』

幼いながらもしっかりと口調で、和服の少女、鞠花は雅毅の体の上で浮かんでいる。

「鞠花……ちゃんか。あの、ここがどこなのか教えてくれないかな？」

『ここは……わたしの中……何十年もの永い時を生きてきた場所……』

浮かんだままだった鞠花は、雅毅の体から降りると足袋を履いた

両足で降り立つ。

「鞠花ちゃんの……中？」

『……二人には、どんな言葉を言っても許してもらえないでしょう。事件に巻き込んでしまったこと、雅毅さんに憑依していたこと。そして、おじいちゃんが残したレポートのこと。二人に知ってもらいたいんです。わたしの……おじいちゃんの願いを……』

淡々と話を進める鞠花。しかし、その表情は暗く沈み憂鬱感に満ちている。

「鞠花ちゃんの……願い……」

吸い込まれるような円らかな瞳を見入っていた海涼は、起き上がる雅毅にやっと気づく。

「うつ……こつ、ここは……海涼……どこなんだ？」

石を頭の中に詰め込まれたような重さを感じながら、雅毅はゆっくりと起き上がる。

「あつ、マーくん！ 気づいたんだね？」

「あつ、ああ……って、誰だ、そいつ？」

一緒に立ち上がった雅毅は、海涼と一緒にいた和服の少女に目が止まる。

「この世界の人で、名前は鞠花ちゃん」

無愛想に互いを見つめる雅毅に、海涼は名前を教えてあげる。

『二人にお話します。全てのことを……』

感情に左右されず我を通そうとする鞠花は、異空間に呼び込んだ二人に語りだそうとする。

限りなく続く世界の一部分が映画を映し出すスクリーンのようになり、そこにセピア調の映像が流れる。

台の上にガラス管やフラスコを並べ、多くの白衣を纏った多くの研究員達が、研究に打ち込んでいる。その中心にいて、指示を与える初老の男性。きりりと締まった真剣な眼差しで熱心に研究に打ち込み、手にした研究資料と向き合っている。

その様子が画面の中央で流れていたと思ったら、次のシーンに移

り、無邪気に笑顔で手を振る鞠花のカットに切り替わり、抱きかかえられるところまで流れる。

『私が産まれて間もない頃、早くに両親を亡くしました。そのため、身寄りのない私はおじいちゃんの家に取り込まれました。両親を亡くした悲しみなど知らなかった私は、大好きなおじいちゃんがいるだけで幸せでした』

映像は続き、多くの書物に囲まれメガネを掛けた浩二郎。書物と睨めっこをしながら、万年筆を片手に何かを写し取っている。その現場を目撃した鞠花は、一度おじいちゃんを呼び、手鞠を持ったまま駆け寄る。気づいた浩二郎は鞠花を膝の上に乗せ、鞠花と会話をしている。

『おじいちゃんは、私のことを大事にしてくれました。決して寂しい思いをさせませんでした。そのおじいちゃんは、ある魔術を研究していました。』

それは、過去へ行ける魔法。

ほんの数分にしか過ぎませんが、おじいちゃんは私の記憶にない両親の姿を見せたかったです。心の奥に眠っている拭い切れない悲しみを和らげたくて、おじいちゃんは晩年をこの研究に捧げました。

ですが、私が魔術の完成を前にして死んだため、魔術が使われることはありませんでした。一度も……』

自分の過去と魔術の内容を語り終えると、映し出されたスクリーンは消え再び白い世界が広がる。

事実かどうか確認の術がないものの、鞠花の話してくれたことを真摯に受け止めた雅毅と海涼は、込み上げてくる今までにない感情の奔流に流され気持ちが一杯になった。

『お二人には、謝っても謝っても、謝りきれないほど辛い目に遭わせてしまいました。けれど、知ってもらいたかった。陣馬浩二郎、大好きなおじいちゃんの思いと、使ってあげられなかった私の思い。そして、何よりも、あななたちに巡り合えた、この瞬間を……』

手を差し伸べた鞠花の手の中は具現化された手鞠があり、それを海涼に渡そうとゆっくりと近づく。

「ずっとここで、私達が来るのを待ってたんだね……ありがと、話してくれて」

膝を屈め、鞠花とほぼ同じ高さになった海涼は、差し出された手鞠を受け取ろうと手を伸ばす。受け取ろうとした瞬間、手鞠から眩い光線が迸りあつという間に視界を遮られる。

『……どうか……忘れないで……』

繰り返される殴打音と破壊音。

教え子を守るため、典佳は強大な力を得た和鍋と戦いを演じていた。しかし、力の差は歴然とし太刀打ちできる相手ではなかった。

「くっ、クソッ……どう足掻いても、勝てる相手じゃないのか……」

和鍋の攻撃を直撃した典佳は、もう何度目になるか分からないほど壁に床に叩きつけられていた。教師という立場から、己の命を賭けてまで守ろうとする典佳。ダメージと疲労感で埋め尽くされる体を突き動かしているのは、守りたいという気力だけだった。

「フハハ……コウサン……スルキニ……ナツタカ……」

力を得た和鍋は、己の力に陶醉するように典佳を弄んでいた。懸命に仕掛けてくる彼女を軽々跳ね返し、絶対的力を誇示する。

「だっ、誰が降参するか。生徒を守るのは、教師の役目……お前のような……人間のクズに……負けて……たまるもの……か……」

必死な思いで立ち上がるものの、体力はピークを超え体が思い通りに動かない。そして、

典佳は崩れ落ちるように床に倒れる。

『あつ、あたしは……生徒を……守れない……教師……なのか……』
ひんやりとした感触のする頬を床に付けたまま、薄れゆく意識の中で呟くのだった。

「……先生！ 典佳先生、しっかりしてください！」

誰かが叫んでる……女の子の声だ……

先生？ 助けに來た先生がいるのか……

ようやく意識を取り戻し、雅毅は薄目を開けて周囲を確認しようとする。一面に広がる霞がかった世界。眠りから覚めたような視界のぼやけに、両目を擦ってみる。それでも霞は拭えず、仕方なく体を起こす。

「先生！ 目を開けてください！ 先生！」

薄暗い世界の中で、女の子が誰かを揺り動かしている。ぼやけながらもその様子が見えた雅毅。

「あつ、マークくん！ 気づいたんだね！」

「あつ、ああ……」

マークくんというガキっぽい呼び方に海涼であることに気づき、ぎこちなくではあるが右手を挙げる。不規則な靴音が近づき、起き上がるのに精一杯の雅毅の視界に海涼の顔がようやく見える。

「だいじょぶ？ どこか痛いトコない？」

安堵感に包まれた顔には土や擦り傷があり、ことの重大性を物語っている。

「どつ、どうしたんだよ、その顔」

「その……いつもみたいに魔法が失敗しちゃって……」

この場の雰囲気や和らげようと、海涼は自らの失敗談を持ち出す。「つたく、いっつもドジだなあ……」

ケガを負った顔でもなお、雅毅は笑みを浮かべる。

「エへへ、ゴメンね……」

そのまま雅毅を立たせると、海涼は傘を杖代わりに突き、連れ添って倒れている典佳の元へ行く。

「マークくん、典佳先生が気づいてくれないの、何とかして助けられないかな？」

ぎこちなく床に倒れた人物を見ていくと、紛れもなく担任の典佳だった。

「むっ、無理なこと言つなよ……」

「でつ、でも……」

お互いの確認をし合う中、腹の底から響くような音色の悪い声が耳に入る。

「オマエタチ……モウ……ユルサン……ワタシノ……サイダイノチカラデモツテ……シマツシテヤル……」

頭上に迫った声に恐怖感を抱き、海涼は雅毅の左手を握る。繋がった指先から温かさと震えが伝わり、どんな状況なのか理解する。

「……もう、打つ手はなし、か……」

握られっぱなしの手の感触を覚えながら、ぼやけた視界のまま見上げる。

「……さん、マサキさん……雅毅さん」

突然、体内からこだまする声。聞き覚えのあった雅毅は、意識を集中させる。

「……私が、あなたに力を貸してあげます。その力を使って、取り憑く魔物を浄化してください」

「浄化しろって言われても、どうすればいいんだよ？」

「大丈夫……あなたならできます……なぜなら……」

その理由を追求しようとした矢先、吸水したスポンジのようにどんどん内から力が湧き上がり、全身に満ち渡るような力の存在に気づかされる。

「オレに……できるか……やってみようじゃないか……」

体から満ち溢れている海涼でも感じることできる力の存在に驚き、海涼は握っていた手を離してしまふ。

「どっ、どうしたのマーくん？」

「後ろ……支えてくれないか……」

半信半疑のまま、海涼は言われた通り後ろに回りこみ自分の持てる全ての力を両腕に集める。

「フン、ナンノマネダ……」

力の蓄えを完了した和鍋は、二人の不自然な行動に気づく。

「あんたの中に取り憑いたヤツを……浄化するんだよ……」

傷ついた体のまま、雅毅はゆっくりと右手を開いて和鍋に向ける。
「ジョウカダ……ワラワセル……ソノママ……シャクネツジゴクデ……モガキツツケルガイイ……シエン！」

図太い両腕を突き出し、和鍋はジェットのような質量の濃い炎を固まっている雅毅達にぶつける。

「頼むぜ……炎に焼かれるのは……葬式の後で十分だ……」

迫り来る巨大な炎を前にして、雅毅の腕から一条の光線が放たれ、飲み込もうとする炎を掻き分けて突き進み、勢いが衰えることなく和鍋の体を貫く。

「グアアアアアアッ！」

獣のような咆哮と同時に、光線に触れ部分から全身に渡って眩い閃光が包み、体から上空へと黒い靄のようなものが消えていく。

「水海道君……柴原さん……無事か？」

この事件は終わりを告げた。

激しい戦いの末、雅毅は和鍋に憑依した魔物を浄化し事態に終止符が打たれたのだった。

「はっ、はい……」

聞き覚えのある声に弱々しい声で、雅毅は受け答える。

海涼が見つけてくれたレンズにヒビの入ったメガネを掛け、雅毅は海涼の膝枕に頭を乗せ天井を仰ぐ。

一緒にいる姿を確認したリッド達とアンリは、動けそうにない状態の三人の元と向かった。

「和鍋に勝ったようだね。おかげで、学園内をうろついていた魔物達が消えたよ」

それぞれ戦い傷つき、ダメージと疲労を纏った皆が雅毅の顔を見下ろしている。

「そっ、そうですか……それは、良かった……」

ぎこちない笑みを浮かべていると、ユークリッドが手を伸ばし雅毅の手を両手で握る。

「みんなにも見せたかったです……マークんの活躍……」

空いている片方の手を、海涼は両手で包み込む。その手は、浄化する光線を放った手であり、自分達の命を救った手でもある。

「見たかったです……水海道君の活躍」

「自分もだ。学園の危機を救った現場に立ち会いたかった」

真琴もマリーシアも学園のヒーローである雅毅に、賞賛と感謝の念を伝える。

「わたくしは、事態の收拾の旨を伝えるため、学園長殿の元へ行く。皆も、ケガの治療などあるから、速やかに来るように」

戦い傷つきながらも、アンリは気を失ったままの典佳を肩に担ぐと、穴の外へと凄まじい跳躍を見せる。

ぼろぼろになった地下研究室をリッド達は探索し、探し求めているレポートによく巡り合う。

ずつと膝枕しているのも嫌になった雅毅は、志願した海涼と真琴に支えられ立ち上がる。

「やっと見つけ出したよ、禁術を記したというレポート。これも全て、君達のおかげだ。もう、どんな言葉をもつてしても、感謝がしきれない」

かなり年季の入った紙に書かれた意味不明な文面。レポートを持ったユークリッドの周りに皆が集まり、それぞれ違った思いを持って見ている。

「ねえ、この術を試してみませんか？ 今は誰もいませんし」

そう提案するは海涼。

リッド達も気になる様子で、レポートの文面を注意深く読み取る。

「うーん、どうやら数分だけ過去へ遡ることができるらしい。だが、使用できるのは一回だけ。誰が試すんだい？」

「みつ、海涼に、使わせてやってください……」

そう提案する雅毅の顔を、当事者の海涼は驚きを隠せない。

「えっ……私？」

「お願いします……」

深く追求や理由を聞かないまま、雅毅はリッド達の顔色を窺う。

「僕達は別に構わないが、水海道君が試さなくてもいいのかい？」

「いいんです。オレなんかよりも、必要としているんですから……」
必死に優しく微笑もうとする雅毅だが、顔が引きつって思うように
にいかない。

「そう言ってるんだが、君の意見は？」

「……はい、私……試してみます」

自力で立つと言う雅毅は、海涼に試す任を与え離れて見守ることにした。

「準備はいいかい？ 成功するか自信はないけど、ベストを尽くすから」

「……はい！」

三人はレポートを持つユークリッドを中心に並び、記された呪文を、声を揃え詠唱を始めた。そして、海涼は……

和鍋の事件から一夜が明け、学園内はようやく平穏を取り戻そうとしていた。

建物の破損は各所に見られたが、学校生活の支障になることはないものの、生徒達のケアや修理などで臨時休校となっている。

「あなたたち、今日来てくれてありがとう。事件に巻き込まれた余波があるのに、いろいろ話してくれて」

休校となった学校に呼び出された雅毅と海涼。事件の後、医務室にて治癒魔術のできる教師や生徒の力を借り治療を受けた。そのかいあって、雅毅の顔の傷や海涼の脚の痛みも今はない。

「じゃあ、今日はゆっくり体を癒してくださいね」

「はい」

「……はい」

昨日の事件のことを聞かれた二人は、知っている範囲のことを理事長の八代暁子に話した。大まかな詳細はリッド達の話でもって知っていたため、雅毅達には参考程度の話聞いたのだった。

礼儀正しく理事長室をすぐ出たところでアンリとすれ違い、にこやかに会釈する彼女に合わせ海涼は丁寧な雅毅は大雑把に返す。

「失礼します」

「アンリ先生ですね、どうぞお入りになってください」

常に柔らかな口調の理事長の言葉を受け、きちっとした礼節を持つて入る。

「アンリ先生、仕事は完了しましたか？」

どの仕事を指摘しているのか分からないものの、差し伸べるているソファに座る。

「ええ、はい、なんとか落ち着きを取り戻しました」

「そうですか。首謀者の和鍋先生には処分を与えました。昨日の事件も内部で処理しますし、全て丸く治まると思いますよ」

さきほどまで雅毅達と会話をしていた理事長は、アンリと向かい合ったソファに座り全てを包むような温かな笑みを浮かべる。

「そつ、それは良かったです。構内を巻き込む事態に発展しましたが、水海道君達お陰で救われたと思います」

苦労を重ね、学園内を調べ上げた先の終焉に、何かあつけないような物悲しさを感じる。

「そうですか。水海道君達は、そこまで頑張ってくれたんですね」

「はい……」

互いの腹を知り尽くしている両者は、あえて何も口にするることなく時の経過に身を委ねる。

「あつ、そういえば、肝心なことを訊きそびれていました」

何だろうかと、アンリも内容が気になる。

「皆さん揃って『禁術』とばかり言ってますが、その術の内容は何だったのですか？」

自分の琴線に触れない内容に、ほっと安堵感が沸き起こる。それでもアンリは、内の感情を表さず事務的に答える。

「さあ……わたくしにも分かりかねますが」

「……そうですか」

アンの隠そうとしていることが分かったかのように、理事長は優しい笑みのまま何度も頷くのだった。

エピローグ

エピローグ

あの大事件が遠い過去だったかのように、私立カシミシユナ学園の学校生活は静かに進んでいる。破損した各施設の補修も完了し、じつと目を凝らして見ない限り以前と違う点に気づかない。学園に關係する人物全員が、あの時の事を思い出そうとはしなくなった。学園全体に記憶を失くす魔術でも施されたかのように……

季節は春から夏へと向かい、構内を歩く生徒達も冬用の制服から夏用へと移行している。

「はあゝ夏がすぐそこって感じだね」

いつの間にか定位置になった窓辺に佇む、ヘルメットを被ったような髪型の女子生徒。しかし、前回とは異なり、どこか楽しそうで眩いぐらいに輝く陽射しに包まれていた。

「そうだな」

「あつ！ あそこに大きな入道雲がある！」

それぞれ夏用の制服に身を包み、窓の外に広がる空と雲を眺めていた。

溢れ出る魔力の持ち主だった雅毅は、あの事件以来、魔力が極端に低下し一般生徒並みになってしまった。それでも、海涼は体勢を変えず常に行動を共にしようとしている。

「相変わらず魔法が上達しないなあゝ。どうしてかな？」

愛用のクマさん傘を左手に置き、海涼は何となく呟く。あの時のような魔力の高まりはなく、学校生活は天然娘を貫いている。

「まあ、あん時は、誰かを守りたいとかって思ったからできたんじゃないか？ 証拠に、毎回毎回実習は失敗ばっかだし」

意地悪く笑みを見せつける雅毅に、海涼はさりげなく足を踏みつける。

「ちょっと……言い過ぎた」

すかさず訂正を入れると、フグのようなふくれっ面を元に戻す。

「まあ……何だ、オレも力が弱くなったし、デキの悪い者同士、ガンバツか。いいかげんに思ってた『魔術』をもっと真剣に考えてみる」

ちよつとした決意表明を聞いた海涼は、嬉しさに顔が綻び太陽のような笑みを浮かべる。

「そう言えば、あの時のお礼を言ってなかったね」

何かを思い出した海涼は、口元に手をやりハツとした表情になる。

「お礼？」

「一度しか使えない禁術を使わせてくれて、ありがとう」

面と向かってお礼を言われるのが慣れていないのか、顔を俯かせこめかみ辺りを掻く。

「あつ、ああ、あれか。あん時は、オレはボロボロだったし、魔術を使うなんて、オレ、何となく怖かったし……」

「マーくんて、無愛想なんだけど、ホントは優しいんだね」

曖昧な理由で誤魔化した雅毅に対し、海涼は下から顔を覗き込みながら微笑むのだった。

『前に話してくれたじゃねえか。一回でもいいから、ジー君と遊びたいって……』

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6024f/>

マジシャンズ・リリック

2010年10月8日14時44分発行